friend and world!!

日本娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆｒｉｅｎｄ　ａｎｄ　ｗｏｒｌｄ！！

【Ｎコード】
Ｎ０３４１Ｔ

【作者名】
日本娘

【あらすじ】
世界を救う人間としてヘタリアの世界に呼ばれたバカでアホな仲良し四人組は同じく世界を救うことができる枢軸・連合の八人と命を狙われながらも平和？な日々を楽しく過ごして行くのだった……

更新が遅い＆駄文＆小説書く才能がまったくと言っていいほどない作者が書いています。
どうか生暖かい目で見てください；；

ちなみに主人公四人組はバカですw

只今、毎日更新を目標にがんばっております。

主人公達の設定（前書き）

二次元大好き少女、黒須ほのかが大好きな友達を道連れにヘタリアの世界に行っちゃうお話の設定です

作者は夢小説と二次創作の区別がわかりません。
誰か教えてもください；

これって夢小説ですか？

主人公達の設定

はじめましてりやきバーガー！
この小説の主人公その１の黒須ほのかです！
イェイ☆
まぁこの小説の語り？は基本私です！
じゃあこの小説の主人公達を紹介するねー♪

☆主人公達☆

・黒須ほのか
まぁ、さっきも言った通り主人公その１っす。１２月１５日生まれのＢ型です☆
大好きなのは二次元と後で出てくる私の友達三人とお餅です。
性格はバカですね、ハイ。夢見がちの
作者によると誰にでも優しい癒されるキャラらしいです。照れるじゃまいかｗ

あと人見知りします☆シャイなんだよ私は
姿はメガネをかけていて肩につくくらいの髪を下の方で一つ結びにしてやす！
身長は１５５ｃｍくらい？
あ、ちなみに年齢は秘密でさぁ☆まぁ設定としては中学二年生かな。
これで私の説明は終わりです！
次は私の親友！主人公その２でさいほのこと齋藤ほのかに説明してもらうよ！

はじめまして、
齋藤ほのかです。
さっきまで説明してたバカと名前が同じなのは偶然です。

・齋藤ほのか
主人公その２です。３月１８日生まれのＯ型です。ニックネームはさいほのです。大好きなのはミス〇ルです。
性格は真面目です。たまに壊れます。作者によると真面目なんだけどみんなを笑わせる事が好きで少々ツンデレらしいです。作者殴りてー
姿はきれいに整ったショートヘアーで前髪をピンでとめてます。
身長は１５５ｃｍくらい。黒須と同じくらい
設定としては中二です
これで説明は終わりです
つぎは主人公その３のなつじだ。

はじめましてー！
なつじこと中島菜摘です！主人公その３です！

・中島菜摘
主人公その３です！
７月１日生まれのＢ型です！！
大好きなものは二次元とみかんゼリー！
ニックネームはなつじ！
性格は作者いわく普段は優しいがたまにドＳになる……そんなことないよ？あとで作者殴るか
姿はメガネかけてて下の方で二つ結び！
身長は……うん……聞かないで……
設定では中二だよ！
説明は終わりです！
次はキング・オブ・バカの主人公その４、苑子だよ！！

はじめまして！
薮崎苑子です！
主人公４だっぺ！

・薮崎苑子
主人公その４だっぺ！
１２月１３日生まれのＯ型！
大好きなのは二次元となつじと桃ゼリー！
性格はなつじが言ってたようにキング・オブ・バカだよ！あと天然？作者いわくこんなんなのに実は腹黒いだって！そうなんだぁー…？
姿はメガネに短い髪を下の方で一つ結び！前髪はない！
身長は１５７ｃｍくらい？なんかよく黒須と双子みたいっていわれます。そんなに似てるかな？
中二って設定！
これで全員の説明は終わり！
本編はまた今度！

それではっ！

さよーならーっ！（四人）

主人公達の設定（後書き）

……こんな感じでやっていきます

グダグダだけどよろしくお願いします！

感想出来たらお願いします人（´∀`＊）

その1　四人の日常（前書き）

私は願っている

四人で一緒に行くことを……

ｂｙほのか

この話では主人公たちとヘタリアキャラはまだ出会いません

ちなみにいつどうやって出会わせるかまだ考えてません……；

その1　四人の日常

はじめまして！
あれ？こんにちはかな…
いやでも設定を読まないで見てる人もたぶんいるだろうし……
まぁいいや
改めましてこんにちは！
黒須ほのかです！
この春、中学二年生になりました
あ、みなさんに言っとくことがあります
私、二次元大好きです。
まぁわかりやすく言うとアニメ大好きってことです

二次元行きたいって毎日思ってます

毎日お願いしてるんですよ？

「二次元に行かせてください」って……

あ、今みんなひいたでしょ？ひいたよね？

完全に私をイタイ人って認識しちゃったよね？

私はＯ・ＴＡ・ＫＵ☆っていう奴らの仲間じゃないよ？

え？なんでオタクをローマ字にしたかって

決まってるじゃないか

カッコイイからだ

え？あんまりかっこよくねーよだって？

細かいこと気にしてたら将来死ぬよ？

あ、いずれ死ぬか

まぁそれより私は日々二次元に行きたいと願ってるわけですよ

ん？いつからそんなことやってるのかだって？

ひーふーみー……三年前くらいかな？

そんなに願っててもニ次元に行けてないんだからもうあきらめたらって思ってる人、挙手！

はい、今手を挙げた奴

呪うよ？

信じていれば絶対願いは叶う！！はず！！

まぁこんな私ですが、受け入れられる心の優しい方は本編を読んでください！

え?今まで本編じゃなかったのかって?

何言ってるんだよ

本編じゃないに決まってるじゃないか

てことで本編へレッツゴー!!

ほのか「おっはよー!!」

さいほの「おはよう。朝からウザいテンションだな」

今は7時40分。私達は毎日、私の家でこの時間に待ち合わせをして学校に行く。

いきなり毒を吐いたのは私の親友、さいほのこと齋藤ほのか。

いつもは真面目だけどたまに壊れます。気をつけた方がいいよ

ほのか「あとは苑子となつじだね」

さいほの「うむ」

……

……

来ねぇぇえ!!!

ほのか「……来ないね」

さいほの「薮崎が事故ったんじゃない？」

ほのか「いやなつじが川に落下したのかも」

さいほの「いやいや二人ともトラックにひかれて即死したんじゃない？」

私とさいほのがとんでもないことを予想していると、向こうの橋から二人がのろのろと歩いてることに気付いた

二人が来たのを確認して私とさいほのは先に話をしながら歩き始めた

昨日のテレビの話、今日の授業の話、ミス〇ルの話。

こんな中学生の普通の女の子が話している平和な空間はあるキング・オブ・バカによって破壊される……

苑子「くっろすーー!!」

ほのか「ぐほっ!!」

朝からうるさすぎる声と共に背中に痛みと重みを感じる

なつじ「チャオー♪」

さいほの「おー」

ほのか「苑子!!毎朝のようにハンパない力で私を押すのはやめろって昨日言ったばっかじゃん!!痛いんだよ!?吐きそうになるんだよ!?」

苑子「えー、昨日言われたから今日はのしかかったんだよ?」

ほのか「そういう問題じゃねーんだよ」

この二人は私の友達。

私に飛び掛かってきたのは薮崎苑子。

一言で言うとキング・オブ・バカ。

もう一人ののほほんとした奴はなつじこと中島菜摘。毒舌で背が小

さい

……なんかなつじからめちゃくちゃ睨まれてる気がするけど背が小さいのは本当だから私は気にしません

さいほの「早く行こう。黒須、今日私達の班が日直だよ」

ほのか「あ、忘れてた」

苑子「日直ちょくちょくー♪」

なつじ「うるさいよ？」

～学校～

ちなみに私とさいほのは二組。なつじと苑子は四組。

一年生のころは全員三組で同じクラスだったのに、離れました

学校の先生が憎いです

ほのか「さいほの学級日誌取りに行こう」

さいほの「一人で行けバカ」

ほのか「おめーも日直だろーが」

苑子「私達も行くっぺ！！」

なつじ「眠い」

苑子となつじは三分前にわかれたばっかなのにいつの間に制服からジャージに着替え、二組のドアの前にいた。

ほのか「着替えんの早っ！！」

なつじ「ついでに音楽の教科書貸してくんない？忘れちゃった」

苑子「わっちは英語の教科書～！！」

ほのか「忘れんなよ。成績下がるよ？あと今日英語の授業ないから持ってないよ。はい、音楽の教科書」

私はなつじに音楽の教科書を渡した

なつじはサンキューっと言って笑った

さいほの「あ、私英語の教科書持ってるよ。はい」

苑子「おー！！さいほの神！！」

ほのか「早く行こー」

苑子「あとでトマト見に行っていい？」

さいほの「おー」

私達二年生は技術の授業でトマトを育てている

私とさいほののトマトは順調に育っている。ちゃんと水とあげてるし、愛情もそそいでるからね

しかし苑子となつじのはなぜか瀕死状態
瀕死状態にも関わらず苑子はトマトの世話を一生懸命やっている
そんなにトマトが食べたいか

なんだかんだで学級日誌を取りに行き、トマトの様子を見に行った

なつじ「親分、元気？」

ほのか「うぅん、なつじがうざくてうざくて仕方がないから元気じゃないんだ（裏声）」

さいほの「消え失せてしまえ～（裏声）」

なつじ「いっぺん死ぬか？」

苑子「黒須とさいほののトマト元気だね」

ほのか「私のトマトの名前、アントーニョだよ」

さいほの「また意味不な名前を」

さっき言った通り私は二次元が大好き、
その中でもヘタリアが大好きなのです。
苑子となつじもヘタリア好き。

さいほのは二次元に興味はないみたいだけど私達がヘタリアの話をしてばっかだから登場人物の名前は少し覚えているらしい

まぁ、私達四人はこんな感じでいつも過ごしている
こんな個性的な私の友達だけど

私はこの三人が大好き
ずっと一緒にいたい
四人で楽しく生きていきたい

だから私は毎日願っている

もし私が二次元の世界に行けるのなら

『私とさいほの、苑子、なつじの四人で行きたい』

と……

そのころ世界会議場……

アメリカ「日本、本当にやるのかい？」

日本「はい、私達はこの計画を実行しないと大変なこととなります」

イタリア「ヴェー……何の話？」

ドイツ「前から会議で話していただろう！」

イギリス「今、世界は危機をむかえている。」

フランス「どんなことになるのかわからないけどやるしかないんだよなぁ」

ロシア「それでその計画はいつ実行するの？」

日本「今日ですよ？」

全員「今日っ！！！？」

中国「いきなりすぎるある！心の準備ができてないある！」

日本「じゃ始めます」

中国「無視すんなある！」

日本「それでは実行します」

――異世界から世界を救う人間を呼び出す計画を……――

その１　四人の日常（後書き）

なんなんだこのグダグダ感

感想お願いします！

その２　日常から非日常に（前書き）

ひざまづけｗ

ｂｙほのか

第２話です！

楽しく読んでいただけるとうれしいです！

その２　日常から非日常に

こんにちは、ほのかです。
やっと６時間目の授業が終わりました

今は掃除の時間
私の担当は教室前の流し

あいかわらずきたねぇ

なつじ「黒須、はかどってる？」

ちっ、うるさい奴らが来ちまった

苑子「流しとか地味な掃除だよねｗ」

ほのか「トイレ掃除の君達に言われたかないね」

私は苑子となつじと話しながら流しをスポンジでこする

……汚れが落ちん…

なつじ「黒須～、雑巾ゆすいでー」

ほのか「自分でやりたまえ」

なつじ「ケチー」

苑子「なつじ行こう」

なつじ「うむ。じゃーね黒須っ！！私達はとぉっても目立つ掃除をしてくるよっ☆」

どこがだ

なんか疲れたな……

ここの掃除あきたし……

だってひたすらスポンジで絶対に綺麗にならない汚い流しを磨いてるだけだよ？

早く掃除終われー

キーンコーンカーンコーン

よし終わった

さぁ帰……れないじゃん

部活あるし
帰宅部になりてー

そして今帰りの会

前から思ってたんだけど帰りの会ってやる意味あんのかな？
くだらないから図書室で借りた本読んでよ

あ、なんかよくわからないけど帰りの会終わった

私は帰りの挨拶をしてから後ろの席のさいほのを見る

ほのか「さいほの部活行こー」

さいほの「うん」

私とさいほのは荷物を持って教室を出た

ほ・さ「こーんにーちはー」

私とさいほのは音楽室へ入った

音楽室に入ってる時点でわかると思うけど、私達は吹奏楽部。

入った理由は私の三つ上のウザい姉が吹奏楽だったため、何回か演奏会を見に行っていて素敵だと思ったからだ

いかにも普通の人が吹奏楽に入る理由の一つだ

なつじ「こんにちはー」

あ、なつじだ

え?なんでなつじだけだって?苑子はどうしたって?

説明しよう

私達四人は去年の４月に吹奏楽に入った

しかし入部してから約二ヶ月後……

苑子は退部したのさっ☆

バカだろ

普通中学生って休みの日も部活に行ってて忙しい

しかしあいつは帰宅部

一日中家に閉じこもりパソコン三昧

自分で言っていたが休日は一歩も外に出ないそうだ

だから夏休みは大変。

世間から見たら引きこもりだ

だってあれだよ？

去年の８月の上旬に苑子を含む友達と遊園地に言ったら、苑子は驚きの言葉を発した

「家出るの久しぶりだわーｗ」

私がこの言葉を理解するのにどれだけかかったことか

私達は忙しいのに暇&めちゃくちゃ暑い外に出てないだぁ？

観覧車から突き落とそうかと思ったわ

宣言しよう

薮崎苑子は将来ニートになる

私の予想はきっと外れないだろう

まぁそんなこんなで部活について

この前、新しく一年生を迎え人数が増えて音楽室が狭くなってるんじゃないかと日頃感じる私だが、吹奏楽の一員だから担当の楽器くらいあるさ

当ててごらん?

チューバ?はずれ!

クラリネット?違う

トランペット?朝ドラの主人公じゃあるまいし

一人寂しく手拍子?殺すぞ貴様

聞いて驚くなよ

フルートだ!!

あれ?もしかしてみんな驚いちゃってる感じ?驚くなゆーたやん

確かにバカでメガネでブスでアホでオタ（ｒｙ

だけど私はフルートだ

そしてたまにピッコロだ

さいほのはファゴットっていう長くて大きい低音の木管楽器

なつじはパーカッション

さーて練習しよーっと

あ、あそこでなつじとさいほのが話してる

私も入れてー!!

→練習する気まったく無し

なつじ「よぅ黒須。どーした?」

ほのか「暇だったからさ☆何話してんの?」

さいほの「今度四人で出掛けようって話をしてたんだ」

ほのか「いーねーっ！！私アニメイトに行きたい」

なつじ「賛成」

さいほの「反対」

ほのか「なんでなんでー？ケチゥィ～」

さいほの「つまんないもん。お前らはヘタリアのグッズを見て気持ち悪い笑みを浮かべてるし、なんか来てる人みんなオタクだし」

ほ・な「だってアニメイトだもん」

さいほの「……」

その時、私達三人の足元に光る魔法陣が浮かび上がった

なつじ「？何これ」

さいほの「きもっ」

ほのか「うわぁっ！なんか光が増していくよぅっ！」

うそマジ何これ

やだやだやだまだ死にたくない

→パニック状態

さいほの「落ち着け黒ちゃん！」

ほのか「黒ちゃんゆーなぁぁあああっ！！ぶっ殺すぞ！」

なつじ「はっはーん、殺してみやがれ」

ほのか「……（無言でなつじの手をめちゃくちゃ強く握る）」

なつじ「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！」

ウケるーw

さいほの「ふざけてる場合じゃないだろう！！ってあれ？」

気付いたら光はおさまり魔法陣は消えていた

風景はさっきと同じ音楽室

ほのか「……なんだぁ、二次元行けると思ったのにぃ」

なつじ「めちゃくちゃパニクってたけどな」

なつじは涙目だ

そんなに痛かったかなぁ？

もう一回やってみよう

なつじ「いだだだだだだだだ！！！」

さいほの「やめれ」

ほのか「チッ」

私はフルートを持って練習をしに行った

あ、もう6時だ

楽器片付けよう

お腹空いた……

今日の給食くそまずかったし

部活の反省会が終わり、私達三人は音楽室を出た

なつじ「あ」

ほのか「どーしたのスーパードS少女」

なつじ「んだとゴラ。教室にノート忘れちゃった。一緒に取りに行こう」

さいほの「一人で行けハイパードS少女」

なつじ「なんでランクアップしてんの？一人はやだよー！！真っ暗だもん！」

今は5月だが6時だから学校は真っ暗だ

仕方ないついていってやろう

そのかわり……

ほのか「ひざまづけ」

なつじ「誰がするかバカタレ」

私達は今、四組の教室のドアの前に立っている

さいほの「……早くドア開けろよ」

なつじ「やだ」

ほのか「じゃあひざまづけ」

なつじ「お前はだまってろ」

さいほの「ちっ……仕方ねーなー……」

さいほのはドアを開けた
そこにいたのは……

ほのか「ぎゃぁぁぁああああっ！！幽霊ぃぃいいいっ！！」
なつじ「ひぃぃいいいっ！！こっち来んなぁぁああ！！」
さいほの「悪霊退散」
さいほの、なんでそんなに冷静なの
足はめっちゃ震えてるけど
うわっ！！幽霊こっち来た！！
さいほの「うわぁぁああああっ！！来るなぁぁああああっ！！」
あ、さいほのぶっ壊れた

ガタンッ、ズテッ
ほのか「あ……」
幽霊こけたぁ……
ダセェ……

なつじ「正体を現せっ！！」

なつじが教室の電気をつけた

私の足元で倒れていたのは……

さいほの「……薮崎？」

苑子でしたｗ

ほのか「なんで苑子いんの」

苑子「教科書忘れたｗ」

さいほの「どうせお前勉強しないからよくね？」

なつじ「じゃあ久しぶりに四人で帰ろっか」

ほのか「ていうかなんで苑子制服？」

ジャージで来ればいいのに

苑子「お腹が空いたから」

なつじ「答えになってねーよ」

さいほの「あ、信号青だ。渡ろう」

なつじ「あ、待って」

苑子「じゃあね！黒須！」

ほのか「うん」

三人はここの信号で渡る。だから帰りはここで別れてる

まぁ道路をはさんで向こう側にいるけど

私は真っ直ぐのびた道を走って家の門を開けた

「ただいま！！」

～世界会議場～

日本は丸くて赤いボタンを押した

モニターに映る三人の少女の足元に魔法陣が浮かぶ

アメリカ「あれ？確か四人じゃなかったかい？」

日本「別にバラバラに連れて来てもたぶん問題はないかと」

中国「あ！！日本！魔法陣消えちゃったある！！」

日本「えっ！！？」

確かに少女達の足元には魔法陣がなくなっていた

イギリス「やっぱり四人まとめてじゃなきゃダメなんじゃないか？」

日本「そのようですね……」

ロシア「確かこの機械は五回までしか使えないんだよね」

日本「その通りです。だから失敗は四回までしかできません」

ドイツ「慎重にいこう」

イタリア「でもあの四人は世界を救うんでしょ?そしたら敵は四人を襲って来るんじゃないかなー?」

日本「まだ敵には知られていないので大丈夫です。しかし知ってしまったら可能性は大です」

ロシア「ねーねー日本くん。上、上」

日本「はい?」

全員が上を見ると、天井に何かがはりついていた

フランス「……敵だな」

中国「敵あるね」

イタリア「敵だねー」

……

全員「うわぁぁぁあああああ!!!?」

アメリカ「敵なんだぞ！今の話、聞かれたんじゃないかい！！？」

日本「あわわわわどうしましょう！！！」

ドイツ「あ、逃げた！！」

イギリス「逃がすかぁっ！！」

イギリスは敵を追ったが……

コケた

フランス「お前ダサすぎるだろ！！」

イギリス「うるせぇぇっ！！」

全員笑いを必死にこらえている

中国「お前らのせいで逃げちゃったある！！」

日本「あぁぁどうしましょうっ！！四人に危険が……早くこちらの世界に……しかし現在四人一緒ではないし……」

フランス「日本！！今、四人そろってるぞ！」

日本「はぃっ！！？」

日本はモニターを見た。
確かに四人そろっていた。
しかし信号で別れてしまった

中国「一人……突っ走って家に帰っちゃったある……」

日本「あああああぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

ドイツ「落ち着け日本！」

イタリア「どうか四人無事でありますように……」

イタリアは心の底からそう願った

その２　日常から非日常に（後書き）

これからこの話の後書きに主人公達の細かい設定をのせようと思いますｗ

暇な人は見てください♪

――主人公達の細かい設定？――
～定期テスト（勉強）の成績～

ほのか……中くらい。でもちゃんと真面目に勉強すればいい点がとれる。一年生の一学期の中間テストで英語で１００点を取ったことがあるため英語は得意科目

さいほの……上の方。でも数学がめちゃくちゃ苦手。真面目だからちゃんと勉強する。
得意科目は数学以外なら大体は……

なつじ……中くらいでほのかと同じくらい。さいほのと同様数学がめちゃくちゃ苦手。一応勉強する。
得意科目は社会

苑子……キング・オブ・バカなため中くらいの下らへん。でもがんばれば出来る子。自分ではちゃんと勉強していると言っているが、じゃあ夏休みの宿題を8月がもうすぐで終わるくらいまで手をつけないのはやめろ。こっちがヒヤヒヤする。
得意科目は特に無し。

次の話でも書こうと思っています。

感想・意見がある方はじゃんじゃん書いてください☆

読んでくださりありがとうございました！！

その３　出来のいい姉と微妙な妹（前書き）

この人達も……苦労してんな……

ｂｙ枢軸＆ａｍｐ；連合

先程更新したものは少し手違いがあり、おかしくなっていたので治しました

これももしかしたら間違ってるところがあるとおもいますがよろしくです；

その3　出来のいい姉と微妙な妹

ほのか「ただいまー」

祖母「おかえりー。いつもみたいにおもち食べるのかい？」

ほのか「当たり前です。じゃ出来たら呼んでください」

祖母「はいはい♪」

気付いた方はたぶんいないと思うが、何故か私はおばあちゃんには敬語

理由は自分でもわからない……

私は階段を駆け上がった

途中でコケて足がジンジンするががんばってのぼりきった

リビングに入ると私が関わりたくない人物ベスト3に入る嫌な奴がソファーに座っていた

「おう、ほーちゃん！！おかえりー！」

ほのか「……お姉ちゃん……」

ほのか「なんでお前帰ってきてんの？」

姉「テスト前だからねー♪一緒にいれてうれしい？」

ほのか「近づいてくんな気持ち悪い」

この気持ち悪いのはこの前も言ったけど三歳年上の高校二年生の姉。

こんなんだけど頭はよくて偏差値が私にとっては高すぎる高校に通っている

あと高校でも吹奏楽を続けている。中学ではサックスをやっていたが、今ではクラリネットをやっている。

悔しいけどうまい

しかしコイツ、中身が大変。

妄想大好きで下ネタを連発しまくる。

正直ウザい。

勉強面とかでは負けてるけど実は私の方が背がちょっと高い。ふふ……勝った……♪

妄想大好きなくせに私がアニメ好きなのが気にくわないらしく、私

がヘタリアの話とかするといつも可哀相なものを見る目で見てきやがる

殴りたくなる

チクショー……いつか追い抜いてやる……！！

さいほの「ただいま。」

私は玄関を開けて自分の部屋に行く

スクバを置き、ミス〇ルのＤＶＤでも見ようかとリビングへ行ったら

弟がお菓子食べながらイ〇ズマイ〇ブン見てやがった

弟「お姉ちゃんおかえりー！もぐもぐ。あのさもぐもぐ今日さもぐもぐ」

さいほの「食べるか喋るかどっちかにしろ」

弟「うん。もぐもぐもぐもぐもぐ……」

食うんかい
そこはふつう喋ろうよ

私の弟は小学四年生。
休日は野球をやっています。
たまにバカ過ぎてウザい

なつじ「お母さん、今日のご飯なに？」

母「カレー」

なつじ「ラッキー☆」
まぁさっきも言ったように今日はカレーだ
ちょうどカレー食べたかったんだよねー

「菜摘ー」

「何？」

「カレーのお肉、ちょうだい？」

「あげるわけねーだろ」

「お姉ちゃん、お願い？」

「お姉ちゃんって言ってもダメ」

コイツは妹。
小学四年生
いつも菜摘とかバカとか言ってくるくせにたまにお姉ちゃんに変化する

あ、私の方が背は高いよ！？
勘違いしないでね！？
妹の方が小さいからね！？
「うるさいよ菜摘」

なつじ「大事なことだからな」

苑子「お兄ちゃんお兄ちゃん」

下兄「何？」

苑子「お金プリーズ」
下兄「あげるかバカタレ」

このウザーい男はわっちの二人いる兄貴の下の方

中学三年生で卓球部部長
受験生のくせに勉強をまったくやろうとしない
→人のこと言えない

もう一人の兄は……

上兄「ぐふふふ……」

苑子「……」
下兄「……」

どうしよう、近づきたくない

苑子「お兄ちゃん……あいつ何してんの？」

下兄「たぶん……ＡＫ○４８だろうな……」

上の兄は１９歳。就職してるよ？

さっきも言ったけどＡＫ○４８が大好き

……キモいよ兄ちゃん

～世界会議場～

全員「……」

八人はモニターで四人の少女の様子を見ていた

一人は姉にからまれ、一人は弟にテレビをとられ、一人は妹と睨みあっていて、最後の一人は下の方の兄と陰に隠れて怪しく微笑んでいるもう一人の兄を可哀相な目で見ていた

全員「この人達も……苦労してんな……」

なぜかこの四人も自分達と同じなんじゃないかと嬉しく思ってしまう国達だったとさ

その3　出来のいい姉と微妙な妹（後書き）

――主人公達の家族と家――

ほのか……父、母、祖母、父の妹、姉の六人で一軒家に住んでいる

さいほの……母、弟の三人でほのかの家の近くに出来ためちゃくちゃでかいマンションに住んでいる。父とは別々に暮らしている

なつじ……父、母、妹の四人で一軒家に住んでいる

苑子……母、兄二人の四人で一軒家に住んでいる。父は単身赴任でいない。でもたまに帰ってくる

なんかあったら言ってくださいませ！！

その４　動き出す歯車（前書き）

ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ?あ〝ぁ?

ｂｙ苑子

今回は最初の方ちょっとシリアス☆

ついに運命の歯車が動き出す……

その４　動き出す歯車

私はある夢を見た

ほのか「ぬ？ここどこ？」

私は何もない荒野に立っていた

空は曇っており雨が今にも降りそうだ。
地面には雑草しか生えておらず綺麗な花なんか一輪も咲いてない

ほのか「うっへー、何ここ？気色悪い……つか誰もいないの？おーい苑子んぶー！！あれ？なんで苑子呼んだんだ？ま、いるわけないからいっか」

苑子「呼んだ？」

ほのか「苑子いたぁぁああっ！？」

なぜに苑子いるん！？

苑子は自分から二十メートルくらい離れたところから走ってくる

苑子……走ってる時の顔がまじウケるんだけどｗ

やべぇ、笑いこらえるの辛い……ｗ

私が笑いを必死にこらえて苑子の方を見た瞬間、

地面が大きく揺れた

ほのか「うわぁっ！？地震！？」

苑子「黒須ぅーー！！」

苑子は地震が起きたのにも関わらず笑顔で走っている

あの笑顔が少しムカつくのは私だけだろうか

ほのか「……あれ？」

私はあることに気付いた

苑子の後ろに黒い何かがいる？

最初はただの苑子の腹黒いオーラだと思ったが、黒いのはだんだん大きくなり人の形となった。

人となった黒いのは手に剣を持っていて、苑子に向かって振り下ろ

そうとしていた

ほのか「苑……っ！！」

私は苑子の名前を呼んだ

しかし、

遅かった

剣は苑子に向かって振り下ろされ、背中をきりつけた

苑子の背中からは大量の血がふきだし苑子は崩れ落ちるように倒れた

ほのか「ひっ……！！」

私は少し怖いが苑子に駆け寄る。

苑子の倒れているところは血の海となっていた

私は怖くなり、誰かいないか回りを見渡した

人がいないかと思ったがいた。

死体が

ほのか「っ……！！」

しかも死体の顔は自分の親友の

さいほのだった

さいほのの死体の近くにはまた血だらけの死体があった。

ほのか「ま……さか……」

私の嫌な予感は悲しくも的中した

死体の顔はやはり

なつじだった

ほのか「……はは、なんてリアルな夢なんだろうか……こんなシリアスな小説じゃなかったはず……」

そうだこれは夢だ。

私は死体から離れるために荒野を走った

走って、走って、恐ろしくてたまらない気持ちをなくすために走った

ほのか「あっ……！」

私は何かにつまづいて、地面に倒れた

体を起こし何かの違和感を感じ手を見てみた

自分の手は汚れていた。

真っ赤な血で

私は恐る恐る後ろを見た

そこにたおれていたのは、

屍と化したもう一人の自分の姿だった

ほのか「うわぁぁあああっ！！！！」

ほのか「うわぁぁあああっ！！？」

さいほの「ぬおっ！！？」

私は飛び起きた

近くには先程、死体として見たさいほの。

場所も荒野じゃなくて、自分は白いベッドの上にいた

ほのか「……」

さいほの「……」

きっ……

気まずいよぉぉおお！！

だってあれだよ！？

私、叫び声を上げて飛び起きたんだよ！？

漫画のワンシーンかぁぁああ！！！？

恥ずかしいだろーがぁっ！！

ほのか「……あの…」

さいほの「なんだい、中二病」

ほのか「違ェよ！！誤解すんな！！つか俺は今中二だぁぁああっ！！」

さいほの「で、なんなの」

ほのか「ココハドコデスカ？」

さいほの「なんでカタコト？迷子の外国人か君は」

ほのか「で、どこ？」

さいほの「地球かな」

ほのか「真面目に答えろアホンダラ」

さいほの「保健室だよ。お前、４時間目の体育の時間に倒れたんだよ？」

ほのか「マジか」

あ、思い出した

体育で持久走をやっていて持久力がまったくない私は三周目あたりでぶっ倒れたんだった

ほのか「で、今何時？」

さいほの「昼休みだ」

ほのか「うそっ！給食は！？」

さいほの「さっき食べた」

ほのか「オーマイガッ！！」

嘘だぁぁああ！！

今日は私が大好きな肉じゃがだったのに……！

さいほの「……なんで泣いてるん」

ほのか「泣いてないっ！！」

どうしてだろう、

涙がとまらない☆

なつじ「黒須、倒れたんだって？」

苑子「ダセェｗ」

なつじ「空気読もうよお前。思いやりって知ってる？」

保健室に入ってきたのはなつじと……

ほのか「そ……苑子……」

さいほの「ほぉ、そんな夢見たんだ。だからあんな……」

ほのか「忘れてください」

苑子「なんで私がそう簡単に殺されなあかんねん」

なつじ「一番簡単に殺されそうなお前が何言っとんねん」

私はさっきの夢を三人に話した（苑子が途中から思いっきり嫌な顔をしていたが見なかったことにしよう）

ほのか「マジで怖かったんよー……」

さ・な・そ「ふぅん。」

……

ほのか「って、終わりかよっ！！」

さいほの「うん。黒須、今日４時間授業だからこれから帰りの会だよ。早く教室行こう」

ほのか「……」

私は無言で頷き、ベッドから降りた

ほのか「うぉっしゃぁぁああ！！今日は部活なしじゃぁぁああ！！」

さいほの「そうだな」

なつじ「黒須ー、さいほのー、一緒に帰ろー」

苑子「あと、トマト見に行こう。」

さいほの「おう」

ほのか「あ、トマトで思い出した」

なつじ「何？」

ほのか「苑子のトマトの名前は子分。さいほののはロヴィーノって名前にしたから」

さいほの「勝手に名前つけんな」

ほのか「この小説の数少ない読者からの提案だ。使わなくてどうする」

さいほの「黙れやメガネ」

ほのか「んだとこのミスチル好き」

苑子「ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ？あ〝ぁ？」

さ・ほ「すいません」

腹黒苑子、降☆臨

苑子「やぁ、子分！！」

さいほの「黒須、アントニオ元気？」

ほのか「アントニオ？」

さいほの「君のトマトの名前だよ。確かアントニオじゃなかった？」

ほのか「アントーニョじゃボケ」

なつじ「うふふ……親分は元気だなぁ……」

なつじはもう可哀相なことになっているトマト――親分に話しかけている

ほ・さ・そ『なつじ、ご愁傷様……』

なつじ「あ、苑子。じょうろに水いれにいこう」

苑子「おう！！」

苑子はなつじの隣へ言った

『トキハキタ……』

四人「！！！！？」

うわっ、何今の声！！

気持ち悪っ！！

その直接、なつじと苑子の足元に大きな穴が空いた

な・そ「ぎゃあああぁぁぁぁ……」

さいほの「なつじぃぃいい！！薮崎ぃぃぃいい！！」

ほのか「これは……」

そして、私とさいほのの足元にも穴が空いた

ほ・さ「ぬぉわあああぁぁぁぁぁ……」

私達は真っ逆さまに下へと落ちていった。

私の意識はそこで途絶えた……

～世界会議場～

八人はモニターで四人の少女が穴に落ちていくのを見ていた

日本「しまった！！敵に……！」

アメリカ「このままじゃ四人共殺されちゃうんだぞ！！」

フランス「世界が……地球が終わっちまう！！」

日本「……大丈夫です、まだ可能性はあります……！！」

そういう日本は真っ直ぐな眼をしていた

その４　動き出す歯車（後書き）

――主人公達の体力――

ほのか……本文の通り持久力がまったくないため駅伝とかめちゃくちゃ苦手。でも短距離は速い。あと握力が結構ある。体力テストでは立ち幅飛びが一番得意。そして体がかたい

さいほの……持久力はほのかよりない。でもさすがに倒れはしない。体は微妙にやわらかい。体力テストでは長座体前屈が一番得意

なつじ……見た目でわかるが握力が全然ない。微妙にやわらかい。持久力はちょっとある。長距離は割と得意なため持久走が得意

苑子……握力がハンパない……；でも運動は苦手で体育は嫌い。体力テストではやっぱり握力が得意

相変わらずの駄文で申し訳ありません……

感想、お願いします！

その5　夢は現実に？（前書き）

ここはお前の墓場だぁぁっ！！

ｂｙなつじ&ａｍｐ;苑子

今回は最後らへんがめちゃくちゃシリアスｗ

あとカタカナが多いので読みにくいと思われますがよろしくお願いします☆

その5　夢は現実に？

ほのか「うー……いたた……」

私は目を覚ました

周りを見ると曇った空、雑草しかない地面、夢で見た荒れ地とまったく同じ風景だった

ほのか「えーっとぉ……確か変な声が聞こえた瞬間、苑子となつじが穴に落ちて私とさいほのも違う穴に落ちたんだっけ？」

私はそうだ、さいほの探そう！てな感じで荒れ地を歩きはじめた

ブニュッ

私は踏んでしまった

さいほのを

ほのか「ぎゃぁぁぁぁあああ！！？」

やべぇっ！！さいほのの顔踏んじゃったよ！！

さいほの近くにいたんだ！！まったく気づかなかった！！

影うすっ！！

→顔踏んだくせにひどい奴

んー…なんか殴られそうだから……

逃げよう☆

ガシッ

ほのか「……へ？」

後ろを見ると……さいほのがどす黒く微笑みながら私の足をすんごい力で掴んでいた

さいほの「うふふ……ほのかちゃん、お・は・よ♪」

ぎゃあああぁぁぁぁ……

何もない荒れ地に少女の悲痛な叫びが響いた……

苑子「ぬ？何今の叫び声」

なつじ「苑子の心の叫び声」

苑子「わっち！？」

私は今、なつじと行動してる

なんか気付いたらここにいたんだっぺ

なつじ「お前は語りもろくにできないのか」

苑子「うまれつきだっぺ！！」

なつじ「うまれつき！？小さい頃からそんなにぺっぺぺっぺ使ってたの！？」

苑子「使ってないよ」

なつじ「うまれつきって言葉調べてこい」

それにしてもここどこ？

なんか黒須が言ってた夢の舞台にそっくりなよーなそっくりじゃな

いよーな

なつじ「……苑子」

苑子「何ー？」

なつじ「なんか黒いのがいる」

苑子「黒いの？黒須のこと？」

私はなつじの指さす方向を見てみる

ホントに黒いのがいた

ほのか「……ひどいよさいほの」

さいほの「当たり前のことやっただけじゃ」

私はあの後、さいほのに……ぎゃぁぁあ！！思い出しただけでも恐ろしい！！

さいほの「そんなことより黒須くん」

ほのか「私にとってはそんなことで済むことじゃないんだよさいほのくん」

さいほの「あそこに黒いのがいるの、どう思う?」

ほのか「なつじ?」

私はきょろきょろと周りを見渡してみる

確かにいた。黒いのが

ほのか「さいほの、あんなの見ちゃいけません!」

さいほの「どこのお母さんだ君は。でもあいつ、こっちに向かってくるよ」

ほのか「へ?」

私は黒いのを見る。

うわぁっ!!さっきより十メートルくらい進んでる!歩くのはやっ!!

あと黒いのが人の形をしているのがだんだん見えてくる

あー……うん

ほのか「怖ぁぁぁあああああっ！！！？」

私はさいほのの手を掴んで逃げた

さいほの「痛い痛い痛い！！黒須！腕！とっても痛いです！！あいだだだだ！！」

ほのか「今は逃げる方が大事じゃぁぁああ！！腕くらい取れたって生活できんだろーが！！」

さいほの「できねーよ！！思いっきり不便だろーが！！」

ほのか「とりあえず早く逃げるぞ！！なんかあいつ、私達を殺しに来たみたいでめちゃくちゃ怖いぃぃぃぃ！！」

さいほの「んなわけ…」

『ヨク気付イタナ』

ほのか「ぬぉっ！！？」

私達の後ろにいた黒いのはいつのまにか前に立っている

瞬間移動でもしたのかコイツは！！

ほのか「もしや瞬間移動されましたか？」

さいほの「なんで敬語？」

『ピーンポーン！セイカーイ。』

ほのか「当たっちゃったよ！！」

さいほの「しかもコイツ、めちゃくちゃフレンドリーじゃねーか！！」

『ハジメマシテ。私ノ名前ハ、キリハデス。アナタタチヲ殺シニ来マシタ』

ほのか「そーかぁ、キリハっていうんだー……って、え？」

さいほの「今、聞いちゃいけないキーワードを言っていたような」

『ソレデハ、計画ヲ実行シマス。』

キリハと名乗る黒いのが言った瞬間、夢のように地面が大きく揺れだした

さいほの「のわぁぁ！！」

ほのか「おわわわ！！」

やがて揺れはおさまった

『ジュンビカンリョウ』

さいほの「何……を……」

私達は言葉を詰まらせた。

キリハの後ろには

怪物がいた

苑子「……は？今、殺し来たって言った？」

『ソウ。アナタタチハ邪魔。ダカラ殺ス』

なつじ「上等だゴラァ」

苑子「なつじ！；挑発しないで！」

『残リノ二人ハキリハガモウ殺シテイルダロウ』

なつじ「！！！……残りの二人って……」

苑子「Wほのかのこと？」

なつじ「もうちょっと緊張感をもとうよ」

『……オマエラトイルト調子ガクルウ。早メニヤッテシマオウ』

苑子「ちょい待ち！！君さ、なんて名前？」

『キリカ』

なつじ「なんで名前聞いたの苑子？」

苑子「なんとなく」

なつじ「とにかくキリカさん。私達、死ぬ気などまったくありません」

『ホウ。ワタシカラ逃ゲラレルトデモ？ソレハ無理ダ。ココハオ前ラノ墓場ダカラナ！！』

な・そ「いや、」

なつじと私は戦う姿勢をとり、敵をするどく睨んだ

な・そ「ここはお前の墓場だぁぁあああっ！！」

そして、なつじと同時に地面を蹴りキリカへと突進していった

さいほの「ぎゃぁぁぁああああ！！」

ほのか「さいほのぉぉおおっ！！」

うわぁぁぁ！！どうしよう！！なんか怪物にさいほのが捕まっちゃったよぉっ！！

さいほの「ぐえっ……腹がしめつけられ……」

『サア、ドウスル？』

ほのか「こうする」

私はバックに入っていた理科の教科書をキリハに向かって思いっきり投げた

そして見事命☆中

『イッダァァアアア！！？』

さいほの「……（。ｏ。）」

ほのか「正義は勝つ！！」

『キッ……キサマァ……痛イジャナイカ！！ウチドコロガ悪イト死ヌンダゾ！？』

ほのか「殺すつもりでやったんだけど」

『オイィィッ！！オ前本当ニ中学生ィィィ！！？』

ほのか「さて……ほかに武器は～♪」

さいほの「……お前、死ぬよ？」

『ハァァ！？』

ほのか「あ、あったあった♪小刀」

『ナンデ小刀持ッテンノォォオオ！！？」

ほのか「いやー、この前お姉ちゃんの引きだしあさってたらあってさー♪」

さいほの「お前の姉ちゃんヤバくないか！？」

ほのか「ま、殺す前に聞いとくか。なんで私達みたいな普通の中学生を殺そうとしたの？」

「『お前のどこが普通の中学生だ！！』」

ほのか「あ、さいほのー！」

私はさいほのに向かって投げた

はさみを

さいほの「ぎゃぁぁああっ！！？」

はさみはさいほのに巻き付いてる怪物の太いツルに刺さった

さいほの「てめっ……危ねぇだろぉぉおお！！」

ほのか「それでツル切って自分で脱出してね。私はコイツを殺るから☆」

『（目ガマジナンデスケド……）』

さいほのは、はさみで頑張ってツルを切ろうとしていた

私は小刀を構えキリハに突進した

私が小刀を振ったのと同時にキリハは空高く飛んだ。
キリハは怪物の頭の上に着地した

ほのか「チッ、クソが」

『ナンナノオ前！！？』

ほのか「あとさっきから気になってたんだけどお前さ、会話がカタカナじゃん？はっきり言って読みずらい」

『ソレハ作者ガ……』

ほのか「じゃあ作者ー、会話文普通にしてー」

作者「ラジャー！！」

『作者出てきた！！？って普通になってるぅぅうう！！』

ほのか「よしこれで読者様も読みやすいだろう。さて、じゃあ私達を殺す理由を教えろ」

『言うわけｎ』

グサッ！！

『……』

キリハは足元を見た。

つま先から１ｍｍくらいの所にするどいハサミが刺さっていた

怪物はとても痛そうにしている（頭に刺さってるし）

さいほの「いいから話せ。あとハサミをこっちに投げてくれると嬉しいです」

『じゃあ投げんな！！』

キリハは怒りながらハサミを投げた

キリハは一息ついて話しはじめた

『ふぅ……俺は下っ端だから詳しいことはわからないが、今俺の組織はある計画を実行しようとしている』

ほのか「世界征服的な？」
『まぁそんな感じだ』
ほのか「当たっちゃったよ！！」
嘘のつもりで言ったのに…
『で、その計画を実行しようとしたのはいいが、問題が起きたんだ』
さいほの「問題？」
『組織はある日、この計画の邪魔となる存在がいることに気付いた。それがお前らだ』
ほのか「なんかわくわくすっぞ！！」
さいほの「だまっとけや」
『その存在がいると計画の成功はない。だから組織は邪魔者を殺そうとした。』
ほのか「よく私達だって気付いたね」
『まぁな。ちなみに邪魔な存在はお前達だけじゃない。あと８人ほどいる』
さいほの「大変じゃん」
『俺はこの前、その８人を殺そうと奴らの秘密基地に行った。そこでお前らの存在を知った』

ほのか「なぁるほどぉ……ってふざけんなぁぁっ！！」

さいほの「それ思いっきりその８人のせいで私達命狙われてんじゃん！！ぶっ殺してやる！！」

ほのか「おぅよ！！ヘタリアキャラなら許すけど☆」

私は怪物の体を昇っていって、頭にいるキリハの所にたどり着いた

ほのか「とりあえずお前先に死ねぇぇえええ！！」

私は小刀をキリハに振り下ろした

その時、耳が痛いほど鋭い音が目の前から聞こえた

その音はテレビドラマとかで聞いたことがある銃の音に似ていた。

ていうかそれだった

キリハは銃を構えていた

私は、いきなり肩に激しい痛みを感じた

肩を見ると真っ赤な液体が大量に出ていた

ほのか「……！！！？」

さいほの「黒須！！！」

私は何も考えられなくなった。

そしてよろけて、何ｍも下にある地面へと落下した

体全体に激しい痛みが襲う

声も出ないほど苦しかった

さいほの「黒須！！」

私は仰向けになってさいほのを見た

さいほのの顔は青ざめていた

いきなり目の前に黒いのが現れた

『死ぬのはお前だな』

キリハはニヤリと笑い私に銃口を向けて引き金を引こうとした

さいほの「黒須ううううううう！！！」

私は瞼をおろした

「「ちょっと待ったぁぁぁぁああ！！！」」

聞き覚えのあるまぬけな声が頭に響いた

私は瞼を開けた

ほのか「……なっ！」

『お前らなんで……』

「「バカでアホでうざいけど大切な友達を助けにきたんだよ！！」」

なつじと苑子は声を合わせていった

～世界会議場～

ドイツ「……日本」

日本「……はい？」

アメリカ「俺達……敵に殺される前にあの子達に殺されるんじゃないかい？」

日本「……善処します」

その5　夢は現実に？（後書き）

――主人公達の出身地――ちなみに主人公達が住んでるところは埼玉県☆作者が埼玉に住んでるんで☆

ほのか……千葉生まれ埼玉育ち。小さい頃からずっと今の家に住んでる。

さいほの……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校四年生の時にほのかの小学校に転校して来る

なつじ……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校五年生の時に転校して来る

苑子……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校二年生の時に転校して来る

ほのかだけ千葉生まれなのはお母さんがそこに住んでいたからです！！

ほのか以外みんな転校して来ましたｗ

意見・感想がある方はよろしくお願いします！！

作者は感想とかあるとめちゃくちゃテンションがあがりますのでｗ

その６　長年の夢は現実に（前書き）

逃げるが勝ちぃぃぃぃぃ！！！

ｂｙほのか・さいほの・なつじ・苑子

久しぶりの投稿ｗ

これからは一日一回を目指そうと思います

ちなみにユーザー名を変えましたｗ

その6　長年の夢は現実に

ほのか「なつじ!?苑子!?」

なつじ「やっ☆黒須、なんかすごいことになってない?」

苑子「黒須は血で真っ赤……ふふふ…♪」

さいほの「こえーよ!!ブラック苑子出すな!!」

苑子「あはは♪」

『あの……存在忘れてませんか?』

ほのか「忘れてますが何か?」

『何か?じゃねーよ!!つーかそこのチビとでかいの!!キリカはどうした!!』

なつじ「おい、今チビっつった?苑子のことはでかいって言ったのに私のことはチビっつったよね?言ったよね?よーし、黒須。刀貸せ」

ほのか「あいさ☆」

私は肩の傷を押さえて小刀を渡した

『いやいやちょっと待てぇえええ！！そんな細かい所までいちいち……ていうかキリカ……』

なつじ「細かくないんじゃボケェェエエ！！」

『人の話を聞けぇぇえええ！！』

さいほの「んで、なんて言おうとしたの？」

そういうさいほのはいつの間にか怪物から脱出していた

『あれ、なんでいつの間にか脱出してんの？』

苑子「いやぁ、鞄あさってたらちょうど彫刻刀とカッターがあってさぁ！！いやぁ、切れ味いいねー！彫刻刀とカッター」

『お前らもはや中学生じゃねーよ！じゃなくてキリカは！？』

苑子「キリカってあそこで息切れてる黒いの？」

苑子は少し離れたところにいるキリハに似た黒いのを指差した

『ぜぇっ……ぜぇっ……お前ら……』

『キリカ！！大丈夫か！？何があった！』

なつじ「というわけで時は約１０分前にさかのぼります☆」

～約１０分前～

な・そ「ここはお前の墓場だぁぁぁああっ！！」

『くっ……！！？』

キリカは身構えた

しかしいつまでたってもなつじと苑子は来ない

キリカが周りを見ると全速力で逃亡している二人を見つけた

『おいぃぃぃいいっ！！あんだけカッコつけといて逃げんのかよ！！』

キリカは二人を追ったのであった……

苑子「そして今にいたる」

ほのか「何やってんだおまいらは」

さいほの「頭大丈夫？」

なつじ「黙れや」

苑子「それより二人は恋人ですか？」

ほ・さ・な「話そらすな」

『恋人なわけないだろう馬鹿が』

苑子「ん？今バカっつった？さりげなくバカって言ったよね？」

『私達は双子の姉弟だ。私が姉、キリハが弟』

ほのか「あ、そーいえば双子って先に出てきた方が弟か妹って知ってる？」

さいほの「なんでいきなり豆知識。つか誰でも知ってるだろ」

なつじ「つかキリハって男だったのぉぉぉぉぉ！？」

苑子「いまさら？」

『……キリハ、なんか全然話も進まないし早く帰らないと上司に怒られるからもうやってしまおう』

『そうだね。さっさと殺ろうか』

ほのか「……ねぇさいほの、」

さいほの「……なんだい黒須」

ほのか「私ね、さっき後ろから殺ろう☆っていう不吉な言葉が聞こえた気がするんだ」

なつじ「偶然だな、私もだよ。」

苑子「うん。なんか嫌な予感がするよね。」

さいほの「だな。ま、こういうときは……」

四人「逃げるが勝ちぃぃぃぃぃ!!!」

私達は四人一斉に何もない荒野を駆け出した

『ははははっ、もう遅いよ』

ほのか「ぬおっ!!?」

さいほの「またかよっ!?」

なつじ「ぎゃぁぁあああっ!!キモいぃぃぃっ!!」

苑子「おー」

私達は地面から出てきた怪物のツルに捕まってしまった

って、うわっ！！高っ！！

ほのか「ぎゃぁぁああっ！！高いぃぃいい！！怖いぃぃいい！！」

さいほの「あれ、まさかの高所恐怖症？」

『あーあ、こんな雑魚共のせいで余計な時間使っちゃったよ』

なつじ「余計な時間を大幅に使ったのは君達だと思うんだが」

『黙れ。じゃあ早速やるか』

私達は一カ所に集められた

足がぶらんぶらんしててなんか嫌なんだけど

苑子「うぼぁぁぁぁ！！死にたくないよぉぉぉおお！！」

なつじ「黙っとけや、イタリア第２号」

怪物は何本もあるツルをめちゃくちゃでかいナイフに変えた

なつじ「ぎゃぁぁああっ！！まだ死にたくないぃぃいい！！せめて１６０ｃｍをこえるまではぁぁぁああ！！」

さいほの「お前さっきと態度全然違うよ？」

ほのか「でもあれで斬られたくはないなぁ」

さいほの「黒須、お前片腕は自由だろ。小刀でツルを早く切ってよ」

ほのか「さっき逃げるときに小刀放り投げちゃった。てへっ☆」

さいほの「この役立たずが」

うわっ！さいほのの目がめちゃくちゃ軽蔑してんだけど

『もういいかしら？』

なつじ「よくないよくないよくないよくない」

苑子「なつじ、落ち着いて；」

『んじゃ、バイバイ』

怪物はナイフを振り下ろした

さいほの「ぎゃぁぁぁあああっ！！！」

苑子「さいほの！！さっきまでの冷静さはどこへ！？」

なつじ「来世は大きくなってるかなぁ……」

ほのか「諦めないでぇぇっ！！」

ナイフはすぐ近くせまってきている

私以外の三人は完全にパニクってるし……

うわぁぁんっ！！どうすればいいのぉぉっ！！？

その時、私の近くが突然光りだした

光はとても温かく私達を包んだ

私は光の中で呆然としていると光から白くて綺麗な手が出てきた

――もう大丈夫です。あなたたちは絶対に私達が守ります――

私の耳に響いた声は、聞き覚えのある落ち着いていてとても安心できる声だった

私は光から出てきた手を握った

その手は、周りの光のようにとても温かい手だった

その６　長年の夢は現実に（後書き）

今回は黒い人達の紹介をします。黒い人達っていっても黒いマントを着て、フードをかぶっているだけです。外見は普通の人間ですｗ

―オリジナルキャラ紹介―

・キリハ

　謎の集団の下っぱの黒い　男。キリカの双子の弟。　肩につくくらいの青い髪　に蒼い瞳をもった１７歳　くらいの青年

・キリカ

　謎の集団の下っぱの黒い　女。キリハの双子の姉。　長くて綺麗な青い髪に蒼　い瞳をもつ１７歳くらい　の美女

感想、意見がありましたらどんどん書いちゃってください！！

その7　主人公は大変興奮されたようです（前書き）

ほのかチョップ！！

ｂｙほのか

今回はちょっと短めです☆

その7　主人公は大変興奮されたようです

ほのか「……ぬ？」

私は目を覚ました

自分がいるのは見ず知らずの部屋。

私が寝ていたベッドではさいほのとなつじと苑子がまぬけな顔で寝ている

さーてと、

ほのか「起きろ」

私は三人の頭にほのかチョップをお見舞いした

さいほの「あいだっ！！」

なつじ「ぐぎっ！！」

苑子「ふごっ」

ほのか「おはよう諸君☆いい朝だね☆」

さいほの「黙れ。バカ」
ほのか「ほのかチョップ！！」
さいほの「いだだだっ！！」

なつじ「黒須、痛い。」
ほのか「何年も改良したからね」
さいほの「改良する暇あんなら勉強しろ」
ほのか「ほのかチョップ！！」
さいほの「いだだだっ！！」
なつじ「うーん、ここどこ？」
さいほの「つか薮崎だけ起きてないね」
苑子「ん～……むにゃむにゃ……」
ほのか「ムカついてきたわ。もっかいやろ、ほのかチョップ！！」
私はもう一回ほのかチョップをした

さいほのに

さいほの「なんで私なんだよっ！！！」

ほのか「なんでって……うざかったから」

さいほの「理由になってねーよ」

その時、いきなり部屋の扉が開いた

私達三人はびっくりして硬直した

その後に私となつじは入ってきた人物を見てさらに驚いた

ほ・な「……日本？」

さいほの「……は？」

日本「おや、私の名前をご存知のようですね」

入ってきた人物は私が大大大大大好きな日本だったのだ

ほのか「に……日本さんでございますか？」

日本「はい。貴方は黒須ほのかさんですよね？」

ほのか「ぐはっ！！」

私はベッドに倒れ伏した

なつじ「黒須ぅぅぅうう！！」

さいほの「なんなのコイツ」

日本「うわっ！？大丈夫ですか！？」

さいほの「いつもこんなんなので大丈夫です」

なつじ「黒須ぅぅ！！大丈夫かぁぁあああっ！！」

ほのか「だって……大好きな日本がいるし……しかもその日本に名前を呼んでもらえるなんて……」

今なら興奮しすぎて鼻血が出そうな気がする

日本「それより、まだ寝ている方がいらっしゃるんですが……」

日本はちらっと爆睡してる苑子を見た

苑子は口を開けてよだれが出ていて本当にコイツは女なのかってくらいの顔だった

なつじ「苑子、起きろ。日本がいるよ」

苑子「んー……んなわけねーだろチビガキ……」

なつじ「あれ？今の本当に寝言？起きてるよね？完全に起きてるよね？」

なつじはブラックオーラをめちゃくちゃ出している

日本「は……はは……」

イギリス「おい日本、四人は目ぇ覚ましたか？」

はい、イギリスキターーーーーー！！！！

やべぇよ、マジ、アニメや漫画で見るよりかっけーよ。あと眉毛が立派だよ

日本「イギリスさん、一人だけなかなか起きなくて……」

日本はまたちらっと苑子を見た

そういえば苑子ってイギリスが大好きだったよーな……

ほのか「おい、苑子、イギリスがいる」

苑子「……んー、黙っとけやクソ須」

ほのか「誰がクソ須だ？？あ〝ぁ？」

さいほの「落ち着けエロ須」

ほのか「なんでエロ！？私なんも問題発言してないよね！！？」

中国「にぎやかあるねー、どうしたあるか？」

中国もキターーーーー！！！

ヤバい、めちゃくちゃ女に見える

確か苑子、中国も大好きだったよーな

さいほの「薮崎、チャイナが来たよ」

苑子「……んー、うっせーよミス〇ルオタク」

さいほの「ありがとう」

どんだけ冷静なんだコイツは、しかもちょっと嬉しそうなんだけど。
なんで？

イタリア「うわぁ！！かわいい女の子達だぁぁ！！」

ドイツ「うるさいぞ！！お前ら！！」

イタリアとドイツまでキターーーーー！！

イタリアのくるん引っ張りてぇぇぇ！！

あとドイツちょームキムキなんだけど

アメリカ「騒がしいんだぞ！！」

フランス「女の子の取り合いか？」

ロシア「うふっ♪楽しそうだね♪」

ＡＫＹとナルシとマフラーさんキターーーーーー！！

ＡＫＹはなんかめちゃくちゃ声でけぇぇ！！

ナルシはなんかうぜぇ

マフラーさん、めちゃくちゃでかいっす

苑子「んー？何ー？騒がし……」

苑子は長い眠りから目覚めて部屋の状況を見た

取っ組み合っているイギリスとフランス、お菓子を配る中国、大声で笑うアメリカ、パスタを食べはじめようとするイタリア、そのパスタを取り上げるドイツ、その様子を困ったように苦笑いする日本、ずっとニコニコ笑っているロシア……あと自分を完全にガン見している三人

苑子「あぁ、これは夢か。よし！もっかい寝よ」

全員「寝るなボケぇぇえええ！！」苑子はみんなに飛びげりをされ気絶した

その7　主人公は大変興奮されたようです（後書き）

――主人公達の趣味――

ほのか…こうみえて本を読むのが大好き。暇さえあれば本を読む。あと絵も描くのが好き。絵の才能はそこそこ？

さいほの…ミスＯルオタクなのでそのＣＤ聞いたりＤＶＤ見たりするのが好き

なつじ…なつじも読書好き。この人も絵を描く。絵の才能はめちゃくちゃある。あと苑子をいじめること。

苑子…部活に所属していないため家にいる時間はほとんどパソコンいじり。妄想大好き。

感想・意見等がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！！！

その８　初対面では自己紹介（前書き）

最初はグーッ！！ジャンケンポン！！

ｂｙ全員

短いです！
あと駄文です

その8　初対面では自己紹介

苑子「うぅ……ひどいよみんなして……」

苑子は涙目だ

なつじ「ははははっ、ざまぁw」

アメリカ「よーし!!ということで小説お馴染みの自己紹介をするんだぞー!!」

シーン……

イギリス「いきなりなんだお前;」

アメリカ「この四人と俺達8人はこれから親交を深めなきゃいけないからな!!だから最初は自己紹介なんだぞ!!」

イタリア「あ、俺もそー思うー!!」

ほのか「あれ?今これから親交を深めると言っていましたよね?」

アメリカ「うん。君達はこれからここで生活するんだぞ!!」

四人「はぁぁぁああっ!!?」

さいほの「ちょっ……生活するって……ミス○ルのＣＤとＤＶＤなしでどうやって生活しろというんだ！！」

苑子「そこかよ！！」

日本「心配ありませんよ。ほのかさん達の荷物はイギリスさんの魔法でこちらの世界に来てます」

イギリス「魔法じゃない、魔術だ！！」

フランス「変わんねーだろ」

なつじ「さすがイギリスだね。私達の服まである」

なつじが部屋のすみに置いてある大量の荷物の中を見て言った

ほのか「それより自己紹介すんじゃないの？やろうよ！！」

ドイツ「そうだな」

苑子「最初誰から？」

……

全員「最初はグーッ！！ジャンケンポン！！」

全員はそろって手を出した

ほのか「……私かよっ！！」

負けたのはただ一人、私だった

イタリア「じゃあ最初は君達四人からねー♪」

さいほの「わかった。早くしろ黒須」

ほのか「ちぇっ……えと、黒須ほのかです。好きな物は二次元と本と餅です。ちなみにメガネを外すと美少女って設定はありません。メガネとってもブスです。よろしくお願いします」

私はペコッとお辞儀をした

イタリア「かわいー！！」

ほのか「は？」

イタリア「だって……かわいー！！」

ほのか「理由になってませんが……；」

さいほの「次は私ね。齊藤ほのかです。あだ名はさいほの。ここにいるメガネと同じ名前です。好きな物はミス〇ルです。よろしくお願いします」

フランス「ミス〇ル？」

さいほの「はっ、ミス〇ルを知らないとはクソか」

日本「フランスさん、ミス〇ルというのは我が国で有名なアーティストです」

さいほの「おっ、よく知ってるな！」

日本「はい」

なつじ「次は私！！中島菜摘です！あだ名はなつじです！私のことをチビというやつはあの世行きなので気をつけてくださいね♪よろしくお願いします」

全員『こえぇぇぇぇえええ！！！』

苑子「私の番だね！！薮崎苑子！永遠の１４歳です！！好きなのは二次元とパソコンと妄想と……」

なつじ「うざぁぁぁぁいっ！！！」

なつじは苑子にアイアンクローをかました

わー痛そー

さいほの「永遠の１４歳って……お前まだ誕生日きてないから１３歳だろ」

苑子「細かいことは気にしないのさっ☆」

ほのか「細かくねーよ」

さいほの「あっ、じゃあ貴方達の自己紹介を……」

イタリア「あっ、えと……」

ほのか「必要ないよ？」

全員「……は？」

みんなびっくりして私を見ている

ほのか「私、全員の名前知ってるもん。左からイタリア、ドイツ、日本、イギリス、アメリカ、フランス、中国、ロシアでしょ？」

日本「あ……当たってます……」

中国「なんで……我達の名前を……？」

ほのか「いろいろわけがあってね？」

ロシア「へー、面白そうだね♪」

さいほの「そうだ、質問がある」

イタリア「何何～？」

なつじ「私達はなんでこの世界に来たの？」

苑子「あ、確かに気になる!!なんで私達はここに来たの?なんで私達は殺されそうになったの?」

ドイツ「……それは……」

枢・連「次回に続きます☆」

四人「……」

その8　初対面では自己紹介（後書き）

――主人公達が苦手な物――

ほのか……虫、見た目がグロい食べ物、姉、ＢＬ

さいほの……アイドル、魚介類

なつじ……自分よりはるかに大きい物、変態、子供

苑子……勉強、めんどくさい事、他は不明

感想・意見がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！！

その９　説明は手短に（前書き）

まっさかー！！！本気に決まってるじゃん

ｂｙなつじ

結構放置してました；；

その9　説明は手短に

なつじ「さて、説明してもらおうか」

苑子「何気に時間かかったね」

さいほの「まさか作者が一週間くらい小説を放置するとは」

ほのか「疲れてたんだってさ」

なつじ「どーでもいいから早く説明」

日本「はい。えーと……どこまで知ってますか？」

苑子「説明しないのかよ」

ロシア「知ってること説明しても時間＆文章の無駄だからね♪」

さいほの「小説ならではのこと言うな。確か、私達が邪魔な存在とかその存在はあと8人いるとか……こんくらいまでは知ってるな」

苑子「そんなん言っとったっけ？」

ほのか「人の話ちゃんと聞いとこうか」

イギリス「そこまで知ってるんだな」

苑子「ふっ、すごいだろう！！」

なつじ「お前知らなかっただろ」

日本「では説明します。――世界は今、とても危険な状態に陥っています」

ほのか「なぬ！？」

さいほの「ぬ？」

日本「ある組織が世界征服を企んでいるのです。組織は簡単に世界を征服できると思っていました。しかし計画は思いどうりに進まなかったのです」

なつじ「予算こえたから？」

ドイツ「それはない」

苑子「お腹空いたから？」

中国「それは絶対にないある」

イギリス「組織は原因を必死になって探した。時間はかかったが組織は原因をつきとめた。」

フランス「それが君達四人と」

イタリア「俺達八人だよ」

さいほの「残りの八人はお前らだったのか！？」

アメリカ「そうなんだぞ！！だから俺達は大事な話し合いをするときは秘密基地に集まってるんだぞ！」

ドイツ「お前らの様子も秘密基地で見ていた」

なつじ「見てたの！？」

さいほの「じゃあお前らなんだな」

枢・連「え？」

さいほの「私達が邪魔な存在だと気付かれたのはお前らのせい、ってことだよなぁ？」

さいほのの周りにはどす黒いオーラが出ている

日本「え、いや、その……」
→忘れたかった現実

ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁ……

辺りには男達の悲痛な叫びが響いた……

ほのか「みんな大丈夫？」

なつじ「黒須はなんでやらなかったの？」
→フランスだけボコった

苑子「確かに、なんで？」→フランスの顔をボコった

ほのか「ヘタリアキャラだからね」

日本「で……では、説明の続きをさせていただきます……」

ほのか「ホントに大丈夫？；」

日本「大丈夫です……で、敵は８人の国の存在はみつけたのですが残りの４人の存在を見つけることはできなかった」

中国「だから我達は敵よりも早くその４人を探したある。で、この前やっと見つけたある」

苑子「わっち達を？」

ロシア「うん♪だから異世界にいる君達をこっちに呼び出そうとしたんだ」

なつじ「なんでこっちの世界に？」

なつじはいつの間にかみかんを食べている
つまり話に飽きてきている

苑子はなつじからみかんを奪おうとしたがなつじに顔面を殴られて

半泣きになった

ドイツ「１２人全員そろわないと世界は救えないしな。それに敵に存在を知られてしまったら危険だ」

イタリア「だから俺達は日本が作ったよくわかんないけどすごい機械で君達をこっちの世界に連れて来ようとしたんだよ！」

フランス「一回目は三人いたところで機械を発動させたんだが、どうも四人一緒じゃなきゃ無理らしくてな。失敗しちまったｗ」

さいほの「じゃああの魔法陣はよくわかんないけどすごい機械を発動したんだな」

ほのか「なんか機械の名前が『よくわかんないけどすごい機械』で確定しちゃってるんだけど」

アメリカ「だからモニターで君達のこと監視してたんだぞ！」

さいほの「ほー、そのせいで私達の存在がばれて殺されかけたわけねー」

８人は一斉にそっぽを向いた

さいほの「おーい無視すんな」

イギリス「い……以上で説明は終わりだ。次はお前らだ」

ほのか「私達？」

イギリス「なんでお前達は俺達の名前を知ってるんだ？」

なつじ「あぁ、そこか」

苑子「そりゃ疑問に思うよねー」

ドイツ「どうなんだ？」

ほのか「うーんと……私達の世界にヘタリアっていう漫画があるのね。」

なつじ「その漫画の登場人物が君達だよ」

８人「……え？」

日本「ということは……あなたたちにとってはこの世界は二次元ということですか？」

苑子「あ、確かにそうなるね」

イタリア「ヴェ……なんかびっくりだぁ……」

さいほの「信じるのか？」

ドイツ「嘘だったら名前を知らないだろう」

日本「ここが二次元……」

イギリス「日本がなんか感動してるぞ」

アメリカ「そりゃ嬉しいだろうね！！」

ロシア「うん。まぁこれで説明は終わりだね」

中国「そうある！！もう夜遅いから休むある！」

なつじ「そういえば私達、寝る場所ない……」

日本「ここに泊まるんですよ？」

苑子「……Ｗｈａｔ？」

フランス「だからここに泊まる……」

ほのか「二回言わなくていいわボケ」

フランス「なんかお兄さん、扱いひどくない！？」

さいほの「そうですね」

イギリス「ははっ、ざまぁｗ」

ドイツ「じゃあ荷物は部屋に運んどくな」

なつじ「さすがムキムキ」

苑子「失礼だなオイ」

さいほの「じゃあ行くか。ふぁーぁ、眠い……」

ほのか「んじゃ、お先に失礼するわ。おやすみー」

日本「はい、ゆっくりお休みください」

バタン

四人は部屋を出ていった

イギリス「フランス、お前変なこと考えてないよな？」

フランス「えっ！！？ななな何言ってるんだよ！！」

イギリス「考えてるな……」

中国「完全に考えてるある」

日本「フランスさん」

フランス「ん？」

日本「彼女達に手を出したらどうなるかわかってますよね？」

日本は刀を出し笑顔で微笑んでいる

全員『お……恐ろしい……；』

全員は日本を見て顔を青くしたという

苑子「なつじ、一緒に寝よ！！」

なつじ「は？お前は床で寝てろっ」

苑子「うぅ、ひどい……」

ほのか「あ」

さいほの「どした」

ほのかは何かを思い出したようにドイツが運んできた荷物をあさりはじめた

なつじ「何やってんのクソメガネ？」

ほのか「黙れチビＭＥＧＡＮＥ」

なつじ「なんでイングリッシュ？」

苑子「なんかロボットみたいでかっこいいからじゃね？」

なつじ「チビとついてる時点で全然強そうじゃないよ」

ほのか「あった！！」

さいほの「何が……あ、それ捨てた小刀じゃん」

なつじ「そんなに探して……大事な物なの？」

ほのか「うん。家の家宝」

苑子「家宝！！？」

さいほの「普通家宝を無断で学校に持ってきたり、放り投げたりしねーだろ」

ほのか「おじいちゃんが死ぬ前に必要な時に使いなさいって……」

なつじ「捨てろとは言ってないだろ」

ほのか「あれはノリというやつだよ」

さいほの「ノリで家宝捨てる奴がいるか！！」

ほのか「それより眠い。てことでグンナイッ！！」

ほのかはベッドにねっころがって約１０秒後に爆睡していた

苑子「はやっ！！じゃ、私もおやすみー」

苑子はベッドにねっころがった瞬間、爆睡だった

さいほの「お前は早すぎるんだよ！！のび太くんか君は！！」

なつじ「床で寝ろっつっただろうが」

さいほの「え、あれ冗談じゃないの？」

なつじ「まっさかー！！！本気に決まってるじゃん」

さいほの「お前ホントにひどいな」

さいほのとなつじはベッドに横たわり、そのまま眠った

その９　説明は手短に（後書き）

なんも書くことがないどす……

感想等がありましたらお願いします！！

その１０　私の家においで（前書き）

ゴルバチョフ！！

ご、ゴルバチョフ！！？

ｂｙ苑子・なつじ

久しぶりですなー♪

一日一回の目標はどこにいったんでしょーか……

その１０　私の家においで

さいほの「ふぁーあ……もう朝か……」

私は窓の外を見る。

とてもいい天気で太陽が眩しい

とりあえず私はアホ面で寝ている薮崎とベッドから落ちてるなつじを起こす

苑子「んー……眠い…」

なつじ「なんか体全体が痛い……」

さいほの「おはよう。ということでじゃんけんぽん！！」

苑・な「えっ！！？」

薮崎となつじはなんとか手を出した

苑子「あ、なんだかよくわかんないけど負けた……」

さいほの「残念だったな。ということで黒須起こして」

なつじ「なんかよくわかんないけど頑張ってー」

苑子「黒須くらい普通に起こせんじゃん……おいクソ須、起き……」

ドゴォッ！！

な・さ「……」

薮崎が黒須にぶたれただけで飛んだ……

薮崎をぶった黒須はムクリと起き上がる

ほのか「……朝からうっせーんだよ。黙ってろや」

なつじ「……（。▽。）」

さいほの「相変わらず寝起き悪ぃな……」

黒須は寝起きがとても悪いのだった

ほのか「あ〝ぁん？」

さいほの「読者にガンとばすな。」

苑子「おっはよー！！」

中国「おー、おはよ……ってどうしたあるか！傷だらけある！」

苑子「黒須にぶたれただけだよ」

イギリス「ぶたれただけでそんなに何カ所も怪我するか？；」

なつじ「飛んだからね」

フランス「とんだ！？」

ほのか「……」

アメリカ「……なんかほのかがめちゃくちゃ機嫌悪そうなんだぞ……」

ほのか「黙れメタボ」

アメリカ「……」

アメリカは部屋のすみに体育座りしてしくしくと泣いている

ドンマイ

日本「大丈夫ですか？低血圧なんですね……」

ほのか「……ん」

なつじ「お、さすが日本だな。」

苑子「黒須の機嫌が少し直った」

日本「ほのかさん、朝食の用意手伝ってくれますか？」

ほのか「ん……」

イギリス「あ、じゃあ俺も……」

全員「お前は絶対に行くな」

イギリス「……」

しばらくして日本と黒須が作った朝食ができた

テーブルに乗せて手を合わせる

全員「いただきまーす！」

全員は朝食を食べはじめた

イタリア「あ、この目玉焼きおいしーね！！」

日本「それはほのかさんが作ったんですよ」

ドイツ「ふむ、確かにうまいな」

ほのか「いやぁ……」

さいほの「（完全に機嫌が直ってる……）」

ロシア「……日本くんの塩鮭、なんかすごく塩の量多くない？」

うわっ、確かに

日本「そうですか？普通だと思うのですが……」

ドイツ「没収だ」

日本「あぁっ！！返してくださいドイツさん！お年寄りの幸せを奪わないでください！！」

中国「日本、さすがにあれはダメある……」

さいほの「うん。やめた方がいいぞ」

日本「ああ……私は……塩がなきゃ……」

ほのか「ドンマイッ☆」

苑子「ゴルバチョフ！」

なつじ「ご、ゴルバチョフ！！？」

苑子「間違えた。ごちそうさま！！」

ほのか「ゴルバチョフとごちそうさまをどうやったら間違えんだよ」

さいほの「はぁ、おなかいっぱいだ」

日本「あ、少しいいですか？」

なつじ「う？」

日本「ほのかさん達、私の家に住みませんか？」

苑子「……え？」

日本「あ、いやならいいんですけど……ずっとここに住むっていうのも上司に怒られてしまうんですよ」

ほのか「え、なんで？」

イタリア「ここは世界会議場だからねー♪」

さいほの「そ、そうだったのか！？」

ドイツ「ああ、上司に頼んで貸してもらった」

苑子「初耳なんだが」

アメリカ「言ってなかったからな！！」

なつじ「ウザいんだけどコイツのテンション。一回殴っていいかこ

のメタボ」

アメリカ「やめてくれぇぇ！！」

イギリス「とにかく、長くここに住んでると……」

さいほの「す……住んでると……？」

中国「金を取られるある！！」

ほ・さ・な「……へー」

苑子「なっ……なんだってぇぇぇえええ！！？」

なつじ「苑子さんあのね、その反応ウザい」

フランス「そういうことで長くはここに住んでちゃいけない、ってことだ。ということで俺の家に……」

日本「フランスさん」

日本は刀をフランスの首筋に当てた

日本、顔が恐すぎます

つーかそれ見て黒須がめちゃくちゃ興奮してんだけど

フランス「に、日本！！冗談冗談！！刀おろして！」

日本「フランスさん、次は冗談でも斬りますよ」

ほのか「日本マジかっこええ！！」

イタリア「あ、じゃあ俺の家に……」

ロシア「僕の家でもいいよ？」

イギリス「仕方ないから俺の家でも……」

日本「いえ、ぜひ私の家に！！」

中国「私の家に来るよろし！！」

ドイツ「俺の家でも……」

アメリカ「ヒーローの家はすっごく楽しいんだぞ！！」

さいほの「え……あ……」

全員「どこの家にするんだ！！？」

ほのか「断固日本の家でっ☆」

さいほの「決断早すぎるだろ」

なつじ「どんだけ好きなんだよ」

苑子「日本に一票だね。なつじとさいほのはどする？」

さいほの「私はどこでも」

なつじ「私もー。フランス以外ならっ☆」

イギリス「フランス拒絶されたから脱落だな」

フランス「お兄さん悲しいっ！！」

苑子「うーん、どうしよう……」

さいほの「じゃあ私、黒須と一緒でいい」

なつじ「じゃあ私も」

苑子「なつじが言うならわっちも！」

ドイツ「決まりだな」

イタリア「ヴェー……残念……」

ほのか「あ、じゃあたまにみんなの家に泊まりに行っていい？」

アメリカ「もちろん、いいんだぞ！」

日本「じゃ、行きましょうか」

さいほの「おう」

なつじ「苑子、お前荷物係な」

苑子「えっ！？」

ほのか「日本と一緒に住めるなんて……夢みたい！！」

私達は重い荷物を持って日本の家へと向かった

その１０　私の家においで（後書き）

おまけ　　なつじと苑子

なつじ「あ、苑子ー」

苑子「何？」

なつじ「手、出して」

苑子「うい」

なつじ「プレゼント」

苑子「マジ！？何か……な……」

苑子の手には黒光りする……

苑子「す……スコーン…」

なつじ「ま、がんばれ」

苑子「いやいやいや！！死んじゃう！これ食べたら死んじゃう！！」

なつじ「大好きなイギリスが作ったんだよ？食べないの？」

苑子「うぐっ……；」

苑子は手の上にあるスコーンを見る

はっきり言って

食べたくない……

苑子「でも……大好きなイギリスのためならぁぁあっ！！」

苑子はイギリスのスコーンを頬張った

直後、苑子は地面に倒れた

苑子は一週間近く、下痢に悩まされたという

感想・意見、よろしくお願いします（人´∀｀）

その１１　やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（前書き）

ビ、ビビってねーっしゅ！！！

ｂｙさいほの

なんかめっちゃ久しぶりの投稿☆

話の展開が早すぎる＆イタリアとかが出てこない

その１１　やっぱ和風な家は落ち着くわぁ

前回までのあらすじっ！

苑子「なんだかんだで日本の家に住むことになりました！！」

さいほの「なんだかんだって……」

苑子「日本ー、まだ？」

日本「もう少しで着きますよ。よろしければ荷物をお持ちしますが……」

ほのか「大丈夫大丈夫！！苑子、丈夫だから！！」

なつじ「ほら、さっさと歩け」

苑子「ふぇー；；」

さいほの「アイスうまい」

苑子「あ、アイスだ。いーなぁー」

さいほの「あげねぇからな」

苑子「ケチー」

日本「着きましたよ」

ほのか「おー、おっきぃー!!」

日本の家は和風でなんていうか……とても大きかった

なつじ「お邪魔しまーす」

さいほの「中も綺麗だな」

苑子「日本、って感じがするっぺ」

日本「じゃ案内しますね」

日本は私達を広い部屋に案内した

ほのか「おーっ」

日本「お茶持ってくるんでくつろいでてください」

さいほの「お構いなく」

日本は部屋を出ていった

苑子はごろんと床に寝転がり思いっきりくつろいだ

苑子「んー、ひろーい！！」

さいほの「はしたないぞ」

ほのか「……あ！」

なつじ「どうしたクソ須」

ほのか「だまれもやし」

なつじ「もっ……！？」

ほのか「それよりさ、この家探検してみない？」

さいほの「探検？」

苑子「苑子は賛成でありますっ！！」

苑子は手を挙げた

なつじ「探検してどうすんのさ」

ほのか「ちょっと確かめたいことがあってねー！まぁ暇だから行こうよっ！」

なつじ「んー、私は別にいいよ？」

さいほの「えっ！勝手にするのはちょっと……」

ほのか「大丈夫っ！！日本には皆でトイレ行くって言っとくから！」

さいほの「んー……まぁ暇だし……」

ほのか「よしっ！ではレッツゴー！！」

日本「丸聞こえですよ」

四人「ぬおわぁぁぁぁぁっ！！？」

部屋を出ていこうと襖を開けたらそこには呆れ顔の日本が立っていた

ほのか「え、いや、その……み、みんなでトイレに……」

日本「だから丸聞こえでしたよ……」

苑子「だ、ダメかなぁ……？」

日本「申し訳ありませんが許可は出来ませんね。しかもこの家には悪霊がたくさんいるらしいので危険だそうです。イギリスさんいわく」

さいほの「あのツンデレ眉毛のことは気にしなくていいんじゃないか？じゃあ日本と一緒にまわる、っていう条件でどうだ？」

日本「そうですねぇ……まぁそれなら大丈夫ですね。」

なつじ「やったっ！！」

日本「私から離れないようにしてくださいね？」

ほのか「ほーい」

日本「ここがお風呂場です」

さいほの「お風呂場って……露天風呂じゃないか……」

日本「露天風呂が好きなのです…」

ほのか「うひょーっ！！でけぇ！！」

なつじ「黒須、叫び声がうざい」

苑子「あ、河童だ」

ほ・さ・な・日『何が見えてるんだ……』

さいほの「外見がでかいからわかってたけど広いな、この家」

日本「イギリスさんとかの家はもっと大きいですよ」

苑子「今度忍びこんでみよう」

なつじ「せんでいい、せんでいい」

ほのか「日本、私お願いがあるんだけどー」

日本「はい？何でしょう？」

ほのか「私日本の部屋が見たいナー」

日本「ダメです」

ほのか「即答かいな」

日本「私の部屋はダメです。散らかっているので……」

ほのか「私そういうの別に気にしないからレッツゴー！！」

さいほの「えっ、ちょっ、わあああぁぁぁ……」

私はさいほのの手を握り廊下を走っていった

日本「あっ……」

苑子「今のうちにレッツゴー！！」

なつじ「いかねぇよお前となんか」

苑子「……（T－T）」

苑子は私達の後をついていこうとなつじの手を握ったがなつじに振り払われてしまったそうな

ほのか「さーて、出てこい悪霊！」

さいほの「目的は悪霊だったのか？」

ほのか「んなわけないよ！私の目的はただ一つ！大好きな日本の部屋を見ることさっ☆」

大体部屋の中は想像できるけどね……

さいほのと歩いていくとなんかこの先行ったら死にますよ的なオーラが出ている廊下があった

さいほの「なぁ、これ以上進むのはやめないか？一応人の家だし……」

ほのか「えー、でもこれから住む家だし大丈夫じゃね？」

さいほの「でも……」

さいほのはこの先の廊下を見て青ざめている

ほのか「……はっはーん」

さいほの「な、なんだよ……」

ほのか「さいほの、もしかして……

怖いんでしょ？」

私が言うとさいほのは顔を赤くして

さいほの「は、はぁっ！？何言ってんの！？アホじゃない！？」

なんかめちゃくちゃあせってるさいほの。

ぶっちゃけウケるｗ

ほのか「いや、めちゃくちゃビビってるっしょｗ」

さいほの「ビ、ビビってねーっしゅ！！」

ほのか「かんでるし」

さいほの「か、かんでねーし！今のわざとだし！」

ほのか「ツンデレめ」

とにかく行くぞ、と私がさいほのの手を掴んで引っ張るとさいほの

は絶対やーだー！！と私の手を振りほどこうとしている

こいつ、もう素が出てんな

苑子「くーろすー！！」

そんなとき、突如出てきた苑子は

さいほの「ぎゃっ！？」

ほのか「ぬぉっ！！？」

さいほのの体を力いっぱい押し、私とさいほのの体はそのまま前に進んだ

日本「あ……」

ほ・さ「うわぁぁぁぁぁぁぁ……」

私とさいほのは進んだ先にあった深く暗い穴に落ちてしまった

苑子「……」

なつじ「何やってんだテメェ。やっちゃった☆って顔してんじゃねーよ」

日本「この先には穴があったんですねー……メモメモ」

なつじ「しなくていいから。」

な・苑「つか知らなかったんかい」

その１１　やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（後書き）

なんも書くことがありませんｗ

感想よろしくお願いします！

番外編　日本とほのかｉｎうどん屋（前書き）

この人の胃はブラックホールですかっ！？

ｂｙ日本

ほのかと日本メインでほのぼの？

恋愛とかは全然意識してません

だってこの小説はギャグ中心だからっ☆

番外編　日本とほのかｉｎうどん屋

こんにちは、日本です

今日はほのかさんと二人で最近できたおいしいと評判のうどん屋に来ています

ほかの三人も誘ったのですが用事があるみたいだったので二人で来ました

聞いたところほのかさんはうどんが大好きらしくとても楽しみなようです

ということでうどん屋につきました

ここのうどん屋はお店の人に注文すればすぐその場で注文したものが受け取れるというなんとも便利な店なのです

ほのか「うわぁー！！日本、おいしそうだねっ！！」

日本「そうですね。好きな物を好きなだけ食べていいですよ。」

ほのか「えっ、悪いよー……だって日本がお金出すんでしょ？」

日本「いえ、大丈夫です。ここのお店安いし……」

ほのか「そっかぁ……じゃあねー……」

ほのかさんはおぼんを持ってどれにするか迷っています

まぁほのかさん女の子ですし、きっとそんなに食べないはず……

ほのか「えーと、じゃあかけうどんの大でっ！！」

えっ？

日本「け、結構食べられるのですね」

ほのか「んー？普通だよー！」

え、かけうどんの大って結構量が……

「はい、かけうどんの大だよっ」

ほのか「あ、ありがとうございまーす！」

「そっちの彼氏さんは何にするんだい？」

日本「えっ！？ち、違いますっ！！」

ほのか「私は光栄だけどなぁ」

日本「はっ！？」

「で、何にするんだい？」

日本「あ、じゃあかけうどんの並で……」

「あいよっ」

日本「ありがとうございます」

ほのかさんを見ると天ぷらが売っているコーナーでさつまいも天を三つ……

み、三つ！！？

日本「三つも食べるんですか！？」

ほのか「え、うん。ダメ？」

日本「いや大丈夫ですが……そんなに食べて大丈夫なんですか？」

ほのか「全っ然」

日本「す……すごいですね……」

私はえび天を皿に乗せて先へ進む

レジでお金を払ってほのかさんの後を追う

ホントにこの店安すぎます

ほのか「あ、日本。はい箸」

日本「ありがとうございます」

ほのか「じゃいただきまーすっ！！」

日本「いただきます」

ほのかさんはちゅるちゅると一本ずつうどんを食べてく

日本「一気に食べないんですか？」

ほのか「だって熱いしぃ……」

ま、まさかの猫舌……

ほのかさんは次にさつまいも天をサクサクと食べはじめる

実にいい音です

私がずっと見ているとほのかさんは私に気づいた

ほのか「日本もいも天食べる？」

日本「えっ、でも……」

ほのか「いいのっ！！細い体してんだからちゃんと食べなさいっ！！」

日本「むごっ！！」

ほのかさんはいきなり私の口にさつまいも天を突っ込みました

ほのか「ね？おいしいっしょ？」

日本「……はい」

確かにサクサクしていておいしかったです

うーん、結構並でも量が多いですね……

ほのか「ごちそうさまっ！！」

早っ！！

なんであんなに多い量をゆっくり食べてて１０分近くで食べ終わるんですか……

ほのか「うーん、かけうどんの大より大きいやつってないのかなぁ？」

まだ食えるとっ！？

この人の胃はブラックホールですか！？

ほのか「うーん！おいしかったぁっ！！」

や、やっと食べ終わりました……

ほのか「日本、」

日本「は、はい」

ほのか「今日はありがとうねっ！！楽しかったぜ！！」

ほのかさんは飛びっきりの笑顔を私に向けた

その笑顔を見て、また二人で来たいなぁと思いました

……作文？

終わりっ☆

番外編　日本とほのかｉｎうどん屋（後書き）

――おまけ――

ほのか「たっだいまぁー！！」

さいほの「おかえり」

なつじ「どうだったぁ？」

ほのか「うん、すごくおいしかったっ！！」

苑子「ヨカッタネー」

ほのか「なんでカタコト？あ、日本ー」

日本「はい？」

ほのか「おもち、食べていい？」

日本「……」

今日学んだこと、

ほのかさんの胃はハンパない

おしまい；

感想・意見がありましたらよろしくお願いします！

その１２　レッツＲＰＧ！？（前書き）

れっつらごー

ｂｙなつじ

関係ありませんがアナログ放送終わっちゃいましたね……

少し寂しいです；

その12　レッツRPG!?

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほのが死にました」

ほのか「死んでないよ!?」

さいほの「お前も説明テキトーだな」

なつじ「日本ー、どうしよう。苑子が黒須とさいほの殺しちゃったぁ」

苑子「殺しとらんよ!?」

なつじ「えー、だって黒須とさいほのの声が全っ然聞こえないしー」

苑子「……どどどうしよう日本……」

日本「私に聞かないでください……泣きそうな顔でこっち見ないでください」

なつじ「つかここ日本の家だろ?なんでここにでっかい穴があるってこと知らなかったんだ?」

日本「この先にはなんもないのであまり行かないし、イギリスさんにここには近付くなと言われていたので……」

苑子「ラッキーやな」

なつじ「お前のせいで黒須とさいほのは全然ラッキーじゃないけどな」

日本「菜摘さん、苑子さん結構気にしてるので傷を広げるようなことはやめてください;;」

なつじ「大丈夫っす。コイツあんま傷付かないタイプなんで」

苑子「う、うん!グスン、全然、グスン、気にしてないよ!!」

日本「いやめちゃくちゃ気にしてるじゃないですか」

苑子「グスン……それよりさ、黒須とさいほのどうする?」

なつじ「ほっといてよくね?」

苑子「ダメだろ!!」

なつじ「えー、でもこの穴が深くなけりゃはい上がれるんじゃね?」

苑子「えっ結構深そうだよ?黒須ぅぅっ!!さいほのぉぉっ!!」

苑子は穴に向かって叫んでみる

日本「返事……きませんね」

なつじ「死んだんじゃね?」

苑子「こいつひでぇっ!!」

なつじ「誰かさんのせいで」

苑子はそっぽをむいた

日本「それより助けに行った方がよろしいようですね」

なつじ「うーん、めんどくさいけど行くか。骨だけは拾ってやる」

苑子「あれ!?なんかいつのまにか死んだことになってるよ!?」

なつじ「まぁ、問題はどうやっていくかだな」

苑子「え?この穴に飛び込めばいいじゃん」

なつじ「よし、お前最初に行け。そして死ね」

日本「この穴、見たところ結構深そうですしむやみに飛び込むのは危険かと……」

苑子「頭から落ちなきゃ大丈夫じゃね？」

なつじ「ホントお前いっぺん死ね」

苑子「さっきから死ね死ねうるさいよ！しばくよ！？」

なつじ「やれるもんならやってみやがれ。しばくぞ」

苑子「あんだとゴラ。なめてんじゃねーぞ？」

なつじ「なめてねーよ。バカにしてんだ」

苑子「あ〝ぁん！？」

日本「ふ、二人ともやめてください！苑子さんはキャラ崩壊してますよ！？」

苑子「いつもと変わんないと思うんだけどなー」

日本「変わりすぎですよ！今はそれどころじゃないんですよ！？」

なつじ「確かに。早くしないと骨が……」

苑子「だから勝手に殺すな；」

日本「仕方ないですね。危険ですが穴に飛び込みましょう」

なつじ「了解。ってことで行け、苑子」

苑子「わっち！？ここは一番背が小さいなつじから……」

なつじ「れっつらごー」

苑子「ぎゃあああぁぁぁぁぁ……」

苑子はなつじに背中を蹴られ暗い穴の中に落ちていった

なつじ「さーて次は日本行く？」

日本「お、お先に失礼します……」

なつじに突き落とされることを恐れた日本は自ら穴に落ちていった

一人になったなつじは小さな木箱（こっ……骨壺!?）を持って穴に入っていった

苑子「ふごっ!!」

苑子は水の中に落ちた

どうやらあの穴の下は水らしい

苑子「つーか今回の語り、誰がやってんだろ……」

作者です
いつもの語りが不在なので☆

苑子「へーそうなん…。で、ここは……」

日本「うわぁぁぁああ！！」

苑子「ぶごっ！！」

バッシャーーン！！

突然降ってきた日本は苑子の頭の上に落ちた

日本「げほっ……み、水でしたか……でもなんかいたよう……な…」

そういう日本の近くには苑子が浮いていた

日本「うわぁぁぁ！？そ、苑子さん！？大丈夫ですか！？」

浮かんでいる苑子は手を出し親指をつきあげてグッジョッブをしてる

日本「いや意味わかりませんよ！！何がしたいんですかあなたは！」

苑子「ボケです」

日本「自分で言っちゃいましたよこの人！！」

苑子「いやー、それにしても死ぬかと思った」

日本「真顔で言わないでください」

なつじ「なつじアターーーック！！」

苑子「ひでぶっ！！」

日本とコントをしている苑子の上に満面の笑顔のなつじが落ちてきた

日本「苑子さぁぁんっ！！」

なつじ「あ、苑子いたの？邪魔だよ？」

日本「な、なんてひどいんですかあなたは；」

なつじ「さっきから思ってたんだけど日本、ツッコミの才能あるよ☆」

日本「嬉しくないです。いつもツッコんでくれるほのかさんとさいほのさんがいないから……」

苑子「Wほのかいないと大変だね。結構」

なつじ「チッ、生きてたか」

苑子「ひでぇ！！」

日本「さて、とりあえず水から上がりますか。今気づいたんですが

この水、地下に流れてる汚い水です」

日本の言葉を聞いて、苑子となつじは硬直した

なつじ「うっわくさっ」

苑子「くしゃい」

日本「仕方ありませんよ。早く二人を見つけてお風呂に入りたいです……」

苑子「……ん？日本、何あれ」

苑子が指差した方を見ると……

なつじ「……何あれ」

日本「まさかの悪霊じゃないですか？」

悪霊はじっと三人を見ている

日本「菜摘さん、苑子さん」

なつじ「ん？」

日本「これからやること、わかってますか？」

苑子「うん。じゃ今から3秒後にいくよ？」

なつじ「1、2、3……」

な・そ・日「逃げるが勝ちぃぃぃぃぃ！！」

三人は一斉に駆け出した

ほのか「さいほのー、お腹空いたよー」

さいほの「仕方ないだろ。だいたいこんなことになったのは誰のせいだと思ってるんだ」

ほのか「苑子」

さいほの「……そういえばそうだった」

私達は暗い道？に座り込んでいた

さっき汚い水に落ちたせいで服は臭いし……

お腹は空いたし……

ほのか「どうしよさいほの。このままここから出られなくて餓死してそのまま骨だけに……」

さいほの「ネガティブだなおい！！諦めんな！どっかに出口があるかもしれないだろ！ほら、立て」

ほのか「やだ疲れた。おんぶ」

さいほの「ちっ……」

さいほのは私をおぶった

さいほの「……黒須」

ほのか「ん？」

さいほの「太った？」

ほのか「黙れ。首切られたくなかったらな」

私はさいほのの首に持ってた小刀の刃をあてる

さいほの「はいはい」

さいほのは歩きはじめる

さいほの「無理。重い、自分で歩いて」

ほのか「お前後で覚えてろよ」

私は仕方なくさいほのから降りて歩く

さいほの「……ん？」

ほのか「どしたの？」

さいほの「あれ、何だろ」

さいほのが見ている方を見るとなんか黒くてモヤモヤしてる大きい物体がいた

ほのか「うわっキモ。まさか悪霊？」

さいほの「そうっぽくないか？」

黒くてモヤモヤした物体は赤く光る瞳を私達に向けた

さいほの「……なんかやばくないか？」

ほのか「え、そう？」

黒くてモヤモヤした物体はいきなり私達に向かって突進してきた

その１２　レッツＲＰＧ！？（後書き）

―主人公達のくせ―

ほのか……爪を噛む、気がつけば笑ってる

さいほの……気がつけばミスチルの話

なつじ……パニックになるとその場でくるくる回る、よくコケる

苑子……いつもの表情が笑顔、暇だと寝る

感想・意見お願いします

その１３　やっぱり逃げるが勝ち（前書き）

くせだよ！！

直せ今すぐ！！

ｂｙほのか・さいほの

夏休みだからなるべく早く投稿したかったんですが……

部活とかの影響で遅れてしまいました；

でもそのかわり長いです！

その１３　やっぱり逃げるが勝ち

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほのの骨を拾いに行くべく私と日本とカスは穴に飛び込むのだった……」

ほ・さ「勝手に殺すな！！」

苑子「カッ……カス！！？」

ほ・さ「ぎゃぁぁぁぁぁあああ！！」

こんにちは、黒須です。

え？なぜ叫び声を上げてるかって？

人間、叫びたい時だってありますよ

すいません、嘘です

まぁなんで叫んでるかっていうと生きてるからです

ん？もうちょっと細かく？めんどくさいなー……

声が出るからです

え、なになに？あんまふざけてっとしばくぞだって？ふざけてなんかいやせんぜ。本当のことを言ったまでです

さいほの「黒須、何ぶつぶつ言ってんの？」

ほのか「え、さいほの私の心の中読んだ！？テレパシー！？」

さいほの「思いっきり言葉にしてたぞ。今は逃げることに集中しろ。死にたくなかったらな」

はい、私達は今逃げています

え、なんでかって？

前の話を見ろアホ。

さいほの「おい、読者減らす気か」

ほのか「どうせ誰も見てねーだろ。あれ？」

さいほの「どした?」

ほのか「追い掛けて来てないよ?」

後ろを見るとさっきまですごい勢いで追い掛けて来ていた悪霊はいなかった

さいほの「お、危機一髪だ。さ、早くここから出よう」

ほのか「おう。さーて出口はどこかなー?」

私が足を踏み出したその時だった

ドォォォォン!!

ほのか「(゜▽゜)!!」

さいほの「(ノ゜O゜)ノ!!」

私とさいほのの前にいきなりさっきの悪霊が現れた

赤い光を放つ瞳が私達を見る

さいほの「なっ……」

ほのか「ぎゃぁぁぁぁぁあああ!!」

さいほの「えっ、ちょっ、うわぁぁぁぁ……」

私は無意識にさいほのの腕を掴み全速力で駆け出していた

ほのか「ちょっ……なんでいるんだよぉぉぉ！！まるでホラーじゃねーか！！」

さいほの「知らねーよ！！つかなんでお前は逃げるとき必ず私の腕を握るんだよ！！しかもめっちゃ強い力で！！」

ほのか「くせだよ！！」

さいほの「直せ今すぐ！！」

ほのか「とりあえず走れぇぇぇぇえ！！」

私達は迷路みたいな地下を全速力で走る

私達が角を曲がった瞬間、目の前に悪霊が現れた

さいほの「うわぁっ！！来た！」

ほのか「も、戻ろう！」

私とさいほのはUターンしてまた走り出した

が、地面が濡れていたから私はすべった

さいほの「お前ダセェな」

ほのか「ひでぇっ！助けろよ！ほら、今にも襲い掛かってきそうだよ！！」

さいほの「さらば、君のことは忘れないよ☆って、くばっ！！」

私は走ろうとしたさいほのの足を掴み転ばした

ほのか「お前も道連れじゃ」

さいほの「なっ、離せぇぇぇえええ！！」

ほのか「誰が離すか！！私が死んでお前が生きてるなんて納得できるか！！」

さいほの「なんだよその理由！！いいから離せ！！！は・な・せっ！！」

ほのか「道連れ言うとるやろ！」

私達がごちゃごちゃ言ってる間に悪霊は黒くモヤモヤした手と思われるものを私達にのばしてくる

さいほの「わ、わ！死ぬ！たぶん死ぬ！絶対死ぬ！」

ほのか「は、ざまぁ！」

さいほの「お前も死ぬだろ」

悪霊の手が私の体に触れようとした瞬間

悪霊の前に突然人が現れて銀色に光る武器で悪霊を真っ二つに斬った

悪霊は斬った所から消えていった

ほのか「……へ？」

さいほの「……ほ？」

日本「お二人共、大丈夫ですか？」

そこに立っていたのは片手に刀を持った日本だった

さいほの「に、日本！？なんでここに……！？」

なつじ「どっかの誰かさんがほのかとさいほのを落としちゃったから追ってきたんだよ？」

ほのか「なつじ！！……と苑子」

苑子「え、何その付け加えられた感じ」

日本「さて、全員揃いましたしここから出ましょうか」

ほのか「え、でもどうやって？」

日本「歩き回ってれば着きますよ、きっと」

さいほの「曖昧だな……」

苑子「隊長！また悪霊が来ました！」

なつじ「隊長誰だよ」

日本「やはりそう簡単には出られませんか……」

日本はまた刀を構える

うん、カッコイイ

なつじ「顔がキモいよ」

ほのか「黙ってようか」

日本は目の前に来た悪霊を簡単に切り払った

さいほの「強っ！でも進むたびに襲われてちゃ大変だよな」

日本「仕方ありませんね。みなさん、走りますよ」

苑子「え、日本は大丈夫なの？」

日本「爺だってやるときはやりますよ」

日本はにっこりと笑う

ほのか「うわっ、また来た！！」

日本「行きますよ！！」

なつじ「おーいえー」

私達は床がぬけているのですべらないように気をつけながら走った

全速力で走ったが悪霊はどんどん私達との距離を縮めている

さいほの「くっそ……追いつかれるぞ！！」

苑子「ど、どうすんのさ日本！！」

なつじ「なんか除霊とか出来ないの！？」

日本「あ、その手がありましたか！！」

ほのか「できるんかい」

日本「はい、イギリスさんから一応除霊するための方法などは教わっています。」

なつじ「イギリス、出番ねーくせに陰で活躍してるね」

さいほの「よし、じゃあ今すぐやれ」

日本「唐突ですね。やりたいのはやまやまなのですが除霊をするにはかなりの時間と広い場所が必要です」
ほのか「それは難しいね……」
苑子「え、普通にできんじゃん」
なつじ「バカ。お前はホントにバカ。キングオブバカ！」
苑子「そんなにバカバカ言わないでよ！！；傷つくんだけど！！；」
さいほの「いや普通にバカだろ。この状況で出来ると思うか？」
苑子「うん、思う」
ほのか「こいつバカじゃない、大バカだ」
日本「でも除霊をすることによってこの地下にいる全部の悪霊を掃うことができると思われます」
なつじ「な、なんて便利なんざましょう！！」
さいほの「どっかの主婦か、君は」
ほのか「あ、日本！！なんか扉見つけたよ！！」
苑子「で、出口！？」
日本「とりあえず中に入りましょう！！」

日本が扉を開け私達は中に入り込んですぐに扉を閉めて鍵もかける

ほのか「ここは……部屋？」

中は地下にもかかわらず普通のうす暗い部屋だった

さいほの「地下なのに部屋？日本の家って複雑怪奇だな」

日本「私にとっては欧米文化の方が複雑怪奇なのですが……」

苑子「そんなことより日本、ここならできるんじゃない？除霊」

なつじ「さ、さっきまでバカだった苑子がまともな意見を……！？」

苑子「そろそろ怒るよ？」

日本「確かにまともな意見ですね……。やってみますか」

苑子「に、日本まで……；」

日本はお札のようなものをとりだした

そしてぶつぶつと呪文のようなものを言いはじめる

ドンドンッ！！

さいほの「ちっ、来たか！！」

苑子「わわわ、どうしよう日本！！」

日本「……」

日本は苑子の言葉を無視した

苑子「シカトっすか！？」

なつじ「違うよ大バカ野郎！！日本、集中してるからお前の声なんて聞こえないんだよ！」

確かに日本は目を閉じてずっと呪文を唱えている

かなり集中しているようだ

苑子「……よしっ！」

さいほの「薮崎？」

苑子「日本ががんばってるんだから、ちゃんとそれに集中できるように私達もがんばりますかっ」

なつじ「苑子……お前、ただのバカだと思ってたがちゃんと頭も使えるみたいだな」

苑子「ふふっ、私だって本気だせばこんなの朝飯前だよ」

さいほの「私も同感だぞ、薮崎」

ほのか「私もっ」

苑子を先頭に私達は扉の前に並ぶ

私は小刀、さいほのははさみ、なつじはのこぎり（なんで持ってんの!?ｂｙさいほの）、苑子は彫刻刀を手に持ち準備を整える

苑子がドアノブに手をかけ私達に目で合図をする

全員の了解を得た苑子は力いっぱいドアノブを回した

そして壊した

「「「「……」」」」

苑子「えへっ、やっちった☆」

ほ・さ・な「お前ホントにいっぺん死ねぇぇえええ!!」

苑子、リンチ状態☆

苑子「ちょ、やめ……ぎゃぁぁぁああ!!」

～三分後～

苑子「ぐすん、ひどいよ……女の子の顔をなぐるなんて……」

なつじ「残念ながら私、苑子を女だと思ってないから」

苑子「私の扱い、ホントにひどくない？」

さいほの「気のせい気のせい……ってわぁっ!?」

ほのか「どしたのさいほの？」

さいほの「あ、あれ……」

さいほのは壁を指差す

ちらっと見たらわからないがよく見ると黒くモヤモヤした……

ほのか「って悪霊!?」

なつじ「この部屋に入ろうとしてるみたいだね、さすが悪霊」

ほのか「感心してる場合ですかっ!?」

苑子「日本!!」

日本はまだ呪文を唱えている

さっきまではぶつぶつとしか聞こえなかったが今ははっきりと聞こえている

さいほの「たぶんもう少しで除霊できるかもしれない!私達もできるかぎりのことをするぞ!!」

さいほのははさみで壁からでてきている悪霊の手を刺す

悪霊は手を激しく動かしさいほのをはらう

さいほのはその勢いで壁にたたきつけられた

さいほの「ぐっ!!」

ほのか「さいほの!!」

さいほのは痛そうに顔を歪める

さいほのはしばらくは動けそうにない

それなのに悪霊はあっさりと部屋の中に入ってきた

苑子「えぇぇっ!?なんてあっさりと!!」

悪霊はとても素早い動きで日本に突進していった

なつじ「日本っ!!」

しかし悪霊が日本に攻撃する瞬間、日本から凄まじい風が吹き暗い部屋が一気に明るくなった

悪霊はそのせいで日本に近寄れなくなっている

日本「去れ、悪しき霊達よ……」

日本が呟いた瞬間、目の前にいた悪霊は消え辺り一面を白い光りが

包み込んだ

ほのか「ほえ？」

光りが消えたと思うと、そこはさっきと変わらない暗い部屋だった

部屋の真ん中には日本が立っている

私の近くではさいほの達もいる

日本「ふぅ、除霊完了です」

苑子「マジか！？すげぇ！！」

さいほの「じゃあもう出てこないんだな」

日本「はい、もういないはずです」

なつじ「よかったー…」

ほのか「さすが日本だね！！」

日本「ありがとうございます。さ、早く家にもどりましょうか」

日本はドアの方に歩いていき、ドアノブを握ろうとする

日本「……え？」

なつじ「どしたの日本？」

日本「ドアノブが……ありません」

四人「……あ」

そう、さっきの苑子のばか力でドアノブは壊れてしまったのだ

つまり

「「「「「出られない……」」」」」

いろんな意味でピンチなのだった

さいほの「や、やっと出られた……」

ほのか「なにもかも全部苑子のせいだよ」

苑子「え!?ちゃうよ!?」

なつじ「いや、お前だろ」

日本「出口がすぐ見つかってよかったですね……」

私達はなんだかんだであの部屋を出て、そしてまたなんだかんだで出口を見つけて家に戻って来れたのだ

日本「みなさん、お先にお風呂どうぞ。私は着替えてきます」

ほのか「わ、ありがとう!!」

苑子「行こうなつじ!!」

なつじ「いや」

苑子「え!?」

さいほの「早く行け」

四人は風呂場に走っていった

苑子「いっい湯ーだーなー」

なつじ「古っ」

ほのか「気持ちいいー！」

さいほの「広いな。泳げるよ」

ほのか「泳ぐな」

日本『着替え、置いときますねー！！』

なつじ「あ、はーい！！」

苑子「そろそろ出よっか」

さいほの「……なんだこれは」

ほのか「え？何が？」

先に出たさいほのが置いてあった着替えを見て言った

なつじ「何って……うわっ」

なつじもそれを見てすごく嫌な顔をした

苑子「何々ー？……え」

あの苑子まで驚いている

なんだか知りたかったので三人の所に行った

ほのか「……えぇ…」

そして驚いた

日本がさっき着替えと行って置いてったものは

四人「メイド服……？」

あの人は私達にコスプレさせるらしい……

私達、日本の家でうまくやってけるかなぁ……

その１３　やっぱり逃げるが勝ち（後書き）

―おまけ　ほのかとなつじ―

ほのか「そういえばさなつじ、なんかいつのまに私のことほのかって呼ぶようになったよね？なんで？確か前まで黒須っつ呼んでたよね？」

なつじ「んー？成り行きだよ？」

ほのか「な、成り行き？」

さいほの「じゃ私も名前呼びにして！」

なつじ「ほのかとかぶるからダメ」

さいほの「……」

→名前がほのか

あだ名を変えてもらえないかわいそうなさいほのであった

感想・意見がありましたらよろしくお願いします！

質問とかがあったらどんどん聞いてください！

その１４　夏は暑いのさ☆（前書き）

くたばれエロじじぃぃぃぃぃ！！

ｂｙほのか、さいほの、なつじ、苑子

夏休み編です！

一応、長編の予定です☆

その１４　夏は暑いのさ☆

私達は日本の家でダラダラしていた
今は夏でとても暑いから扇風機をまわしてそれぞれ好きなことをやっている
しかしそんな平和な空間はほどなくしてある人物にぶっ壊されるのであった

アメリカ「みんなーっ！！夏なんだぞーっ！！」
なつじ「知ってるよ消え失せろカス」
アメリカ「……」
苑子「なつじの毒舌が夏になってパワーアップしてるよ；」
ほのか「暑さのせいでイライラしてるからね」
さいほの「今敵にまわすのは危険だね」
なつじのパワーアップした毒舌をあびせられたアメリカは太陽の下で立ち尽くす
日本「みなさんスイカ切ってきた……ってアメリカさん？」

日本は自分の庭で立ち尽くしている汗ダラダラのアメリカを見て驚く

苑子「スイカスイカー♪」

苑子は日本が持っている皿の上からスイカを一つとってかぶりつく

日本「ア、アメリカさん?何やってるんですかそんなところで……」

アメリカ「あぁ、日本……俺って死んだ方がいいのかな……?」

日本「何があったんですかアメリカさぁぁぁん!!」

ほのか「なつじがやったんだよ」

なつじ「違うし、ちょっとお話しただけだし」

さいほの「お話しただけであんなのになるか?」

なつじ「なるなる」

苑子「ならねーだろ」

日本「と、とにかく中に入ってください。」

アメリカ「いいんだ……このまま立ち続けて倒れて死んじゃっても俺は別にいいんだ……」

日本「菜摘さん、あなたホント何したんですか。アメリカさん精神的に大ダメージくらっちゃってますよ」

苑子「イギリスのスコーンなみに攻撃力がぱねぇ」

なつじ「だからホントにちょっとからかっただけだってば」

さいほの「もういいから引きずって中いれるぞ」

ほのか「うん、よいしょ」

苑子「汗ダラダラじゃんっ!!ぬれてるよ!」

さいほの「我慢しろ」

アメリカは私と苑子が無事、回収しました☆

アメリカ「うはー、涼しいんだぞー!!」

ほのか「なんでクーラーつけてんの?節電……」

日本「その話はなしの方向で……」

苑子「東北、早く復興できるといいねー……」

さいほの「そうだな、原発もなんとかしてほしいな」

なつじ「というわけで私達は東北地方の方々を心から応援しています。」

ほのか「クーラーがんがんの部屋にいる人達が言えることじゃないよね」

日本「そういえばアメリカさんは何故私の家に？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「アメリカさん、話聞いてます？」

アメリカ「スイカうまうま♪」

日本「……そろそろ斬りますよ？」

アメリカ「でさ、今は夏真っ盛りじゃないか！」

ほのか「うわ、めっちゃ早口なんだけど！聞き取れなかったんだけど！」

なつじ「スイカの種がめっちゃ飛んできたわ。苑子、アメリカから飛んできた種もろ受けてるし」

さいほの「もう一回言ってくんない？」

アメリカ「こんな暑い中だとイライラして頭もおかしくなっちゃうだろ！？」

苑子「ダメだコイツ人の話聞いてねぇ」

ほのか「私のイライラの原因、ほとんどアメリカなんだけど」

さ・な・苑・日「同感」

アメリカ「だからみんなで夏らしい……」

なつじ「ゆっくりしゃべんなかったらハンバーガー没収な」

アメリカ「だ～か～ら～み～ん～な～で～……」

さいほの「ねぇコイツ殴っていい？」

アメリカ「だ、か、ら、み、ん、な、で」

苑子「うん、次ふざけたらぶっ飛ばすから」

アメリカ「で、だからみんなで夏らしいことをしようじゃないか！」

日本「やっとまともに……」

ほのか「最初っからそうしろよ」

アメリカ「ってことでみんなで海に行くんだぞ！」

さいほの「あー、海かー……」

全員「って、海！？」

アメリカ「うん、海。輝く海なんだぞ」

なつじ「それはわかるけどさ、なんで海？ほかにも夏らしいことあるっしょ。祭とか」

アメリカ「だってフランスが『夏は海しかねーだろ！』って……」

さいほの「あいついつか殺す」

苑子「絶対なんかたくらんでるよね」

ほのか「ありえる。でも海、いいかもね！」

さ・な・そ「え」

ほのか「だって家でダラダラするよりさ、みんなで遊びに行った方が楽しいと思わない？」

苑子「まーそうだけど…」

さいほの「海に行くことに反対はしていないが私達、水着持ってないぞ？」

ほのか「……あ」

なつじ「でも荷物の中に学校のスクール水着が入ってたよ」

ほのか「ま、それでいっか」

フランス「断固反対ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

日本「わぁっ！？」

さいほの「お前どっから出てきてんだよ」

フランスはいきなり庭にある池から飛び出してきた

なつじ「つかなんて格好してんだよお前！！」

しかも全裸で

ほのか「うわっ！！お前そんなに自分の肌を他人に見せたいのかよ！！変態だ、こいつ変態だよ！！」

苑子「おまわりさぁぁん！！ここに変な、いや変態がいますぅぅぅうう！！」

フランス「警察呼ばないでよ！！」

日本「なんでフランスさん全裸なんですか」

フランス「お兄さんスタイルだからかな」

日本「一度、病院に行かれた方がよいと思います」

アメリカ「日本、いつもの八ッ橋どっかいっちゃってるんだぞ」

フランス「とにかく、お兄さんはスクール水着は断固反対です！！」

さいほの「なんでだよ」

フランス「だってスクール水着とかはポロリとかが……」

ほ・さ・な・苑「くたばれエロじじぃぃぃぃぃ！！！」

フランス「ぐはっ！！」

フランスは四人に撃退されて、池に沈められたとさ☆

続く

その１４　夏は暑いのさ☆（後書き）

～おまけ～

イタリア「……ドイツ」

ドイツ「なんだ？」

イタリア「あんまり言いたくないんだけど……」

ドイツ「……」

イタリア「……出番欲しいよ！！」

ドイツ「それはみんなもだ」

イギリス「なんでフランスが出て俺は出ないんだよばかぁっ！！」

ロシア「フランスくん、あれ出たっていえるの？最後死んでたよね？」

中国「フランスはああいうキャラある。オチ担当のキャラある」

というわけで出番のないキャラの雑談でした☆

その１５　水着選びは大事（前書き）

釘バットが一番しっくりくる

ｂｙなつじ

いやぁ……夏ですねぇ…

宿題……終わんねぇよ……

その15　水着選びは大事

アメリカ「でも、スクール水着で海って恥ずかしくないかい？」

さいほの「んーまぁ確かに……」

なつじ「まぁ小学校の水着みたいに名前が堂々と書いてないのはいいけどね」

苑子「でもぶっちゃけ地味だよね」

ほのか「ちっ、めんどくさいけど買いに行くか」

私は立ち上がって、池に浮かんでいる死体を「死んでないよ！？（フランス）」見る

ほのか「アメリカ」

アメリカ「ん？なんだい？」

ほのか「フランスを鎖でぐるぐる巻きにしてあとこのお清めの札をフランスに張って庭にある蔵の奥深くにある古い箱にいれてしっかり鍵をかけてきて」

アメリカ「任せるんだぞ！！」

苑子「了解しちゃうのかよ！！」

アメリカは池に浮かんでる死体という名のフランスを担ぎ蔵へと走って行った

ほのか「よしっ、邪魔者もいなくなったことだし買いに行くか！！」

さいほの「いなくなったっていうか封じたよね」

ほのか「あいつは封印するべきなんだよ。わかってくれ」

なつじ「封印っつーか完全に死ぬだろ」

ほのか「気にしな～い、気にしな～い♪」

日本「気にしてください……」

ほのか「さー、行くぞー♪てことで日本、どこで○ドア出して」

日本「当たり前のように言わないでください；」

苑子「うーん、やっぱショッピングモールとか涼しーねー」

私達はなんだかんだで近くの大きいショッピングモールに到着し、水着売場に来ている

なつじ「さ、さっさと選んで帰っぞ」

なつじは大人の水着を見始める

苑子「あれ?なつじは子供用の水着売場を見るべきなんじゃない?」

なつじ「ぶっ殺すぞ」

ほのか「さいほの、これ似合うんじゃない?」

そう言って私はさいほのに水色のフリフリワンピースの水着を見せる

さいほの「えー……ちょっと子供みたいじゃないか?なつじならまだしも……」

なつじ「みんなそろって殺されたいの?」

釘バットを握るなつじ

日本「菜摘さん、釘バットって古い……」

なつじ「釘バットが一番しっくりくる」

日本「答えになってませんよ……」

アメリカ「お腹空いたんだぞ……」

ほのか「アメリカは水着買わないの?」

私はお腹が空いて少し元気がないアメリカに聞く

アメリカ「俺かい？俺は去年とかので大丈夫……」

「なーにが大丈夫だ」

苑子「わ、イギリスじゃん」

アメリカの隣には久々の登場、ツンデレ眉毛のイギリスがいた

イギリス「ツンデレ眉毛ってなんだばかぁ！！」

ほのか「語りに文句つけないでよー。私あんま国語得意じゃないからこういうの苦手で……」

イギリス「苦手とか得意じゃないの問題じゃないだろ！」

なつじ「なんでいんのイギリス？」

イギリス「水着を買いにな……つかお前、物騒なもん持ってんなぁ……」

なつじが持つ釘バットに軽く引くイギリス

さいほの「太って入らなくなったか？」

イギリス「ちげーよ、もうそろそろ変えた方がいいと思っただけだ。んでアメリカ、お前去年の水着が着れると思ってんじゃねーぞ……」

アメリカ「ど、どういうことだい？」

イギリス「そのまんまの意味だ。お前去年と比べて結構太っただろ」

アメリカ「そういえばお腹が出てきたような……」

アメリカは自分の腹を見て少し不安そうに言った

イギリス「だから買い替えた方がいいぞ」

アメリカ「イギリスのおごりがいいんだぞ」

イギリス「誰がおごるかバカ」

イギリスとアメリカは二人で男性用の水着売場に歩いていった

ほのか「日本は買わなくて大丈夫？」

日本「私は泳がないので……」

さいほの「えー、なんでだよー。せっかくの海なんだから泳ごうぜっ☆」

なつじ「さ、さいほのがめずらしく☆マークを……」

苑子「明日は雪が降るね」

さいほの「そんなにダメか？ダメなのか？」

さいほのは少し落ち込む

ほのか「みんなで泳いだ方が楽しいでしょ？ほら、買った買った！」

私は日本の背中をおす

日本「え、でも今貯めてるお金は夏コミのための……」

ほのか「はよ行け」

日本「……はい」

日本は渋々アメリカ達の所へ歩いていった

しっかし水着種類いっぱいあんなぁ……

迷う……

なつじ「水着、ワンピース系のやつで大丈夫だよね？」

苑子「うん、まぁそうだよね」

アメリカ「買ってきたんだぞー！！」

さいほの「早っ！！」

アメリカが袋を持って笑顔で帰ってきた

ほのか「イギリスと日本は？」

アメリカ「まだ買ってなかったから置いてきたんだぞ！！」

ほのか「ほー」

なつじ「苑子、これいいと思わない？」

苑子「あ、いいねー！！それでいいんじゃない？」

なつじ「そーだね。買ってくる」

なつじは黄色のワンピースの水着を持ってレジへと走る

しかしそのなつじの前に

フランス「ワンピース断固反対ぃぃぃぃ！！」

なつじ「ぎゃぁぁぁああああ！？」

変態が現れた

さいほの「なんでお前いんだよ、ちゃんと封印したはずじゃ……」

イギリス「お前ら、コイツ封印したのか……」

苑子「わぁお、いつの間に」

いきなり現れたイギリス＆日本。

日本「はい、買い物の邪魔になると思ったので……」

フランス「今、お兄さんすごく傷ついたんだけど……」

ちょっと涙目になったフランス

アメリカ「それにしてもよく抜け出せたねー！！」

フランス「お兄さんに出来ないことはないからね♪」

ほのか「次はもっと頑丈にするか」

フランス「やめてやめて！！」

さいほの「お前ワンピース断固反対ってじゃあビキニにしろってか？」

フランス「その通り！！」

なつじ「やだよー、私ワンピースがいい」

フランス「ダメだぁっ！！ワンピースもポロリがない……」

ほ・さ・な・そ「くたばれぇえええ！！」

フランスはまた四人にボコボコにされたとさ☆

その１５　水着選びは大事（後書き）

～おまけ～

中国「なんであへんに出番があって我にはないあるかぁぁぁあああ！！」

ドイツ「落ち着け中国！！」

ロシア「中国くん、君だけじゃないんだよ？出番がないのは」

イタリア「ヴェ……」

またまた出番がない人のトーク☆

イギリスは無事脱出できたようです

その１６　目的地まで行く時が１番楽しい（前書き）

なんか……周りがすごく綺麗に見える……！！

ｂｙイギリス

気付いたら８月の後半になっていた……

し、宿題……；；；

その１６　目的地まで行く時が１番楽しい

さいほの「もう集合時間だぞ！！」

ほのか「苑子が起きないから！！」

なつじ「そうだよー」

苑子「だって眠かったんだもん……」

日本「は、はぁ……はぁ……」

私達は走っていた。

本当は８時に駅に集合（どこの？っていう質問はなしで☆）のはずだったのだが、家を出たのは集合時間の３分前。家から駅まで行くのにかかる時間は約１５分。つまり完ぺきに間に合わないのだ。

遅刻したら絶対ドイツに怒られるよ……

ほのか「つ、疲れた……」

さいほの「朝ごはん食べてないし……」

苑子「なんでこんなことに……」

なつじ「お前のせいだろ」

日本「ぜぇ……はぁ……」

ていうか日本さっきからしゃべってないよね？しゃべってるみたいになってるけど「」の中、息の音だよね？

さいほの「あ、駅がみえてきた！！」

なつじ「家から駅まで走れば8分ちょっと……っと」

苑子「メモせんでええわ」

ほのか「とにかく走るぞーっ！！」

私達は体力に限界が近付いている日本の手を引き、駅まで全速力で走って行った。

イタリア「ヴェ……来ないね……」

イタリアは駅前に立ってる銅像の台に座って心配そうに呟く

ドイツ「あぁ……もう集合時間から5分たっているのだが……」

ドイツも腕時計を見て言う

イギリス「寝坊か？」

アメリカ「俺は楽しみで眠れなかったんだぞ！！」

フランス「ホントお前は子供だなぁw」

中国「それよりフランス、お前なんでそんなに傷だらけあるか」

ロシア「中国くん、それはふれちゃいけない所だよ。」

フランス「大丈夫さ！いずれ消えるのさ☆」

イギリス「漫画とかだといつの間に傷とかが治ってるよな」

アメリカ「お決まりなんだぞ！」

イタリア「ヴェ……？あ、あれ日本達じゃ……」

イタリアは指を差して問う

イタリアが指差した方向を見ると全速力で走る少女四人とその少女達に腕を引かれながら苦しそうだが必死に走っている青年がいた

中国「ほのか達ある！」

ロシア「あの五人、かなり汗だく……」

ほのか「ぜぇ……遅れて……はぁ……ゴメ…ゲホッゴホッ！！」

ドイツ「と、とりあえず息を整えてから話せ！」

私達はとりあえず深呼吸をする

ある程度、落ち着いたので私は話しはじめた

（日本はまだつらそうだが）

ほのか「いやぁ遅れてゴメン。苑子が昨日の夜に遅くまでアニメ見てたから朝起きれなくて私達四人で必死に苑子を起こしたんだけど苑子がやっと起きたのは７時５０分。そこから準備やらなんやかんやをして、家を出たのが７時５７分なんですぜ、旦那」

中国「つまり原因は苑子あるね？」

苑子「録画をする機械が壊れちゃってリアルタイムで見るしかなかったんだよぅ……」

ほのか「私も見たかったよ……夏〇友人帳。どーだった？」

苑子「お腹が痛くてトイレずっと入ってたら見過ごした」

ほのか「意味ねーじゃん。つかどんだけトイレいたんだよ」

ドイツ「まぁ行くか」

なつじ「あれ？説教とかしないの？よかっ……」

ドイツ「してほしいか？」

ニヤリと笑うドイツ
不気味すぎますぜ隊長

なつじ「滅相もございません」

ドSなドイツにはドSななつじも恐れてしまうのだった

そして私達は切符を買い、電車に乗り込む

さいほの「何分くらいで着く？」

フランス「2時間ちょっとかな？」

長いなオイ。

まぁ暇なのでー……

ほのか「なんかよくわからんゲームゥ！！」

苑子「イエーイッ！！」

苑子だけのってくれた

ありがとう苑子。

日本「なんかよくわからないゲーム……と言いますと？」

よくぞ聞いてくれた日本

私はどこからか箱を取り出し説明を始める

ほのか「まずココに箱があります。この中には様々な罰ゲームが書かれた紙が大量に入っています。じゃんけんで負けた人はこの箱の中の紙を一枚ひき、紙に書かれている罰ゲームに従ってもらうというゲームです。ちなみにじゃんけんに負けた人に拒否権はありませんのでそこらへんは理解してくださいまし」

なつじ「ほぅ、なんかおもしろそうだな。やるか！」

なつじはやる気満々だ

イギリス「でも俺は……「最初はグーッ！じゃーんけーんポイッ！」話聞けよ！！」

全員が手を出す

イギリスがグー、それ以外の人はパーだった。

ほのか「さぁイギリス、ひきなさい☆」

イギリス「俺かよ……」

イギリスは嫌そうに箱に手を突っ込み、三角に折られた髪を一枚取り出す

それを私は受け取って内容を読み上げた

ほのか「『右隣の人を１０分間見つめ続ける』だってさ☆」

イギリスは反射的に右隣を見る。

イギリスの右隣に座っているのは……

イギリス「……フランス……」

イギリスは思いっきり嫌そうな顔をする

フランス「うふふ、お兄さんドキドキしちゃう」

イギリス「気持ち悪いんだよ！！嫌だこんな……」

ほのか「拒否権はないのよイギリス？」

私はイギリスの耳元であることを囁いた

聞き終わった途端イギリスの顔がどんどん青ざめていく

ほのか「これをばらされたくなかったら従うことね」

イギリスは涙目になりながらフランスを見つめ始めた。

（というか睨んでいる）

ほのか「さー、始めましょー☆」

全員「（コイツはイギリスに何言ったんだ……；）」

イギリス「っておい、俺はフランスを見たままじゃんけんすんのか？」

ほのか「もちのろん」

イギリス「ど、どうやれと……」

ほのか「はーい、じゃーんけーん「だから話聞け！！」」ポイッ！！」

イギリス、チョキ
それ以外、グー

イギリス「またかよ！！」

アメリカ「運悪すぎなんだぞ」

なつじ「さぁ引け」

イギリス「チッ……」

イギリスは紙を引き、私に手渡す。

ほのか「えーっと……『最高のキメ顔をする』だって」

イギリス「なんで俺が引くやつは恥ずかしいのばっかりなんだよ！！」

顔を真っ赤にしてキレるイギリス。

イタリア「イギリス、罰ゲームっていうのは大体恥ずかしいことなんじゃないかな」

イギリス「つーか俺、フランス見たままキメ顔すんのか！？」

苑子「じゃぁ３０秒だけ見ないでいいよ」

イギリスはフランスから眼を放す

イギリス「なんか……周りがすごく綺麗に見える……！！」

フランス「どういうことだゴラ」

ロシア「じゃ、最高のキメ顔をどーぞ♪」

イギリスは戸惑いつつも自分では最高のつもりのキメ顔をした

イギリス「……何笑いこらえてんだよ！！」

全員、必死に笑いをこらえていた

ドイツ「い、いや……笑いなど……こらえてないぞ……ククッ……」

さいほの「フフッ……」

ほのか「……プッ」

イギリス「……やらなきゃよかった……」

イギリスはかなり後悔したらしい

ほのか「じゃーんけーんポイッ！！」

負け……苑子、イタリア

苑子「っあー、負けちったー」

ほのか「複数の時は誰か一人がくじを引いてそれに従ってね」

苑子「よし、引けイタリア！！」

イタリア「お、俺！？」

苑子「うん、わっち運悪いんだもん」

イタリア「それ俺もなんだけど……」

イタリアはくじを引く

ほのか「えーと……『前にいる人に愛の告白』だって♪」

苑子「なんじゃそら……」

苑子は前を見る

苑子の前の人はなつじだ

苑子「（よかった女で……、しかもなつじだし）」

イタリアの前はドイツだからイタリアはなんのためらいもなくドイツに愛の告白をする

イタリア「ドイツ、世界で君が1番好きだよ！」

ほのか「どうしよう、この二人なのにＢＬに見えてしまった……」

ＢＬ嫌いなんだけどなぁ…

ロシア「苑子ちゃん、言わないの？」

苑子「あ、うん」

苑子はなつじを見る
なつじはそれを睨み返す

さいほの「睨み返すな……；」

ほのか「苑子ちょっとビビってるよ」

苑子「えと……よしっ」

苑子は決心して口を開く

苑子「君は道端に咲く名前も知らない小さい花のよう……！！」

なつじ「喧嘩売ってんのかてめぇはぁぁぁああ！！」

なつじが苑子にアイアンクローをする

苑子は綺麗に宙に舞い頭から床に落下する

アメリカ「よく飛んだんだぞ……」

アメリカが動かない苑子を見て顔を青くして言う

イギリス「真面目に考えても結局そうなるのか……」

中国「ある意味天才ある」

ほのか「背が小さいなつじにとっては最高の侮辱だね」

なつじ「てめぇも死にてぇか？」

ほのか「は、はは……」

なつじ、超機嫌悪ぃ……

フランス「苑子ちゃん動かないけど大丈夫かい？」

さいほの「ほっとけば大丈夫だろ」

ほのか「大丈夫じゃないよ……」

『次は〇〇駅～、次は〇〇〇～』

電車にアナウンスが流れた

もうすぐ目的地だから私達は荷物をまとめる

そしてちらりと窓を見ると……

ほのか「おぉっ！！」

さいほの「どした……ってわぁ……」

なつじ「海だぁぁ！！」

窓の外は綺麗な青い海が広がっていた

苑子「海！！？」

ほのか「起きた！！」

さいほの「だからほっとけば起きるっつったろ」

私達の叫び声で死んでた苑子が飛び起きる

日本「綺麗ですね……」

イタリア「ヴェー……」

私達は駅につくまでずっと窓の外を眺めていた

その１６　目的地まで行く時が１番楽しい（後書き）

ほのかがイギリスに何を囁いたのかはみなさんのご想像にお任せします☆

その１７　海に行ったらまず泳げ！（前書き）

仕方ないので斬っちゃいました☆

ｂｙ日本

夏休みもう終わっちゃうじゃねーか！！

しかし夏休みが終わっても夏休み編は続きますぜ☆

あの人達が久々の登場です！！

その17　海に行ったらまず泳げ！

苑子「海だぁぁぁぁあああっ！！」

なつじ「黙れウザいくたばれ苑子」

苑子「……ぐすっ」

こんにちは、ほのかです

というわけで海です
やっと着きました

青い海、白い砂浜、そして砂浜にうちあげられた大量の海藻が私達を迎えてくれました

さいほの「しっかし暑いね、水着に着替えて早く泳ごう」

ほのか「おっしゃぁぁ！！まっかしとけぇぇぇい！！」

私と苑子は更衣室に直行した

イギリス「元気だなあいつら……」

日本「フランスさん、まさか更衣室をのぞこうなんて考えてませんよね？」

フランス「かっ……考えてねーよっ！！」

中国「考えてたあるな……」

さいほの「マジかよ、近づくな変態。行くよなつじ」

なつじ「うぃーす」

ロシア「今のさいほのちゃんの目、思いっきりフランスくんを軽蔑した目だったね」

フランス「うぅ……」

アメリカ「とにかく早く着替えて早く泳ぐんだぞ！！」

男性陣も更衣室に歩いて行った

なつじ「あれ、中国は女子更衣室じゃないの？」

中国「我は男ある！！」

『やっと見つけたわ。我々の計画の邪魔な存在』

『あの時は手間がかかったからね。』

『えぇ、でも今回は前みたいにはいかないわ。』

『全員まとめて排除してやろう』

『失敗は許されないわよ、キリハ』

『わかってるさ、キリカ』

黒いマントに身を包んだ蒼い髪の男と女は怪しく笑った

苑子「うーみーはー広いーなーおぉーっきーなー」

なつじ「黙れ読みにくい」

苑子「さーせん」

さいほの「男性陣の方が着替えるのが遅いとはどーゆうことだ」

ほのか「人数多いからね」

イタリア「おまたせー！」

ドイツ「遅くなってすまない。フランスが女子更衣室をのぞこうと……」

さいほの「まだ諦めてなかったんかいな」

日本「仕方ないので斬っちゃいました☆」

ほのか「いやそんな『やっちゃいました☆』的なテンションで言われても……」

フランス「痛かった……」

苑子「痛かったで済むことじゃなくね？」

私達は砂浜にビーチパラソルをさし、その下に休み場所を作り海に飛び込んだ

アメリカ「イェーイッ☆」

なつじ「ちょ、アメリカ！水！水飛ぶ！しょっぱい！！」

各自好き勝手に遊ぶ

しかし日本だけビーチパラソルの下で休んでた

日本「若いっていいですね……」

「日本、泳がないの？」

日本「はい……ってえ？」

日本の前にいたのは知らない顔の少女だった

日本「えと……どなたですか？」

「はぁ？何言ってんの日本。私だよ私」

その人物は眼鏡をかけた

日本「ほのかさん！？」

そう、正体は私でした☆

ほのか「そーだよ！」

日本「ぜ、全然違う……」

ほのか「よく言われるぜ」

私は眼鏡を外す

ほのか「さ、早く泳ごー！！」

日本「えっ、ちょ……」

私は日本の背中をおした

日本、顔から海にザブーン！！

ほのか「あ、ゴメン！しょっぱいよね、水」

日本「いえ、ちょうどいい塩加減です」

ほのか「え……」

苑子「なつじー、浮輪外しなよー」

なつじ「やだ。泳げないから」

なつじは浮輪をしてプカプカ浮いている

苑子「泳げないんじゃなくて底に足がつかないだけじゃないの？」

なつじ「死ね」

なつじは苑子を沈めた

さいほの「あ、なんか薮崎が沈められてる」

ほのか「ホントだ」

日本「よく冷静に言えますね……」

アメリカ「ＨＡＨＡＨＡ☆」

私達の遠くでアメリカが大声で笑いながら泳いでいる

さいほの「元気だね」

ほのか「そうだね」

日本「若いっていいですね」

中国「三人ともじじぃみたいある……」

ほのか「あ、中国。いたの？」

中国「さっきからいたある……。それより昼にするあるよ」

さいほの「おう、今日の昼は何かなー」

日本「私が作ってきた弁当です」

中国「＋イギリスのスコーンある」

……

ほのか「わっ……私まだ泳いでる！！みんな先に食べてて！」

さいほの「待てやゴラァ！！お前も道連れじゃぁっ！！」

逃げようとしたがさいほのにあえなく捕まる

ほのか「嫌だぁっ！！イギリスのスコーン食べるくらいなら昼飯くらいぬいてやるぅぅっ！！」

さいほの「ちょっとくらいなら大丈夫だろ！！」

ほのか「さいほのはヘタリアのことよく知らないからそんなこと言えるんだよ！！あれは……あれは暗黒物質（ダークマター）、いや殺人兵器なんだぁぁぁああ！！」

さいほの「落ち着け！！食べなきゃいいだろ！！」

ほのか「無理だ！！あのイギリスの笑顔を見たら食べなきゃいけない気がするんだ！」

さいほの「お前のイギリス萌え的ななんだかは捨てろ！！」

ほのか「私はイギリスより日本が好きなんだぁぁあああっ！！」

さいほの「知るかぁぁあああっ！！」

直後、腹部に激痛が走り私の意識はそこで途絶えた……

ほのか「……はっ」

私が目を覚ました場所は砂浜の上、というかさっき設置した自分達の休憩場所だった

私の顔を皆が覗き込んでいた

ほのか「……ココハドコデスカ？」

苑子「テンゴクデース」

なつじ「ナグリマスヨー」

苑子「ジャア、チキュウデース」

なつじ「コロシマスヨー」

苑子「ジャア……」

さいほの「もういいやめれ」

私達のボケ合戦はさいほのの仲裁で、ひとまず終了する

ほのか「んで、ここが砂浜の上だっつーのは最初っからわかってたけど」

なつじ「じゃあ聞くな」

ほのか「いいじゃーん別にー。それよりなんで私はここにいるの？

確か海で泳いでた気がするんだけど……」

イタリア「俺、詳しい事はよく分かんないんだけどさいほのちゃんがぐったりしたほのかちゃんを担いできたんだよー。びっくりしたよー！！」

中国「あぁ、皆には言ってなかったあるな。いろいろあってさいほのがほのかの腹を思いっきり殴って気絶させたある。」

日本「いきなり気絶されたので驚きました」

へー……ほぉー……

なぁるほどぉ……

ほのか「さーいーほーのーちゃーん？」

さいほの「私はなんも知らんよ」

ほのか「嘘つくな！！目撃者だってちゃんといるんだからな！！」

さいほの「いやぁ、やってみたくて☆」

ほのか「やってみたくて☆じゃねーよ！！気絶するほどやるやつがどこにいる！！」

さいほの「ここにいる」

ほのか「だぁぁあっ！！ムカつくぅぅう！！」

苑子「落ち着けＭＥＧＡＮＥ」

ほのか「黙れ！！全然かっこよくねーんだよ！！つか今眼鏡かけてねーよっ！！」

フランス「そこですか」

日本「とりあえず落ち着いてください……」

ほのか「うん」

なつじ「落ち着くのはやっ！！」

イギリス「ほのか、もう気分は大丈夫か？」

ほのか「うん！！大丈夫！！元気１００％！！」

イギリス「じゃあ俺のスコーン食べれるよな？」

イギリスが笑顔で真っ黒なスコーンを差し出す

ほのか「ごめん、急に元気なくなった。みんなで食べて」

ロシア「でもみんな先に食べちゃったよ？」

ドイツ「……まぁがんばれ」

全然気付かなかったがみんなの顔色がかなり悪い

ホントにあの殺人兵器を食べたらしい

意識があるだけでもかなりすごい

苑子「私はさっきまで意識なかったよ」

ほのか「そうなの！？いや、お腹いっぱいだから……」

イギリス「あと一つだけなんだ。食べてくれるか？」

イギリスがさっきと変わらない笑顔で私の手の上に殺人兵器を置く

こ……これを食べるの……？

ほのか「ちょっとトイレ……」

アメリカ「逃がさないんだぞ」

逃げようとしたがアメリカに手を掴まれ引き戻される

ほのか「え……えと…」

なつじ「食べるよね？」

なつじが黒い笑顔で言うがこの殺人兵器に比べたら怖くもなんともない

ほのか「あ……え…」

全員「さぁ！！」

全員に言われる

ほのか「う……うわぁぁぁあああっ！！」

私は叫びながら黒い物体を口にいれた

その後の記憶がないのは言うまでもない

その17　海に行ったらまず泳げ！（後書き）

イギリスのスコーンってどんな味がするんだろーか？

一回食べてみたいです！

軽ーく次回予告

海で楽しく遊ぶ四人と枢軸・連合。

しかしその平和な時間はあいつらによって破壊される……！！

まぁこんなかんじですかね。

お楽しみにー

その１８　眉毛の屍（前書き）

いや……俺死んでねぇし……

ｂｙイギリス

話が進まねーぞコンチクショウ

宿題終わらねぇぞコンチクショウ

さいほの「知るか」

その１８　眉毛の屍

ほのか「うー……頭痛ぇー……」

さいほの「二日酔いのおじさんか君は」

私はイギリスのスコーン（別名、殺人兵器）を食べて見事に気絶し、
さっき目が覚めた

ほのか「さいほのとかよくたえられたね……」

さいほの「もうすぐで意識が飛びそうだったけどな」

ちなみに今、休憩場所には私とさいほのしかいない

みんな泳いでいる

ほのか「さいほのは泳がんの？」

さいほの「ちょっと休憩。疲れたからな」

さいほのはクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し口に
ふくむ

さいほの「黒須もちょっと飲んだら？」

そう言ってコーラを手渡された

私はそれを飲む

ほのか「うぅー！炭酸強ぉっ！！」

さいほの「蓋を開けた直後のよく冷えた炭酸水って妙に炭酸強いよね」

ほのか「あぁーわかる」

こう話してると普通の女の子なんだけどなぁ……

ほかの人から見たらまさかこのどこにでもいる女の子が世界を救う人間として命を狙われてるなんて思わないよねぇ……

つかそんな設定、読者さん忘れてるよねー☆

ま、この世界に来てからたいした出来事何も起きてないし……

大丈夫だよね？

『ふっ、完全に油断してるな』

キリハがビーチパラソルの下でのんびりしている少女二人を見て言

った

『これなら楽にできるわね』

キリカがニヤリと笑う

『うーん、そうはいかないかもね』

『どういうこと？』

『あの国の八人、なかなか強いよ。一部を除いて』

一部というのは言うまでもない

『ドイツやアメリカは運動神経がいいからもちろん戦うのは強いはず。日本は剣術が得意。イギリスは……うん、あれだ。魔法的な何かでバーンと。中国は中国だからな。カンフー的な何かだ』

『ちょっと待って。最後らへん適当すぎない？』

『気にするな。まぁイタリアはヘタレだからな。何も出来ないだろ。フランスは弱いかもしれないがそこそこ戦力にはなるはず』

『手強いわね……』

『でも1番気をつけるのはあのバカ四人組だ。がむしゃらだがいろんな意味で強い』

『えぇ、いろんな意味でね』

キリカとキリハは少し呆れ顔で言った

『しかしどうやって殺すの？』

『ここは海だ。最高の殺人スポットだと思わないかい？』

キリハはとても嬉しそうに海で遊んでいたり休んでいたりする標的を見た

イギリス「……ん？」

苑子「どしたの眉毛」

イギリス「んだとゴラ。さっきから嫌な予感がしてな……」

なつじ「またまたぁ、イギリスの嫌な予感ってのはあんま信用できないよねぇ」

イギリス「うるせぇ！！」

アメリカ「イギリスーッ！！！」

イギリス「ぶふぉぁ！！」

突然、アメリカがイギリスに突っ込んできた

メタボ気味のアメリカが上にのかっているため沈むイギリス

苑子「わぁぁ！アメリカ！死んじゃう！イギリス死んじゃうよ！！」

アメリカ「え？」

苑子の叫びを聞いてイギリスを見るアメリカ

しかしイギリスはもう動かなくなっていた……

なつじ「ぎゃぁぁあ！？イギリスぅぅぅ！！」

アメリカ「あ、ゴメンなんだぞ☆」

苑子「謝る気全然ねーよコイツ」

イタリア「どうしたのー……ってわぁぁあ！？」

泳いできたイタリアが動かないでそのまま浮いているイギリスを見てかなり驚く

イタリア「うわぁぁん！！ドイツー！イギリスが死んでるよぉぉ！！」

ドイツ「何！？」

イタリアに呼ばれてドイツと日本達もやってくる

イギリス「いや……俺死んでねぇし……」

ほのか「どーかしたのー？」

休憩場所にいた私とさいほのもその場に泳いできた

中国「こ、これは大変ある！すぐに人口呼吸を……！」

さいほの「誰がすんの？いっとくけど私達女子は断るね。いろいろあれだし」

ほのか「この小説は恋愛なしの方向だから☆」

苑子「イギリスと……」

なつじ「何照れてんの？苑子」

苑子は妄想ワールドに入ってる

フランス「じゃあ俺が！！」

ほのか「わーわー！！ダメダメダメェッ！！恋愛はなしだけどＢＬはあり、ってわけじゃないからぁ！！」

フランスが人口呼吸をしようとしたところを私が必死にとめる

中国「でもこのままだとイギリス死ぬあるよ？」

フランス「別にいいよ？」

さいほの「お前は助けたいのか死なせたいのかどっちなんだ」

イギリス「だから俺大丈夫だって……」

イギリスの言葉は誰も聞いちゃいない

というかイギリスの意識があることもみんな知らない

フランス「いやぁ、別に死んでもいいんだけど人口呼吸、お兄さんやってみたくて♪」

なつじ「ギャァァア！！ここに……ここに限りなく変態な最低男がいるよぉぉおお！！」

なつじの叫びで海水浴に来ていた人達がフランスに冷たい視線を浴びせる

フランス「嘘嘘！！だからやめて！！お兄さん泣いちゃうから！」

苑子「勝手に泣いてろカス」

はい、ブラック苑子キターーーー！！！

久々の登場ですねー

苑子「つかやるならやれよ。早くしねぇと大変だろうが」

なつじ「おぉ、ブラック苑子でもイギリスの心配はすr……」

苑子「ほら、早くしねぇと。時間の無駄だから。読者飽きちゃうだろぉが」

思いやりもクソもないブラック苑子ちゃんなのでした☆

その１８　眉毛の屍（後書き）

書き終わって気付いたこと

日本とロシアが空気ｗ

今回、一度も喋っておりません。

このことに気付いたあなた、明日の運勢最高です。

嘘です。

その１９　ピンチ襲来！？（前書き）

死んでねぇって言ってんだろぉぉぉぉおおお！！

ｂｙイギリス

ＢＬ苦手なのに今回ほんのちょっとＢＬありです。

ほんのちょっとですから！！

その19　ピンチ襲来！？

イギリス「……はぁ、はぁ……」

イギリスが疲れたように息をしている隣には頭にたんこぶを作ったフランスが浮いていた

おっとこれでは状況がイマイチわからないと思うんで時間を少し戻します

ロシア「ねぇ、早くしないとイギリスくん死んじゃうよ？」

ロシアが笑顔でフランスを見る

それに怖じけづいたフランスはイギリスに顔を近付けはじめた

ほのか「もう見てらんないぃぃいい！！」

ＢＬが嫌いな私はそこで目をつむった

フランスの唇がイギリスに触れようとした瞬間！

イギリス「だ～～か～～ら～～……」

動かなかったイギリスがフランスの顔を掴み

イギリス「死んでねぇって言ってんだろぉぉぉおおお！！！」

思いっきりフランスを殴った

フランスは綺麗に宙を舞い、海に落下した

そしてさっきまでのイギリスと同じ状態になった

私達はただただ、その二人の様子を呆然と見ていた

そして今に至る

苑子「イギリス……生きてたの？」

イギリス「国がそう簡単に死んでたまるか」

ほのか「うん、でももしかしたらフランス簡単に死んじゃうかも」

中国「奴はゴキブリ並に生命力が高いある。ほっといても大丈夫ある」

中国の言葉に全員が納得した

『キリハ、あいつらバカなの？』

『今ごろ気付いたの？そう、あいつらは正真正銘の……』

キリハは間を開けて、きっぱりと言った

『バカだ』

『きっぱり過ぎるわ』

苑子「ブェックショイ！！」

なつじ「うわっ、汚っ！」

ほのか「ひでぇなオイ」

日本「風邪ですか？」

苑子「んー、たぶんちがうかなぁ？」

さいほの「誰か薮崎の噂でもしてんじゃねぇか？」

苑子「そうかなぁ……」

→バカの代表

『あの子が1番に反応したわ……』

『あぁ、バカの代表だからじゃないか？』

『悲しすぎるわね、あの子』

二人は苑子を可哀相な目で見た

見られている苑子はまたくしゃみをした

『なんか見ててつらくなってきた、早くやりましょう』

『そんな理由でかよ』

キリハは手を前に出した

『まぁ早くやらなきゃいけないのは変わりないけどね』

キリハの手が青くひかりだし、どんどん光を増していく

『何をするの？』

『まぁ見ればわかるって』

光は激しく光った後、消えた

『これで終わりだ』

さいほの「あ、そうだ日本」

日本と話をしているとさいほのが私達のところに泳いできた

さいほの「実は……ぬぉっ！！」」

しかし突然沈んだ

ほのか「さいほの！！？ってギャァ！！」

足に突然重みを感じ、私も水に沈んだ

足を見てみると重そうな鉄の玉がついている鎖が足についていた。

なんだコレェ！！？

ほのか「ぷはっ！！」

私は頑張って顔を水面から出した

日本「ほのかさん！！どうしました！！？」

ほのか「足にいつの間にか重りがついてる！みんなも気をつけて！！」

なつじ「何が……」

そんななつじの足にも突然重りが現れた

なつじ「わぁ！」

なつじは浮輪をしていたから浮輪に捕まりなんとか絶える

苑子「なつじー、大丈夫ー？」

なつじ「苑子も気をつけて！」

苑子「だーいじょーっ……」

苑子、笑顔で沈む

その場にいた全員がコイツバカだと思った

しかし私は絶えていたが限界になりまた沈む

やばっ！鼻に水入った！！ツーーンってするぅぅうう！！頭いてぇぇ！！

どんどん沈んでく私の手を誰かが握り、引き上げてくれた

ほのか「げほっ！！げほっ！！は……鼻が……」

日本「大丈夫ですか？」

助けてくれたのは日本だった。

あぁ……大好きな日本に助けてもらえるなんて……

今なら死ねる……

ってダメだろ死んじゃ。つか今死にそうになったし。まぁそれどころじゃなくて、

ほのか「さいほのとなつじと苑子の近くにいる人　（人じゃないけど）は助けて！！」

私は周りにいるイタリア達に呼び掛ける

さいほの「がぼがぼ！」

フランス「おい大丈夫か！？」

さいほの「ちっ、お前か……」

フランス「助けたのにひどくない！！？」

フランスがさいほのを助けたが、さいほのめちゃくちゃ嫌そう……。ドンマイフランス☆

なつじ「うぅー！！もーダメ！」

浮輪を掴んでいたなつじは重さに絶えられなくなり、そのまま沈んでしまった

近くにいたロシアは急いで助ける

ロシア「危なかったねー」

なつじ「ありがとー……」

なつじ危機一髪！

あとは苑子だけだ

苑子の近くにいたイギリスはなんとか顔を出している苑子に手をのばす

イギリス「苑子！手、出せ！」

苑子「……ポッ」

イギリス「何照れてんだお前！！バカか！！」

苑子「バ……バカとはなんだ！！私だって……」

しかし突然、大きな波が来て苑子をさらっていった

全員「あっ」

波が消えたときには苑子はどこにもいなかった

なつじ「苑子ぉぉぉおおお！！！」

イギリス「チッ……」

イギリスは苑子を探しに水に潜った

その１９　ピンチ襲来！？（後書き）

なんとなく次回予告っ☆

なつじ「苑子が逝っちゃったんで次回は苑子のお葬式です」

苑子「勝手に殺すな！！」

ほのか「はい嘘です。真面目にやりまーす。さいほのよろしく（＾ー＾）／」

さいほの「おう任せろ！！行方不明になった薮崎！！薮崎は無事なのか！！そしてミス〇ルの運命は！！」

ほのか「おーい話がずれてるぞー」

強制終了。

その２０　嫌な人達と再会（前書き）

どっかで……会いましたっけ？

ｂｙほのか、さいほの、なつじ、苑子

今回は苑子視点☆

その２０　嫌な人達と再会

……あり？

……私……どうなったんだっけ……？

確かみんなで泳いでたら……

あぁ……思い出した……

なつじに殺されたんだ……

いや違うな……

つか絶対違うな……

ん……？よく見たらここ海の中だ……

そうだ、確か足に重りが……

今ならまだチャンスはあるかも！

私はがんばって足を動かし泳ごうとした

まぁ無理なわけで
最初っから泳げないしね
→無意味な行動

あぁーそろそろ息できなくってきたぁ

やばい、私死ぬかもしんない

つか死ぬだろこれ、完全に

こんなところで死ぬなんて……

せっかく二次元に来れたのに……

ま、死んだらなつじ呪ったりとりついたりして遊ぼっと……

私は遠くなっていく水面を見ながらまぶたを閉じようとした

そんな私の前に突然、金髪にエメラルドの瞳の人物が現れた

え、イギリス!?

イギリスは私の腕を掴み、水面へと泳いでいった

苑子「ぶはっ！！げほっ……げほっ……」

私はやっと水面から顔を出し、酸素をめいっぱい吸った

ほのか「苑子！！」

苑子「はー死ぬかと思ったー」

イギリス「俺が行かなかったら確実に死んでたぞ」

苑子「あははっ、ありがとー」

イギリス「べっ、別にお前のためじゃないんだからな！！これは……その……」

出たよツンデレ

めんどくせぇ

ドイツ「とにかく陸に行くぞ。四人は今一緒にいる奴から手を絶対離すなよ！」

ほのか「ほーい。日本、重いかもしんないけどがんばってね！」

イタリア「俺も手伝うよー！」

日本「あ、ありがとうございます」

黒須はイタリアと日本に掴まって泳いでいった

私はイギリスと中国に手伝ってもらって陸まで泳いでいった

この二人と一緒に行けるなんて……！！

薮崎苑子、幸せすぎるぜ！

なつじ「で、どーする？この重り」

みんなが無事に砂浜についた後になつじが自分の足に繋がれている鎖とそれについている鉄の玉を見る

頑丈に繋がれていて簡単にはとれそうもない

んー、どーしたものか

しばらく考えてみて私はあることをおもちついた！！じゃなくて思いついた！！

苑子「そのままでいいんじゃない！？」

なつじ「キングオブバカは黙ってろ」

しかしなつじに冷たくつけはなされてしまう

ほのか「このままじゃ歩くの大変だしねぇ」

黒須は立って歩こうとしてみた

しかし一歩も進めず頭から前に倒れる。い、痛そう……

さいほの「……おい、大丈夫か？」

ほのか「この重り限りなく重たいよ！！足があがんないもん！」

黒須は体を起こして頭に出来たたんこぶを涙目でさすりながら言った

相当痛かったんだろうな……

さいほの「なんか衝撃を与えて壊してみるのは？」

イタリア「壊れるかなー？」

イタリアは黒須のを棒でぺしぺし叩いている

まぁ壊れないわけで

中国「仕方ないあるな。我に任せるある！！」

中国が中華なべを持って私の前に立つ

苑子「えっ、ちょっ、私？つかそれ危な……」

中国「ほあちゃぁぁぁぁああああ！！」

苑子「ちょっと待ってぇぇえええ！！」

キィンッ！！

甲高い音が辺りに響いた

中国「やっぱダメあるか……」

苑子「ジーーーンってきたぁぁっ……」

こっちまでダメージが……

日本「傷すらついてませんね……」

アメリカ「どーなってるんだいコレ！！？」

『ふはははは！！苦戦してるみたいだな！』

全員「！！！！？」

突然、空から声がした

上を見ると二人黒い人がいた

つか浮いとる！！？

『久しぶりだな。よくここまで生きていたものだ』

片方の方が見下したように言う

つか……

ほ・さ・な・そ「どっかで……会いましたっけ？」

『『……』』

誰だあいつら？

『きっ……貴様ら忘れたのか！！？』

ほのか「忘れたも何も会ったことないですよ」

さいほの「イタリア達知ってる？」

イタリア「ううん。知らないー」

ドイツ「俺もだ」

日本「私も覚えが……」

アメリカ「あんなのに会ったかい？イギリスはどうだい？」

イギリス「俺も会ってないな」

フランス「お兄さんも」

ロシア「僕もー」

中国「我もあんな奴ら知らないある」

全員知らないらしい

『忘れたのか！ほら、お前達四人を殺そうと……』

さいほの「殺そうと……？」

『こっちの世界に来る前に、ほら』

なつじ「ヘタリアの世界に来る前に……」

四人「あぁ！！！」

やっと思い出した！！

確か……

苑子「キリヌキ！！」

って名前だったような

『違うわ！！俺の名前はキリハだ！』

『私はキリカよ！』

二人が必死に自分の名前を叫んでいる

ほのか「んで、私達になんか用？」

『決まってるだろ！！お前達を殺しに来たんだよ！』

さいほの「オーマイガー」

『あなた全然驚いてないでしょ』

さいほのはさほど驚いてない

『それよりあなた達の足についてるそれ。そう簡単にはとれないわよ』

キリカが私達四人の足についてるのを指差して言った

なつじ「えー、なんでー」

『その鎖には強力な魔法がかけられてる。そう簡単には外れな……』

ほのか「外れたけど？」

『……』

イギリス「こんなの俺の魔術で外れるさ」

イギリスの魔術？魔法？のおかげで重りは簡単に外せた

あー、足が軽い

『ちっ、やっぱお前達みないな“国”がいると厄介だな』

キリハがイタリア達を見て怖い顔で言った

『やっぱり全員殺した方がいいんじゃない？』

『少し手間がかかるが仕方ない』

二人が話し合った後に私達の方を睨む

イタリア「ヴェ……ドイツ……」

ドイツ「落ち着け、大丈夫だ」

ほのか「あ、なんかすごく嫌な予感がする……」

うん、黒須に同感だ

なんか二人から出てるオーラがハンパないし

どうしよう、このままじゃ死ぬかも☆

いやそんなおちゃめなもんじゃねーな

苑子「あわわわ……なんか出来ないの……」

日本「私に方法があります。合図をするので一斉にここから逃げますよ」

日本の言葉に全員が頷いた

辺りが静寂としている

そして日本が叫んだ

日本「今です！！」

日本が少し大きい玉を地面に叩きつけた

玉は叩きつけた瞬間に白い煙りを出して辺りを覆った

なつじ「すげぇ！！忍者だ！」

中国「早く逃げるある！」

私達は感動しているなつじを引っ張ってその場から逃げた

その２０　嫌な人達と再会（後書き）

なんかロシアとかあんまりしゃべってないような……

まぁ次からがんばろー
→がんばることじゃない

その２１　ただいま逃走中（前書き）

誰のせいだと思ってるあるかぁぁぁ……！！

ｂｙ中国

なんか今回、苑子とアメリカとロシアが真面目すぎるｗｗ

真面目なキャラじゃねーだろこの人達ｗｗ

その２１　ただいま逃走中

『げほっ……げほっ……あ、あいつらは！？』

『ちっ、逃げられちゃったみたいね』

『変な道具使いやがって……！！』

白い煙が消えたときにはもうキリハ達のターゲットは逃げていた

『くそっ、絶対に逃がすな！！』

キリハとキリカは黒い煙となって消えた

さいほの「はぁ……はぁ……ど、どこまで行くんだ……？」

フランス「バスに乗って駅に行こう。ここから駅はかなり遠いからな」

苑子「に、荷物は!?持ってきた!?」

ドイツ「そんなの取りに行く暇がなかっただろう!!」

イタリア「ばっちり持ってきてるであります!」

ドイツ「お前は……」

全員分の荷物を持って敬礼するイタリア

アメリカ「イタリアナイスなんだぞ!!」

イタリア「でももう限界……」

イタリアは倒れた

ほのか「ぎゃぁぁあ!!イタリアぁぁあ!?」

イタリア「いっぱい……走ったし……全員分の荷物……持ってたし……体力的に……限界……」

なつじ「なんかゴメン、イタリア」

中国「とりあえず荷物は持つある。だからがんばるある」

イタリア「も、もう無理ぃ……」

イタリアは動こうとしない

走るのは無理そうだ

苑子「がんばれ！！でも私も限界」

苑子もイタリアの隣で倒れた。

ほのか「苑子までぇぇえええ！？」

苑子「昼に食べた……イギリスのスコーンで、お腹が痛くて……」

ほぼ全員「……はっ！！」

突然、お腹が痛みだした

いだだだ！！

さいほの「うぅーっ！！腹がぁぁああ！！」

ロシア「僕は平気だよ？」

ロシア恐るべし

あ、でもちょっと顔色悪いからつらいんだろうな

今立っているのはロシアと作った張本人のイギリスだけ

イギリス「おっ、おい！！大丈夫か！！？」

中国「誰のせいだと思ってるあるかぁぁぁ……！！」

日本「い、一生の不覚……」

なつじ「うごぉぉおお！！」

イギリス「ちょっと待て！今なんとか……」

『見つけたわ！！』

立ち止まっていたら突然キリカとキリハが現れた

『ちょこまかと逃げやがって！』

キリハが手からなんか玉みたいなものを飛ばしてきた

イ、イリュージョン！？

苑子「うわわわわ！！」

玉は苑子の近くに落下し落下した場所には大きなくぼみができた。

ダメじゃん、道壊しちゃ

苑子「うわぁ……」

つかあれ当たったら死ぬよね。確実に逝っちゃうよね

ドイツ「バス停までもうすぐだ！我慢しろ！」

そう言うあなたが我慢できてませんぜ、隊長

無理しないでくだせぇ

ドイツ「おいイタリア！！立て！」

イタリア「キュー……」

イタリア、見事に気絶

疲れとお腹の痛みが一斉に来たもんだから無理ないな

ドイツ「ったく……ほら、行くぞ！走れ！！」

イタリアを担いだドイツの後を私達はなんとか追いかけた

バス停に着いたときちょうどバスが来たから、急いで乗った

バスの中には誰ひとりいなくて静まり返っていた

やがて入口がしまり、バスは動きはじめた

窓を見るとキリカとキリハが悔しそうに顔を歪めていた

『ちっ、また逃げられたか！！』

『安心しなさいキリハ。あいつらは死ぬという運命から逃げられないの』

キリカがニヤリと笑った

ほのか「よかったぁ、おいかけてこないよ」

座席に座り、私はとりあえず安心する

ドイツ「あぁ、なんとか逃げのびたみたいだ」

ドイツが気絶しているイタリアを座席に寝かせた

なつじ「あれっ、そういえばお腹痛くないよ」

苑子「ホントだ」

確かに

痛くない！！

さいほの「イギリスの魔術か？」

イギリス「あぁ、逃げながら腹の痛みがなくなるように呪文を唱えていたんだ。」

なんかこの小説のイギリス、魔術とか使いまくってる気がする

ま、いっか☆

イタリアも腹の痛みがなくなったせいか顔色がさっきよりよくなっていた

アメリカ「あぁーもう災難だったんだぞ！」

フランス「仕方ないだろ。俺達は世界を救うんだからあいつらに命を狙われて当然さ」

イタリア「ウヴェー……」

イタリアが目を覚ました

ドイツ「大丈夫か？イタリア」

イタリア「ヴェー……なんかくらくらするよぉ……」

さいほの「頭冷やす？氷あるよ？」

イタリア「ありがとー…」

さいほのが袋に氷をいれてイタリアのおでこに当てる

イタリア「ちべたっ」

さいほの「氷だから当たり前でしょ」

ドイツ「すまないな」

さいほの「いいってことよ」

さいほの、お母さんみたいだなぁ……

微笑ましい光景だよ……

苑子「……ねーねー」

しばらく窓の外を眺めていた苑子が全員に声をかけた

ほのか「どしたの？」

苑子「お腹減った」

ほのか「殺すぞ」

苑子「ウソウソ！あのさ、さっきからおかしいと思ってたんだけど……」

苑子が自分なりに真面目な顔をつくった

私達から見たら変顔にしか見えないが

苑子「なんか私達以外に人がいない気がする」

なつじ「え？どーゆーこと？」

苑子「さっき私達が重りのせいで死にそうになったやん？普通誰か

が溺れそうになったら周りの人は助けに来るでしょ？」

私達は苑子の話を黙って聞いている

苑子「でもイタリア達しか助けに来なかったよね？私、変だと思ってイギリスと中国と陸に行こうとしてる時に周りを確認してみたの」

苑子にしてはめずらしく長々と真面目に話をしている

苑子「でも周りにはいつのまにか私達以外誰もいなかったの。キリハ達から逃げてる時、道路を走って逃げてたでしょ？その時にも車が一台も走ってなかったの」

日本「そういえばそうですね……。必死だったので気づきませんでした」

なつじ「苑子、よく気づいたね。苑子のくせに」

苑子「泣いていい？」

ほのか「よくわかったね、苑子！」

苑子「えへへ♪でも問題はそこじゃないの」

イギリス「十分問題だろ」

苑子「だってさ人もいないし、車も一台通ってないのにバスが走ってるなんておかしくない？」

ロシア「あ、確かに……」

苑子「しかもこのバスは私達が来るのを予測していたかのようにグッドタイミングに来たでしょ？このバスは1時間に一回しかここに来なくて毎時間３０分ごろに来てるの」

さいほの「よく知ってるね……」

苑子「さっきバスに乗る前に時刻表をちらっと見たらそう書いてあったんだー」

苑子は照れたように笑った

ドイツ「今は１６時１０分だな……」

苑子「私達がこのバスに乗ったのは１０分前だよね？」

ほのか「ってことはこのバスが来たのは１６時ってこと！？」

めっちゃ遅いｏｒ早いやん！！

苑子「そゆこと！」

苑子が元気よく言う

ロシア「ということはこのバスは……」

苑子「そう、怪しいってこと！」

イギリス「まさかあいつらの……」

全員「罠！！！」

全員が声をそろえて言った瞬間にバスは全速力で走り始めた

なつじ「ぎゃぁぁああ!?早っ!!」

イタリア「ねーねードイツー……」

ドイツ「どうした!?」

イタリアが運転席を指さす

イタリア「そういえばこのバス……運転手いないよ?」

イタリアの言葉にロシア以外全員が顔を青ざめる

ホラーじゃんっ!!

さいほの「じゃあこのバスどこに向かってるわけ!?」

苑子が窓を開けてどこに向かってるか確認する

このバスが向かってる先は……

崖(がけ)だった

苑子「うーん、地獄かなっ☆」

さいほの「きっぱり言うなぁぁぁあああ！！」

普段冷静なさいほのがパニクってるよ……

つか普通パニクるよねこの状況。

なんでロシアそんなに落ち着いてられんのかな

なつじ「どどどどうすんの！？」

イギリス「どうするって言われたって……」

パニクってる内にどんどん崖は近づいて来る

アメリカ「早く降りるんだぞ！！」

アメリカがバスの入口を開けて言う

フランス「降りるったってこんな速さのバスから降りるのか！？危険だ！！」

アメリカ「でもこのままだと死んじゃうんだぞ！」

ドイツ「アメリカ……」

アメリカがほかの人より冷静だ……

イタリア「でも……」

アメリカ「世界が滅びてもいいのかい！？」

イギリス「アメリカ……お前……」

アメリカ、いつもはあんなんだけどちゃんと周りのこと考えてるんだ……

ちょっと意外だ

ロシア「……アメリカくんの言うとおりだねー」

中国「ロシア！！？」

ロシア「こんなところで死んで敵の思い通りになりたくないからねー」

ロシアの言葉に全員言い返すことがなかった

つか言い返したら殺される……

やがてドイツが口を開いた

ドイツ「俺は降りよう」

イギリス「俺も降りるぞ……べっ、別にお前らのためじゃ……」
さいほの「私も降りる」

イギリスのツンデレ、華麗にスルー

苑子「わっちも降りるー！！酔ってきたし！」

なつじ「そこかよ。私も降りる」

ほのか「私も降りるー」

日本「私も降りさせていただきます」

中国「我も降りるある！」

フランス「汚れるのは嫌だけど命の方が大切だからね……。お兄さんも降りるとするよ」

フランスはため息をついた

これで大体の人は降りることを決意した

あとは……

イタリア「……ヴェ？」

全員の視線がイタリアに集中する

イタリア「えっ！？え、えと……」

イタリアはしばらく戸惑っていたがやがて

イタリア「おっ、俺も降りるでありますっ！！」

なぜか涙目で大声で叫んだ

苑子「うー、すぐ終わるって思ったら楽に思えたけどなんか怖いなぁ……」

苑子が開いた入口から高速で流れる景色を眺めながら言う

確かに怖い

下手したら死……

いやいや！！そんなネガティブなこと考えちゃダメだ！

やるからには思いっきり行かなきゃ！！

さいほの「……で、誰から逝くの？」

さいほの、さりげなく不吉な漢字使わないで

アメリカ「ここはイタリアで！」

イタリア「ヴェッ！？なななんで！？」

アメリカ「なんとなく！！」

なんとなくかい

イタリア「やだやだやだやだぁっ！！痛いのやだよぉ！！」

ドイツ「そんなことで泣くな！！」

イギリス「おい、早くしろ！崖、もうすぐそこだぞ！」

確かにもうすぐで崖だ

早くしないとぶっちゃけやばい

アメリカ「じゃあイギリスが先に逝くんだぞ」

イギリス「なんでだよ！あと漢字ちげぇよばかぁ！」

イギリスがアメリカにつかみかかる

苑子「わぁ！！暴れないでよ！落ちちゃうでしょ！」

開いた入口の1番近くにいる苑子が叫ぶ。イギリスとアメリカの争いは壮絶で周りを巻き込んでいく

苑子「ちょっ……だから暴れるなって……あ」

苑子がイギリスに押されたアメリカにぶつかってアメリカと一緒に

バスの外に飛び出す

しかも全員が1番前にいた苑子によっかかっていたから苑子が飛び出したことによって全員バランスを崩して外に飛び出した

全員「……あ」

全員がバスから降りた　（というか落ちた）　後、誰もいなくなったバスはずっと崖まで走っていきそのまま奈落の底へと落ちていった

その２１　ただいま逃走中（後書き）

こんなことがあったら本気で怖いと思う書いた張本人……（作者）

その２２　危機一髪？（前書き）

な、なんだってぇぇええ！！？

ｂｙ苑子

更新遅れました……

運動会の練習とか運動会の練習とか運動会の練習とかで忙しくて……

家に帰って即爆睡だったため全然執筆してませんでした！

反省してまーす
→してねぇ

その22　危機一髪？

なつじ「う、うーん……」

私は瞼を開けて、重い体を起こした

周りを見ると苑子達が倒れていた

なつじ「あー……何があったんだっけ……？」

ガンガンする頭で何があったか思い出す

あ、そういえば全速力のバスからダイブ　（落ちた）　んだ！！

つかよく無傷でいられたな……

ポタッ

安心している私からなんか赤い液体が落ちてきた

なんじゃこりゃ？

私はおでこを触ってみる

なんかぬるっとしていた

触った手を見ると真っ赤になっていた

あー、うん……

……

なつじ「ぎゃぁぁぁああ!!?あっ……頭からぁぁ!!ケチャップがぁぁぁああ!!」

なんだこれぇぇえ!!?

昼にあれか!?ケチャップいっぱいつけたフランクフルト食ったからか!?

ケチャップ食っただけで頭から出るんかぁぁああ!!?

なつじ「だれか助けてぇぇえええ!!」

ロシア「菜摘ちゃん落ち着いて」

なつじ「ぎゃぁぁああ!?ロシアァァアア!?いたのぉぉおお!?」

ロシア「聞いてなかったの?落ち着いてって言ったよね?」

ロシアに黒い笑顔を向けられて私は強引に自分を落ち着かせる

ロシア「あー、頭打ったんだね。血が出てるよー?」

なつじ「血じゃないよ！ケチャップだよ！」

ロシア「ホント一回落ち着いて」

平気な顔をしているロシアも所々擦り傷をつくっていた

なつじ「ロシアも大丈夫？所々ケチャップが出てるよ？」

ロシア「血とケチャップは全然違うからね？あとさっき聞いてて思ったんだけどケチャップ食べただけで体から出るわけないからね？」

パニクっていた時の私の間違いをロシアに冷静に訂正される

なつじ「つかみんな死んでないよね？」

ロシア「うん、さっき確認したけどちゃんと生きてたよ」

ロシアと話をしているとだんだん怖い話になってしまうのは気のせいだろうか

死んだとか生きてたとか笑顔で……

さいほの「うぅ……」

さいほのがうめき声をあげながら起きた

なつじ「チャオー☆さいほの大丈夫ー？」

なんとなくイタリアの口調を真似てさいほのに声をかける

さいほの「なんか体のあちこちが痛い……」

なつじ「ロシアよりは少ないけど擦り傷だらけだねー……二人ともあとで消毒しよっかー」

どうよこのお姉さんぶり！！

これで誰も私のことをチビなんて呼ばなくなる！！

さいほの「自分でできるから大丈夫だよ」

ロシア「こんくらいほっといても大丈夫だよー」

私を頼ってー！！

なんか恥ずかしいよー！！

アメリカ「いっつつ……ここはどこだい？ていうか俺は誰だい？」

イギリス「ふざけるな」

アメリカ「いだっ！」

起きてさっそくボケたアメリカをイギリスが殴る

ほのか「う……よかった……生きてたわ……ってうわっ！なつじ頭からケチャップが！」

ロシア「だから違うってば」

日本「いたた……腰うった……」

中国「あいやぁぁああ……体のあちこちが痛いある……死んじゃうある……」

ドイツ「おいイタリア、大丈夫か？」

イタリア「全然大丈夫じゃないでありますっ！！」

ドイツ「大丈夫だな」

フランス「うわー汚れちゃったよ……」

みんなが次々に目を覚ます

よかった、みんな対した怪我してないね……

あとは……

なつじ「苑子、起きないね」

さいほの「死んだんじゃね？」

ほのか「おい……」

その時、苑子の指がかすかに動いた

そしてゆっくりと体を起こして苑子は立った

苑子「いやー死ぬかと思ったわー」

全身血だらけの姿で

なつじ「今から死んでもおかしくねーからな」

ほのか「ほいっ、出来たでー」

ほのかが私の頭に包帯を巻いて仕上げに思いっきり私の頭を叩く

なつじ「いだっ!!何すんだよ!」

ほのか「いやぁ、つい☆」

なつじ「お前後で覚えてろよ」

苑子「ふがふがふが」

苑子は全身に包帯を巻いているから何言ってるかわかんない

なつじ「全身に包帯って……そんなにひどい怪我だったの?」

よく生きてんな

さいほの「んー？いや怪我はあんましてなかったよ？でもなんか血だらけだったからとりあえず包帯ぐるぐる巻きにしといたっ！」

さいほのが満足した顔で親指をつきあげてグッジョップした

全然よくないよ……

中国「それよりこれからどうするあるか？」

ほのか「うーん、つか人が誰もいないのってなんで？」

なつじ「敵のせいなんじゃないの？」

日本「菜摘さんの言うとおりです」

どうだ！すごいだろう！！褒めろ、讃えろ、ひざまづけぇぇえええ！！

って私はプロイセンか

日本「ここは敵が作り出した異次元の世界です。敵がこの世界を消さないかぎり私達はここから出られません」

苑子「な、なんだってぇぇえええ！！？」

ホントこいつリアクションうぜぇな

ロシア「じゃあ敵を捕まえて消してもらえばいいんだよね♪」

笑顔で言ってるところが余計怖いよロシア

ドイツ「でも敵がどこにいるか……」

ロシア「いい加減出てきたらー？」

ロシアがドイツの声を遮って大声で言った

えっ、いるの！？どこどこ！？

そしたらどこからともなくあの二人が出てきた

『ふっ、気づいていたか。さすが“国”だな』

キリハだとかいうやつが見下したように笑う

うぜぇ殴りてぇ。いいよね？少しくらい問題ないよね？

ということで、

なつじ「なつじパンチ！！」

『ぐはぁっ！！』

なつじパンチ、キリハの顔に炸裂だぜ☆

『キ、キリカぁぁぁああ！！』

あ、姉の方だったわ。やべぇ間違えた。まぁ似てるから悪いんだよ

私はなんも悪くなーい

『貴様！キリカになんてことを！！』

なつじ「いやぁ、つい☆つかお前シスコン？」

『違う！！ただキリカが好きなだけだ！』

さいほの「それをシスコンというのだよ」

ここにきてまさかのシスコン発覚……

キモい……

ロシア「どうでもいいから僕達をここから戻してくれない？」

『戻すわけないだろう！！お前らはここで死ぬんだ！』

苑子「ねぇ、キリハ達はどうしてそんなに私達を殺そうとしてんの？」

苑子がまた変顔、じゃなくて苑子なりの真面目な顔になった

『それは上からの命令だからに決まってるだろう！』

苑子「へー……でもキリハ達、ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

『『！！！？』』

苑子の言葉にキリハとキリカが言い返せなくなる

苑子「あ、図星？図星だよね？図星以外ありえないよね？」

ほのか「なんで嬉しそうなんだよ……」

『お、お前らに話す必要はない！！行くぞキリカ！』

『あ、あぁ……！』

イタリア「あ、ちょっと待って！！ここから出し……」

突然、イタリアの横から高速で何かが二人に向かって飛んでいった

それは二人に直撃し、二人は地面に落下した

『いっつつ……何を……』

ロシア「言ったよね？捕まえてここから出してもらうって」

ロシアは笑顔で地面にささった水道管をぬいた

この笑顔の前ではキリハとキリカも従うしかなかった

なんだかんだで気が付いたらさっきまで静かだったのに車の走る音でうるさくなった

つまり戻ってきたわけだ

苑子「ありがと……ってあれ？」

あのバカ双子はまたどっかに消えちゃったし……

でもよかったー、戻ってこれて

あのままあそこにいたらどうなってたんだろ？

ロシア「異次元世界から出られなくなってそのまま異次元に飲み込まれちゃうんだよ」

なつじ「うん、勝手に心を読まないで」

エスパー？

やっぱロシア怖いわ……

私は空を見上げた

さっきまではオレンジ色だった空が今は真っ黒になっていた

つまり夜だ

さいほの「これからどうするの？」

イタリア「早く帰ろーよー！怖いよー！」

イタリアはドイツの肩を掴みぐわんぐわん揺らす

ドイツ「帰りたいのはやまやまなんだがな……」

ドイツは困った顔で呟く

ドイツ「もう……帰る電車がないんだ……」

苑子「……は？」

ドイツ「ここはあまり電車が通らないんだ。一日に三回くらいしか」

アメリカ「そんな……」

ほのか「あ、じゃあバスは！？」

イギリス「あんなことがあった後でよく乗りたいと思えるな……。あとバスも今日はもうやってこないぞ」

ほのか「えー……」

なつじ「じゃあタクシー！」

中国「どんだけ金かかるあるか。我は嫌ある。第一あの狭い車にこの人数が入れると思うあるか？」

……思いません。

じゃあ……私達野宿するしかないのかな……

日本「そんなこともあると思ってここ周辺のホテルを調べてきました」

日本が紙の束を出して笑顔で言った

日本が菩薩に見えた瞬間だった。

その２２　危機一髪？（後書き）

感想お願いします！！

その２３　温泉は泳ぐところじゃありません（前書き）

じゃあ俺はこっちで寝

出てけ変態

ｂｙフランス、さいほの

夏休み編を書きはじめて約一ヶ月……

もう１０月やん！！秋やん！肌寒くなってきてるやん！！

と思う方もいらっしゃると思います。

しかし安心してください

私の中ではまだ夏休みは続いているのです！！

さいほの「どこに安心すればいいんだよ……」

その23　温泉は泳ぐところじゃありません

紙を片手に道を進んでいく日本を私達は重い荷物を持ちながらついていった

ほのか「に、日本……まだ……？」

日本「申し訳ありません……。先ほどまでいたところは人通りが少なくてホテルまではかなりの距離があることを言うのを忘れていました……」

まだ歩くってことか……

正直つらいな……

フランス「もう真っ暗だな……」

ドイツ「早くしないとまたあいつらがやって来るかもしれないな。がんばろう」

イタリア「……ヴェ、ヴェ……」

さいほの「大丈夫か？荷物持とうか？」

イタリア「だ、大丈夫！！女の子に重い荷物なんか持たせられないよ！」

なつじ「じゃあ私の荷物持って」

イタリア「え、」

さいほの「コラ」

なつじ「あいたっ！」

完全に疲れているイタリアに荷物を持たせようとしたなつじをさいほのはチョップした

鬼か、なつじは

なつじ「鬼じゃない、ドSだ！！」

苑子「自分で言うなよ……」

つか自覚あんのかよ

しばらく歩いていると辺りはだんだん騒がしくなっていき明かりも増えた

中国「やっと都会っぽい所に来れたあるな……」

日本「たぶんこっちです」

人が多いからみんなとはぐれないように日本についていく

やがてどでかい建物の前に到着した

苑子「え、まさかここ？」

日本「はい、そうです」

さいほの「でかっ！！絶対宿泊料金高いだろ！！」

なつじ「ダメだよさいほの、そんな現実的な話はやめよーぜっ☆」

さいほの「いやここは読者も気にするところだろ」

ほのか「なんだかんだでどうにかなるもんなんだよ、金は」

さいほの「世の中そんなに甘くねーよ？」

細かいことは気にしなーい☆

そしてまぁなんだかんだでホテルの中へ

そして部屋ん中

部屋は１０階で男と女でわかれて部屋に入った　（隣同士の部屋）

さいほの「おー、大きーい」

なつじ「つかあっち一部屋で８人！？せまくね！？」

フランス「じゃあ俺はこっちで寝」

さいほの「出てけ変態」

ほのか「フランスは床で寝るから大丈夫じゃない？」

突如入ってきたフランスをさいほのが蹴りで廊下に追い出した後、
私達はお風呂に行く準備をした

苑子「洋風なホテルなのに温泉があるなんてめずらしいねー」

さいほの「なんかいつも露天風呂入ってるからあんま楽しみじゃないな……」

苑子「そうかい！？私はワクワクすっぞ！」

なつじ「うざい」

苑子「ひどい……」

ほのか「お、なんか棚に浴衣が入ってたよー！！」

さいほの「和風と洋風が見事にコラボってるホテルだな」

苑子「じゃあご飯は中華かな！？」

なつじ「どうでもいいだろ、そんなん」

私達はこんなくっだらない話をしながら部屋を出た。
そして隣の部屋のドアをノックした

ほのか「おーい、温泉行こー！」

『ぬわぁぁぁ！！やめるんだぞぉぉぉ！！』

さいほの「……何が起きてるんだ中で」

なつじ「！！！まさかあいつらが来たんじゃない！？」

苑子「マジでか！？よくここだってわかったな！！」

ほのか「と、とにかく助けなきゃ！！」

私達はドアを開けて中に入る

さいほの「お、おい！！大丈夫……か……」

中に入った途端、私達はその場に立ち尽くした

部屋に充満した何とも言えない臭い、そして部屋の隅っこでいがみ合うアメリカとイギリス

イギリスは黒い物体を手に持っている

アメリカ「だぁかぁらぁ！！君の料理なんて死んでもいらないんだぞぉぉぉ！！」

イギリス「な……！お前がお腹空いたっていうからあげてやるんだろうが！！」

アメリカ「お腹は空いたとは言ったけど君の料理が食べたいなんて一言も言ってないんだぞ！！ていうか死んでも言わないんだぞ！！」

イギリス「てめ……！！」

なつじ「なにやってんだてめぇらは」

なつじが二人にチョップする

アメリカ「お腹が空いた、って言ったらイギリスが勝手に料理を差し出して来たんだぞ！！」

イギリス「腹が減ってるなら食えんだろ！！」

フランス「餓死寸前でも食べれないね、お兄さんは」

苑子「私もだなー」

イギリス「てめぇら……」

さいほの「はいはいそこまでー」

イギリスがキレる五秒前のところでさいほのが手を叩いてイギリスの前に立った

さいほの「ふんっ！！！」

そしてイギリスの腹を思いきり殴った。

イギリスは白目を向いてそのまま床に倒れた。

お、オーマイガー……

さいほの「ほれ、行くぞ。早く入りたい」

さいほのはぐったりしたイギリスをドイツに渡し部屋をでた

か、かっこいい……！！のかな？

ほのか「うはぁぁぁ！！でかぁぁぁい！！」

温泉はすんごく大きかった。たぶん百人は余裕でいけるんじゃないか！？

苑子「ダーーーイブ！！」

なつじ「すんな」

なつじは走って温泉に飛び込もうとした苑子の足を自分の足にかけて転ばせた

苑子「ぬごっ！！」

苑子、頭から落下

痛そ……

なつじ「まずはかけ湯だバカ」

さいほの「だからって普通ここまでするか？見てごらん、綺麗な床が赤い液体で汚れていくよ」

うわ！苑子出血しとるやん！！どんだけ出血すんだコイツ！いつか大量出血で死ぬんじゃね！？

なつじ「あ、すいません。ホテルの人。」

ホテルの人かよ

苑子「う、うぅ……」

ほのか「大丈夫？」

苑子「うん！大丈夫っ！」

そう言う苑子は頭と鼻から大量に血を流している

全然大丈夫じゃないように見えるのは私だけだろうか

かけ湯をして私達は湯舟につかる

ほのか「うぅぅぅっ！！日焼けがヒリヒリするぅぅ！！」

苑子「ほんとやね」

なつじ「苑子、日焼けしたん？」

元々苑子は肌が黒いからあんま焼けたようには見えない

苑子「焼けたでー？ほら水着の後がくっきり」

さいほの「ホントだｗって私もだ」

なつじ「うわ、私も」

ほのか「私もだ！」

みんな日焼けした体にくっきりと水着のあとがついている

おかしくて私達は声をそろえて笑った

あいつらに監視されていることに気付かずに……

その２３　温泉は泳ぐところじゃありません（後書き）

夏休み編は遅くても１０月後半には終わらせたいです……

まぁ私の中では夏休みはずっと続ｋ……

なつじ「しつこい」

さーせん

感想等、お願いします！

質問とかあったらどんどん聞いてください！

その２４　浴衣ＤＥトーク☆（前書き）

じじぃだ

立派なじじぃだ

ｂｙさいほの、苑子

最近肌寒くなってきましたね……

風邪をひかないよう気をつけてください

その２４　浴衣ＤＥトーク☆

さいほの「ふー、さっぱりしたぁ……」

さいほのは濡れた髪をタオルでふきながら浴衣の袖に腕を通した

さいほの「……そういえば浴衣ってどうやって着るんだ？」

苑子「さぁ？」

苑子がまぬけな顔で答える

なつじ「私もあんまわかんないな……」

ふっふっふ……

ほのか「ここはほのか様にお任せヨー！！」

なつじ「誰も頼んでないけどな」

なつじの毒舌が心にグサッときたけど、そんなことこの際気にしなーい☆

（と言いながらも涙が出ちゃうのはなぜだろう）

苑子「黒須よく旅行とか行くもんねー」

ほのか「うむ！だから浴衣着るのは　（たぶん）　慣れてるよ！！」

さいほの「おぉ！よろしくお願いします黒須先生！！」

せ、先生……！！
なんていい響き……
よぉし、私にどんどん聞きなさい！

なつじ「体重いくつですか先生」

ほのか「ぶっ殺すぞ」

それは聞くな

ほのか「まずこうしてこうしてこうすんだよ！」

さいほの「先生、何がどうなのかさっぱりわかりません」

ほのか「作者が浴衣の着方を詳しく知らないから仕方ないんだよ齊藤くん」

さいほの「そうなんですか先生」

ほのか「大人の事情なんだよ齊藤くん」

苑子「まだ作者は中学生のガキですよ先生」

ほのか「ノリだよ薮崎くん」

なつじ「もうやめろそのやりとり。うざすぎる」

ちっ、なんか今日のなつじノリ悪ぃーな

苑子「でもさすが黒須！浴衣着れたよ！」

さいほの「こんな黒須にも頼れる所があるんだな」

そ、そんなに頼れないのか私は……

なつじ「おぉー」

ほのか「さ、行こうかー」

私達は女子風呂から出て置いてあったマッサージチェアに座りイタリア達が出てくるのを待った

さいほの「あぁー、そこそこ。気持ちいぃー……」

さいほのは思いっきり和んでいる

なつじ「肩こってたんだよなぁ……」

苑子「ぐおー……」

苑子はいつの間にか口を開けて爆睡していた。

やめて恥ずかしいから

私はなるべく苑子とは他人のふりをしたが周りの冷たい視線は苑子だけじゃなく私にもふりかかる

苑子あとで覚えてろよ……！！

さいほの「つかあいつら遅いな。海の時もそうだったがこういう時に女より男の方が遅いとはどういうことだ？」

なつじ「またフランスが覗こうとしてんじゃない？」

ほのか「それはないでしょw」

ドイツ「その通りだ」

なつじ「冗談だったのに本当だったとはアンビリーバボー」

男湯からぞろぞろと男が出て来た

一名ボロボロだったが

さいほの「覗こうとしただけでなんでそうなるんだ」

アメリカ「そう言うのは聞いちゃいけないお約束なんだぞ！！」

アメリカがＨＡＨＡ☆と笑う

しかし今気付いたけどみんな浴衣似合ってるなぁ……

日本はもちろん外国の人とかが着ても似合うんだな浴衣って

まさにオールマイティアイテム！

って何言ってるんだ私は

日本「まぁ夕食の時間まで部屋でお話でもしましょうか」

こういう時って日本がいてくれて本気で助かる

んで部屋。　（男の方の）

せっかくこういう時なんだし聞けるもんは聞いとかないと！！

と、いうことでぇー……

ほのか「質問コーナー！！！」

苑子「いえーーぃ！！」

よかった、苑子のってくれた

安心するな苑子いると

なつじ「またくだらない……」

ほのか「くだらなくないよ！！さてさて○○県の○○さんからの質問！」

さいほの「募集とかしてねーだろ」

ほのか「まーまー、成り行きだよ成り行き。それよりこのコーナーは今まで疑問に思っていたことを質問しちゃえ☆っていうごくありきたりなコーナーだよ！」

イギリス「まんまだな」

ほのか「つーことで質問っ！」

中国「言った張本人からあるか……」

ほのか「日本って爺って言われてるけど何歳なの！？」

なつじ「黒須にしては普通の質問……。私も気になってた」

日本「そうですね……」

日本が顎に手を当てて考える

日本「忘れてしまいました……」

さいほの「じじぃだ」

苑子「立派なじじぃだ」

イタリア「に、日本～；；おじいちゃんみたいだよ……」

日本「だからもう爺さんですって」

さいほの「あ、次は私が質問していいか？」

ほのか「なになにー？」

さいほの「なんでイギリスの料理はまｚ……」

ほのか「それ以上言うなぁぁぁぁああ！！」

私はとっさにさいほのの口をふさぐ

イギリス「ん？なんだ？」

ほのか「いやいやいやなんでもない！！気にしないで！」

さいほの「んー！んー！」

もがくさいほのをおさえつけて笑顔でイギリスを見る

イギリス「そ、そうか……」

よかった、感づかれなかった……

私はさいほのを解放して安心する

さいほの「で、なんでイギリスの料ｒ……」

ほのか「だぁぁぁぁああ！！！」

もうキリがないからさいほのは気絶させちゃいました☆

イギリス「な、なんなんだよ……」

苑子「なんでもないよ！さいほの、イギリスの料理食べたいらしいからあとでさいほのだけに食べさせてあげてね！いい？さいほのだけだからね！！」

イギリス「え、あ、あぁ……」

まぁ、完全に失神しちゃってるさいほのはおいといて

ほのか「はい次のしつもーん！誰かいなーい？」

フランス「はいはーい！お兄さんが……」

ほのか「はい、ほかー」

フランス「え！？なんで！？」

なつじ「お前が質問することは大体想像できんだよ変態」

フランス「ち、違う違う！お兄さんちゃんとした質問するから！」

苑子「ちっ、仕方ねーなぁ。言わせてやるよ」

なつじ「おぉ、いきなりブラック苑子」

フランス「ほいきた！！ずばり！君達四人のスリーサイズ……」

ほ・な・そ「死ね」

この後、フランスがどうなったかは言うまでもない

さいほの「う、うん……？あれ？」

ロシア「あ、さいほのちゃん。おはよう♪」

さいほの「お、おはよう。って……何があったんだフランス」

さいほのが起きてまず目についたのはボロボロになったフランスだった

ドイツ「……まぁ自業自得だな……」

さいほの「ホント何があったんだ……」

ほのか「私は女の敵を退治しただけだよ」

苑子「ペッッ！！！」

さいほの「そ、そうか……」

ほのか「はいほかに質問ある人っ！」

ロシア「じゃあ僕いい？」

なつじ「ロシアか、なんか珍しいね」

ロシア「えっと……菜摘ちゃんって妹いるよね？」

なつじ「え？うん、いるよ」

ロシア「妹が自分の言うことを聞かない時ってどうしたらいいのかな……」

なつじ「え、そうだなー……殴る？」

苑子「姉とはあるまじき答えだな」

ロシア「そ、そっか……今度やってみるよ……」

ほのか「いや、やんなくていいから」

ベラルーシのことでホントに困ってんだな……

大変だなぁ……

イタリア「うぅ……ドイツお腹すいたよ……」

イタリアはお腹をおさえている

ドイツ「もうこんな時間か」

時計は7時をさしていた

日本「夕食の時間ですね。行きましょうか」

苑子「いやっほぅ！！中華、中華！！」

さいほの「だから中華と決まったわけじゃないってば」

中国「中華料理なら我の国が1番あるよ！」

あぁもう中華料理の話に……

つか私、中華料理苦手なんだけど……

まぁとにかく夕食、夕食ー♪

私達は部屋から出て食事の会場に向かった

その２４　浴衣ＤＥトーク☆（後書き）

感想お願いします！

その２５　食事は計画的に（前書き）

ごっそーさん！！

ｂｙ苑子

今回は普段目立たないさいほのが語り＆メイン　（？）な話

そしてさいほのが萌えに目覚めてしまいますｗ

その25　食事は計画的に

私達はエレベーターに乗り3階にある食事の会場に向かった

さっきからほとんどの人がテンション高すぎてついていけない

薮崎は中華中華うるさいし……

だから中華じゃないかもしれねぇだろーが

いろいろな事を考えていると食事の会場についた

会場についたとたん薮崎を含むほとんどの人達のテンションはＭＡＸになった……

苑子「いやっほーーーい!!中華中華ぁぁぁぁああ!!」

ほのか「肉ぅぅぅぅう!」

イタリア「パァスタァァアアア!!」

アメリカ「ハンバーガーーー!!」

中国「ただ飯食い放題あるぅぅぅぅう!!」

やめろ叫ぶな恥ずかしすぎるし周りの人の視線が痛い

残った私達は入口付近にいる人に自分達の人数を言い席を案内してもらった

（12人って言ったらかなりびっくりされたが）

どうやら夕食はバイキングらしい。席につくと様々な食べ物のいい匂いがただよってきて食欲をそそる
日本にさっき走っていった奴らを捕まえて来てもらいとりあえず全員を席に座らせる

私は一息ついて話しはじめた

さいほの「いいか？このホテルは私達だけじゃなくほかの人も宿泊してんの。だからはしゃぐのはわかるけどほかの人の迷惑になることは絶対にやらないこと、わかった？」

さっきまで思いっきりほかの人に迷惑をかけていた奴らははーい、と小さく言った

さいほの「うん、じゃあ行ってよし」

一部「いやっほーーーい！！！」

おいコラ人の話聞いてたのか

私は話が終わった途端突っ走って行った奴らを捕まえ、また説教したさすがにわかったらしく次は静かに食べ物を取りに行った

なんで私が疲れなきゃいかんのだ……

おぼんと皿を取り食べたい物を食べきれる量皿に乗せて席に戻った
私が席についた時にはすでにドイツとイタリアとロシアは席に座っていた

って……

さいほの「イタリア、パスタだけかよ！！」

イタリア「え！？だ、だって……」

さいほの「だってじゃない！ほかの物も取ってきなさい！できれば野菜！」

イタリア「は、はいぃぃ……」

イタリアは渋々皿を片手に席を立ってサラダコーナーに向かった

ロシア「お母さんみたいだね」

ロシアがニコニコして私を見る

さいほの「当たり前のことだよ。あぁ疲れた……」

ドイツ「でも助かるな、ありがとう」

さいほの「そっか、いつも苦労してんのはドイツだもんな」

ドイツ「まぁな……」

ドイツと話をしていると次々とみんなが戻ってきた

みんなが持ってきた料理を見るとイタリアのようにみんな栄養バランスが崩れまくっている

言いたいことはたくさんあるのだが今は疲れたしせっかくの旅行だ。

こんなことで嫌な思いはさせたくないから見て見ぬふりをしよう

全「いただきまーす」

みんな食べ物をつまんで食べはじめる
食べてるときだけ静かだな……
イタリアはやはりかわいそうなので特別にパスタだけ食べてもいいことを許可した
笑顔でパスタを頬張っている姿がなんとも微笑ましい

って何考えてるんだ私！
私は二次元などには興味はないはずだ！何ちょっとオタク的な目でイタリア見てんだ私！！
これじゃ黒須達と同類じゃねぇかぁぁぁああ！！

ほのか「ん？どしたのさいほの」

さいほの「な、なんでもない」

言えない、ちょっとだけイタリアに萌えてしまっていたなんてぇぇ……

齊藤ほのか、一生の不覚……！！

苑子「ごっそーさん！！」

なつじ「早っ！！あんないっぱいあったのに……」

アメリカ「ごちそうさまなんだぞ！」

イギリス「お前も早いな……」

苑子とアメリカはもう食べ終わってデザートを取りに行った

しかし……

さいほの「イギリス、お前料理まずいわりにはちゃんとした物食べ……」

ほのか「わーわーわーわぁぁぁぁああ！！」

私のイギリスへの言葉は黒須によって遮られる

さいほの「なんだよ黒須、私は……」

ほのか「ほのかチョップ！！」

さいほの「いだっ！！」

黒須の必殺技『ほのかチョップ』が私の頭にヒットする。

当たった所がハンパなく痛い、それがほのかチョップだ。

黒須を睨むと、黒須は私に小声で話しかけてきた

ほのか「いい！？イギリスは料理がまずいことがコンプレックスなんだからあんまりつっこんじゃダメなの！！わかった！？」

さいほの「あ、うん……」

イギリス「なんだ？」

さいほの「いや、なんでもない」

イギリスは気にしない様子で食事を再開した

私と黒須も食べ物を口に運ぶ

しばらくして全員食べ終わり食事の会場を出た

苑子「はぁぁ……お腹いっぱーい」

なつじ「ご飯を三杯おかわりし、デザートにアイスを五個も食べりゃ腹いっぱいにもなんだろ。普通」

ほのか「苑子食べ過ぎ……」

こういう黒須もアイスを七個たいらげている。

お前も例外じゃねーからな？

アメリカ「それよりさ、ゲーセン行かないかい！？」

アメリカがテンション高めで提案する

中国「ゲーセン？」

日本「なるほど……いいですね、ホテルにはゲーセンは定番ですからね」

フランス「ゲーセンは、っと……3階にあるみたいだな」

フランスが壁に設置してある物を見て言う

アメリカ「よーし、じゃあ行くんだぞーっ！！」

アメリカは走り出した

イギリス「おいゲーセンならこっちだぞ」

アメリカ「……」

しかしアメリカが進んだ方向はゲーセンとはまったく逆の方向。

やっぱこいつはバカだ

その２５　食事は計画的に（後書き）

感想とかお願いします！

その２６　ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（前書き）

お前らチビって言いたいだけだろ！！

ｂｙチビ……じゃなくてなつじ

すいません、結構間があいてしまいました；

その26　ゲーセンではしゃぐのは子供だけ

私達はゲーセンに向かっていた

ほのか「つかお金あんの？」

日本「そこは気にしない決まりです……」

気にしちゃダメなのか……

やがてゲーセンに到着してアメリカはかなり興奮している

アメリカ「すごいんだぞ！！日本のゲーセン！」

フランス「来たことないのか？」

アメリカ「ゲーセン来ること自体が始めてなんだぞ！！」

さいほの「そうなの！？」

アメリカ「とりあえず遊びまくるんだぞ！！」

アメリカはゲーセンの中を歩きまくり嬉しそうにゲーム機を見ている

子供（ガキ）か。

アメリカ「日本ー！これ壊れてるんだぞー！」

日本「え?」

アメリカに呼ばれて私達はアメリカのもとに行く

アメリカはクレーンゲームのボタンを押しながら不安そうに日本に訴えた

アメリカ「ボタンを押してもうんともすんとも言わないんだよー…」

日本「あー……アメリカさん。ゲームセンターのゲーム機はすべてお金を入れないと動かないんですよ……」

アメリカ「な、なんだいそれ!?なんでゲームやるだけなのにお金を払わないといけないんだい!?」

苑子「あ、それ私も思う!!」

なつじ「同情するとこじゃねーだろ」

なつじがハリセンでアメリカと苑子を叩くってハリセン!?どっから出してきた!

苑子「いたい……なんで!?なつじもそう思うでしょ!?」

なつじ「そういう決まりなんだから仕方ないっしょ。黙ってお金投入しろ」

苑子「なんで私!?」

ほのか「一回くらいいいじゃん！アメリカにやらせてあげよ？」

苑子「うー」

苑子は渋々財布から１００円玉を取りだしクレーンゲームに入れる

アメリカ「……？」

さいほの「いーか？欲しいものをボタンを押して取るの、やってみ？」

さいほのに言われた通りにアメリカはボタンを押してクマのぬいぐるみを狙う

しかし初めてなのでクマのぬいぐるみを掴んだはいいがすぐ落ちてしまう

アメリカ「あ、落ちちゃったんだぞ」

さいほの「あー、残念だな。終わりだ」

アメリカ「え！？終わり！？全然楽しめてないんだぞ！？」

中国「そういうゲームある」

アメリカ「なんだいなんだい！！ぼったくりじゃないか！！ぼったくりだぁぁ！」

アメリカはクレーンゲームの透明なガラスを叩いたりするもんだか

らイギリスは急いでアメリカを止める

ほのか「こういうのだから取れたとき嬉しいんだよ」

苑子「こんなことで騒ぐなんて子供（ガキ）だねｗ」

アメリカ「なんだとぉっ！？」

ドイツ「落ち着けアメリカ」

苑子「こういうのはコツがあるんだよ、っと……」

苑子はまた財布から１００円を取りだし入れた

そしてボタンを押す

苑子「こうやってえぐりこむように……うつべし！うつべし！！」

なつじ「ボクシングか」

こうふざけているように見えてもちゃんとぬいぐるみをがっちりとキャッチしている

アメリカ「おぉ……」

日本「上手ですね、苑子さん」

苑子「いやぁ……」

ぬいぐるみはそのまま上に持ち上げられ出口へと移動していく

フランス「おぉ！いけるんじゃないか！？」

そして出口の真上にたどりつきぬいぐるみはゆっくりと落下していき取りだし口に……

いけなかった。

ぬいぐるみは出口の近くにあった人形の山につっかかり落ちてこなかった

……

苑子「返せぇぇぇえええ！！私の幸せと時間と２００円を全て返せぇぇぇえええ！！」

さいほの「お前は子供（ガキ）すぎるよ！！」

我を忘れクレーンゲーム機を叩きまくったり蹴りまくったりする苑子をなつじと中国がなんとかおさえる

なつじ「落ち着いて苑子！あとでアイスおごってあげるから！！っていうのは嘘だから！」

中国「何が言いたいあるか……」

苑子はようやく落ち着いてきた

イタリア「??何あれ?」

イタリアがそう言って指差したのは誰もが知っているゲーセンに必ずあるゲーム機、太鼓の○人だ。

日本「あぁ、これはリズムに合わせて太鼓を叩くゲームですよ。このバチで太鼓を叩くんですよ」

イタリアに説明しながらバチを持たせる日本。

ほのか「よしっ!イタリアやろっ!」

イタリア「イエッサーーー!!」

私は１００円を入れて準備満タンだ

さいほの「……イタリアの分も出してやれよ」

ほのか「うっさいなぁっ!出すよ!!」

言われなくても出すっつの

私はもう一枚１００円を取りだし入れた

ゲームが始まり陽気な音楽が流れる

ほのか「イタリアは何の曲がいい？」

イタリア「俺は何でもいいよー」

ほのか「じゃぁ私が決めるね、えーと……」

苑子「あ、黒須が好きな『凛として咲く花の如く』があるよ！！」

な、なんだとぉ！！？

ほのか「よしやるぞイタリアぁぁ！」

イタリア「え、え！？」

私、この曲大好きなんだよぉぉぉっ！！

おっしゃぁぁぁ！！

本気出すぞぉぉぉっ！！

そしてなんだかんだで終了。

イタリア「ヴェー……難しいねー……」

さいほの「覚えれば簡単だよ、もう一曲できるからやってみ？」

ほのか「なつじ、やる？」

なつじ「なんで私？」

ほのか「え、だって部活でパーカッションやってたから得意かな？って……」

なつじ「そんな理由かいな」

私はなつじにバチを渡す

なつじ「なんの曲がいい？」

さいほの「ミス〇ル！！」

なつじ「お前には聞いてねーよ」

イタリア「なるべくゆっくりで簡単な曲がいいなー」

ロシア「さっきの早いし難しかったよねー」

ほのか「うん、私間違えまくった」

さすが撫子ロック

なつじ「じゃあこれね」

そう言ってなつじが選んだのは早くてめちゃくちゃ難しそうな曲

全員『こいつドSだ……』

全員がそう思った

中国「イタリア、とりあえず落ち着いて頑張るある！」

イタリア「う、うん！」

曲が始まってゲームが始まる

予想通り曲がめちゃくちゃ早いからめっさ難しかった

なつじは無表情でそれを叩く

イタリアは最初の方は叩ける所はがんばっていたがだんだんついていけなくなり半泣きになる

イタリア「うわぁぁ！できないよぉぉ！」

ドイツ「泣くな！がんばれ！」

苑子「つかなつじうまっ！！チビなのに！」

ほのか「ホントだ！チビなのに！」

さいほの「さすがパーカッション！！チビなのに！」

なつじ「お前らチビって言いたいだけだろ！」

すげぇ叩きながらつっこんだ、神だ

結局イタリアは何もできずに、なつじは一回も間違えずに曲が終わった

なつじのあの勝ち誇ったような顔がムカつくのは私だけだろうか

イタリア「ドイツー難しいよー」

イタリアは泣きながらドイツのもとに行く

ドイツ「泣くな……たかがゲームだろう」

さいほの「そのたかがゲームで素人に勝って喜んでる奴がここにいるがな」

なつじ「んなっ！！」

苑子「おとなげないよー」

なつじ「大人じゃないもーん」

そういう問題じゃねーだろ

中国「どうするあるか？もう一曲できるらしいあるよ」

ほのか「いいよー、やりたい人やってもー」

アメリカ「じゃ俺が……」

さいほの「お前破壊しそうだからダメ」

イギリス「じゃあ俺がやってやる」

苑子「イギリスが太鼓……似合わなｗｗ」

イギリス「うるせぇ黙れ」

さいほの「あと一人は？」

フランス「お兄さんやっていい？」

なつじ「フランスも似合わねぇｗｗ」

イギリス「ふっ、お前が相手か。絶対負けねぇからな」

フランス「お兄さんも久々に本気出しちゃおうかな」

イギリスとフランスの間に火花が散る
そんな火花散らすようなゲームじゃないんだけど……

曲が始まった途端、おりゃぁぁぁああ！！と二人が叫び声をあげ太鼓を叩く
恥ずかしくないのかな、大人として

つか二人ともやる気あるくせに全然叩けてないし
なんてくだらない争いなんだ

見てらんないから二人を置いて私達は別のゲーム機を見る

苑子「あ、お菓子とるゲームだ。懐かしいなぁ」

ほのか「昔よくやったわぁ。私結構得意なんだよ？」

ロシア「面白そうだね、やってみていい？」

さいほの「いいけどこれもさっきのクレーンゲームみたいにぼったくられるケースもあるよ？」

ロシア「僕はそんなこと気にしないからいいよ？子供じゃないしね」

今の言葉、きっとアメリカと苑子の心に深く突き刺さっただろう

さいほのから１００円を受け取りゲームを始めるロシア。

ほのか「ロシアこれ初めてなの？」

ロシア「うん、ロシアにはこんなのないし」

初めてのわりにはロシアはたくさんお菓子をとった

日本「上手ですねロシアさん」

ロシア「いいねこのゲーム。楽しいしお菓子も取れるし」

ロシアはご機嫌だ

よかった、コルコル言わないで

あと勝負を終えたイギリスとフランスが帰ってきた

苑子「おかえりー、どーだった？」

イギリス「同点だった」

ほのか「ど、同点！！？」

あのゲームで同点って難しくね！？

ほのか「ど、どんだけ仲良いんだ……」

フランス「絶対お兄さんの方が叩けてたって……」

なつじ「大人が必死になることじゃないでしょう」

なつじが呆れ顔で肩をすくめる。

中国「……」

私は中国の様子がおかしいことに気付いた

辺りをキョロキョロと見渡している

ほのか「中国、どうしたの？」

中国「い、いや……」

中国は一回黙ってしまったがやがて決意したように私に話しはじめた

中国「おかしいある……」

ほのか「おかしい？」

私と中国の様子に気付いたのかさいほの達も騒ぐのをやめ、黙る

中国「いや……気のせいかもしれねぇあるが……さっきまでいた人がいつの間にかいなくなってて……」

中国に言われて初めて気付く。

確かにさっきまで私達以外にもたくさん人がいて賑やかだった（私達だけで十分賑やかだが）のに今は私達しかいなくてゲーム機の音が室内に響いていた

さいほの「もう遅いからじゃないか？」

日本「いえ……まだそれほど遅い時間帯ではないですし……」

じゃあなんで？

ま、まさか……

「久しぶり……いや、さっきぶりか？」

全員「！！！！」

突然聞こえた声に全員が反応する

ゲーム機の音でうるさいのにその声だけははっきり聞こえた

なつじ「ま、またあいつら……」

「またとは失礼ね、私達だって好きであなたたちをつけてるんじゃないわ」

また声が聞こえる

私達はなるべく固まってどこからあいつらが来てもいいように警戒する

「さっきはよく生きてられたな、生命力はゴキブリ並か？」

苑子「ゴキブリじゃないもん！！」

なつじ「反応するとこそこ！？」

「でも今度はゴキブリ並の生命力を持つあなたたちでもダメね」

突然、周りの景色が歪んだ

ゲームセンターから景色は変わり、私達は遊園地のような所にいた

さいほの「ここは……」

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

空にはキリハとキリカが浮かんでいて私達を見下ろしながら怪しく笑っていた

その２６　ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（後書き）

次回から本題に入るかも……

つか今１０月やん……

秋やん、寒いやん……

その27　変態には気をつけろ！？（前書き）

何？思いやりって

知らね

ｂｙ苑子、さいほの

なんとか投稿できた……

その27　変態には気をつけろ!?

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

二人が声をそろえて言った。

なつじ「かっこつけてんじゃねぇよ、うぜぇ」

そんな二人になつじの毒舌がふりかかる

ずっと冷静にいた二人もなつじの毒舌には流石に傷ついたらしい

「な、そんなこといわなくてもいいじゃん!!せっかくラスボスみたいに演じたのに……」

ほのか「うるせぇよ下っ端」

「下っ端だからこそこんな時くらいラスボスみたいにさせてくんない!?思いやりって言葉知ってる!?」

苑子「何?思いやりって」

さいほの「知らね」

「とことんムカつくやつらだなお前ら!!」

中国「ていうかなんでこんな所に呼んだあるか。下っ端」

「強調して言うなぁぁぁああっ!!」

「落ち着きなさいキリハ」

うん、あれだな。キリハはガキだ

なつじ「で、なんで私達を呼んだの」

「よく聞いてくれたわね」

苑子「いや別に聞きたくて聞いたわけじゃねぇし。何その待ってました!!って顔。バレバレだかんね」

苑子の言葉にキリカはピキッときたがいい加減もたもたしてるとダメなので我慢して話を続ける

「私とキリハはあなたたちの状況を監視させていただいたわ」

ドイツ「監視？」

「そ、あなたたちがあのホテルに入ってからずっとね」

ほのか「うわこの人達監視してたらしいわよ、やぁねぇ　（小声）」

さいほの「警察に通報した方がいいかしら。ほんと最近の若者は怖いわねぇ、何するかわからないわ　（小声）」

ヒソヒソ

「聞こえてんだよムカつくからやめろ!!」

フランス「いやほんとこれ犯罪だよ？自首すれば罪は軽くなるよ？」

「うるせぇよ黙ってろ!!」

なつじ「ん？ちょっと待って……ずっと監視してた、ってことは……」

「？」

なつじ「お風呂入ってたときも監視してたってこと？」

……

「は、はは……」

「まぁ、女子風呂を……少し……」

二人は笑う

しかし

ほ・さ・な・そ「ぎゃぁぁぁああ！！変態ぃぃぃいいいい！！！」

私達女は笑える話じゃなかった

地面に落ちてる石を二人に投げまくる。投げて投げて投げまくる。
ひたすら投げまくる

「ちょ、痛っ！やめ、いたたた！！」

「大丈夫！！キリカ　（一応男☆）は見てないから！！いたた！」

さいほの「そういう問題じゃねーんだよクソアマぁぁぁぁああ！！」

ほのか「どうせ鼻血たらして微笑みながら見てたんだろぉぉぉ！！」

「私にそんな趣味などないわボケぇぇええ！！つかお前らタオル巻いてたろうが！！タオル巻いたまま入浴するなって注意書きに書いてあったのに平気な顔して巻いてたろうが！！」

苑子「あほぉぉおお！！実はタオルの下には水着も装着してたんだよぉぉおお！！」

「知らねーよなら別にいいだろうが！！」

ほ・さ・な・そ「いいわけねーだろばかぁぁぁぁああ！！！」

なつじ「最低野郎めが死ねぇぇええ！！」

もうどっちが悪なんだかわかんなくなってきたわ☆

「ていうかキリカ、なんで女湯なんだ？別に男湯でもよかったんじゃねーか？だったらこんなにごちゃごちゃ言われなかったのに……」

「……それもそうだな。そしたらキリハも監視できたし」

ロシア「その前に入浴を監視することがどうかと思うんだけど」

フランス「変態め！！」

イギリス「お前が言うなよ」

「あぁもう！いちいちうるさい野郎共だな！！とにかくっ！」

キリカは私達にビシッと指差す

苑子「あぁー、人に指差しちゃいけないんだよぉー」

「うるせぇ！」

キリハが苑子を怒鳴り睨む

苑子も睨み返す。負けず嫌いめ、でもしかしやっぱり変顔にしか見えない

「お前らに……」

キリカはゆっくりと口を開く

「決闘を申し込む」

その27　変態には気をつけろ！？（後書き）

本題入る言ったくせに入ってねーじゃねぇかぁ！！

つーわけで軽ーく次回予告の巻☆

決闘を申し込んだキリカとキリハ。

その決闘の内容とは……！？

ほのか達は決闘を受けるのか！？

そして彼女達の運命は！？

その２８　決闘（前書き）

お前らが死ぬこと確定だな

ｂｙなつじ

今回シリアスだと私は思う。

その２８　決闘

なつじ「決闘……？」

苑子「それってどういう」

「そのままの意味だ」

キリカがぴしゃりと言う

「私達にはお前らを殺せと命を受けている。だからそれには従わなければならない」

さいほの「何回も失敗してるけどな」

「誰のせいだと思ってんだ」

「しかしいつまでたっても命令に従えてないためボスはお怒りになっている」

ほのか「ボスいたんだ！」

初耳！！

イギリス「単独で世界征服なんかたくらむ馬鹿がどこにいんだよ」

苑子「プーちゃん　（プロイセン）ならやりかねない」

全員「あぁ……」

納得すんな！！ｂｙプロイセン

ん？いまどこからかプロイセンの声が……

気のせいか

アメリカ「決闘ってどんなのだい！？」

「かくれんぼよ」

さいほの「……は？」

「かくれんぼよ」

ほのか「いや二回言わなくていいから」

日本「かくれんぼとは……あの有名な遊びのことですか？」

「その通り。ルールもほとんどは同じ」

「鬼はあなたたち全員。隠れるのは私とキリハよ」

ロシア「範囲はこの遊園地全域、ってこと？」

「そうだよ」

キリハとキリカが笑う。いつもより自信があるようだ。ちょっとムカつく

キリハとキリカは私達の前まで来た。今気付いたけどキリカとキリハの顔、そこそこ整ってんなチクショウ

「ほとんどは遊びのかくれんぼと同じ。でも違うのはルール」

イタリア「え?さっきルールも同じって……」

「全部とは言ってないわ、一部だけよ。今から説明するわね」

キリカがどこからかホワイトボードを持ってきてペンのふたをとりいろいろ書きはじめた

「私とキリハ隠れる側はこの遊園地全域を使い隠れることができる。でも隠れる側は隠れる場所を変えることができる」

なつじ「え、なんかずるくね?」

「別にいいだろ。鬼はお前達12人、隠れる側は俺とキリカ2人だけなんだぞ?こんくらいのハンデいいだろっ」

中国「んー、まぁいいある。説明を続けるよろし」

中国は近くのベンチに座り腕くみをしている。えらそうだな。
その隣で日本がお茶をすすってほっこりしている。爺みたいだな。
あ、爺か

「隠れる側は見つかっても終わりじゃない。自分を見つけた鬼を倒せばセーフとする」

ドイツ「倒す……!?それはつまり……!」

「殺す、ってことだ」

さいほの「やっぱりお前らの目的はそれか」

「そうよ、私達はかくれんぼで遊ぶことが目的じゃない。あなたたち全員を殺すことよ」

物騒だな……

「そして隠れる側は鬼を途中で殺してもよし」

……は?

ほのか「それって……自分が見つけられなくても鬼を殺してもいい……ってこと?」

「そうだ、言っただろ。俺達は遊ぶのが目的じゃない。これは殺し合いなんだ」

じゃあかくれんぼの意味なくね?

「制限時間は2時間。それまでに私とキリハを見つけられなかったらあなたたちの負け。逆に私とキリハを見つけられたら私達の負け」

フランス「……負けた方は?」

キリカはためらいもなくその言葉を告げた

「死ぬ」

私は息をのむ。
あいつらが私達を殺さなければならないのは前からわかっている。
しかしそのボスの命令とやらのせいで自分が死ぬのはいいのかな、
怖くないのかな。私は絶対やだな。
あと苑子が前にキリハ達に聞いた言葉
「ホントはこんなことしたくないんじゃない？」
あの言葉を聞いた途端二人は戸惑っていた。

じゃあこれだって……

自分達がやりたくてやってるわけじゃないはずだ

「じゃあ始めるぞ」

キリカが静かに言う
私は思い切ってさっきまで思ってたことを聞いてみることにした

ほのか「ねぇ……」

なつじ「ボスの命令なのはわかるけど、それで二人が死ぬのってお
かしくない？」

今まさに言おうとしたことをなつじに言われた。
こ、心読まれた……！？

なつじ「怖くないの？」
わぁまるで私の語りがまるまる聞こえてたみたいに私の思ったこと
をすらすらと……

「怖くなど、ない」

キリカは聞かれて少々戸惑ったが落ち着いて答えた

「任務を成功できないということはボスの命令に従えないと同等の
こと。つまりこのゲームに俺達が負けた際には罰を受けるのだ。そ
れは当たり前のことだ」

キリハは表情変えずに言う

なつじ「へぇ、そっか。じゃあ……」

なつじは二人を睨む

なつじ「お前らが死ぬこと確定だな」

そして突き放すように言った。

私達は信じられない顔でなつじを見た。

だってあのチビで毒舌でドSでアホななつじがこんなにカッコイイこと言ってるのだ。
明日は雪降んじゃねぇか？

なつじ「ほのか後で殺すからな」

聞こえてたらしい

「ふ、いい度胸だ。では始めよう」

キリカが指をパチンと鳴らした

その瞬間キリハとキリカの後ろにブラックホールのような穴が現れた。

「今から３０分後にゲームスタートだ。それまでに作戦でもたてておけ馬鹿共」

苑子「んだとゴラァッ！！」

苑子を無視して二人はブラックホールのようなものの中に消えていき、ブラックホールのようなものも消えた

その２８　決闘（後書き）

後書き書くことないんでこれからはキャラ達に反省会でもやらせようかと思います

＊　＊　＊　＊　＊

さいほの「率直に言おう。なつじと黒須、シリアス似合わなすぎ」

ほ・な「ホントに率直だなオイ」

苑子「うん、似合わない」

なつじ「お前に言われたくねーよ」

さいほの「いや、なんか薮崎シリアス以外と似合ってるから問題ナッシング」

ほのか「ありすぎだよ！なんで苑子似合っちゃうんだよ！」

苑子「ふふ、それは私が天才だｋ……」

強制終了

その29　チーム決め（前書き）

アメリカくん、勝手な行動したらどうなるかわかってるよね？フフフ……

ｂｙロシア

今回はギャグ中心を目指しましたが……

それほどギャグもないと気付いたのは書き終わってからだったという。

その29　チーム決め

キリカとキリハが消えた後、私達は話し合うことにした

さいほの「どーする?あいつら、私達をマジで殺す気だぞ」

さいほのが道に落ちてる石をフランスに投げながら言う。

フランスはいたっ、と言って涙目になる

つかなぜに石投げとるん?

なつじ「どうする、って……勝てばいいじゃん」

ほのか「そんな簡単に言うけど……私の勘だとあいつら強いんじゃね?」

なつじ「知ってるよ?」

知ってんのかよ

なつじ「いやぁ、なんか強いってわかってても勝てる気がするんだよね!!」

世の中そんなに甘くねーぞ

ドイツ「それにあいつらはいつ俺達を襲ってくるかわからん」

イタリア「ヴェー……白旗振れば見逃してくれるかな？」

だから世の中そんなに甘くねーっての

日本「しかし敵もすぐ私達の居場所がわかるというわけではありません、でも大勢で行動していたらすぐ居場所がわかってしまいます。ですから何人かにわかれて行動することにしましょう」

日本の提案に全員が頷いた。

と、いうことでぇ……

ほのか「くじ引きイェー！！！」

イギリス「お前四次元ポケットでも持ってんのか？なんでもかんでもどこからか取り出して……；」

さいほの「ドラ○もんか君は」

私をあのたぬｋ……じゃなくて猫型ロボットと一緒にしないでくれたまえ

ほのか「えっと、ここに三種類の紙が入ってっから一人ずつ引いて同じ種類の紙の人とチームになってねー」

さぁ引いた引いた、と言いながら全員にくじを引かせて最後に私自身も引く

アメリカ「俺は黄色の紙だったんだぞ！」

苑子「私も黄色ー」

黄色の紙を引いたのは苑子、アメリカ、ロシア、ドイツだ。
みんな身長でかいな

なつじ「私は緑だったよ」

緑の紙を引いたのはなつじ、フランス、さいほの、日本だ。
性格がみんな違いすぎるぜ。

イギリス「俺は青か」

青の紙を引いたのはイギリス、イタリア、中国、そして私だ。

凸凹だな

ほのか「よし、じゃあチームも決まったことだし行動開始！」

ドイツ「ちょっと待て」

歩き出した私をドイツが止めて何かを渡してきた

ドイツ「携帯だ、全員に渡しておくから何かあったら必ず連絡しろ。
いいな？」

ほのか「うむ、了解！！」

私は携帯を握りしめた。つか私もとから携帯持ってんだけど……
ま、今回はこれを使おっと

さいほの「じゃ、みんな死ぬなよー」

なつじ「アデュー☆」

日本「失礼します」

フランス「また会おうっ☆」

そういって緑チームはいなくなった、フランスとはもう会いたくないが

ドイツ「では俺達も行くとしよう。イタリア、迷惑かけるなよ」

苑子「バッハハーイ!!」

アメリカ「ＨＥＲＯの出番なんだぞ！」

ロシア「アメリカくん、勝手な行動したらどうなるかわかってるよね？フフフ……」

アメリカ「ＮＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏＯＯＯ!!!」

黄色チームも出発した。

ほのか「んじゃ、私達も出発しますか」

イギリス「そうだな」

イタリア「パースター！！」

中国「大声出すんじゃねーある！！」

つーことで私達青チームも静かな遊園地の敷地内を歩きはじめた

その29　チーム決め（後書き）

～反省会～

フランス「つかどこでくじ引きの箱とか買ってきたの？」

ほのか「東急ハ○ズ！」

フランス「リアルな答えだなオイ」

ほのか「じゃあロ○ト！！」

イギリス「じゃあってなんだよ」

さいほの「ちなみに電車で海に行くときに出てきたあの罰ゲームだっけ？あれも東急ハ○ズだ」

苑子「なんで知ってんの？」

さいほの「拉致られてくだらない買い物に付き合わされた」

ほのか「いや、あれさいほのが『ＣＤ買いに行くぞ！』って言って私を拉致ってなんだかんだで東急ハ○ズにたどり着いたんだよ？」

なつじ「そのなんだかんだの間に何があった。どうしてＣＤショッ

プに行こうとして東急ハ〇ズにたどり着くんだ」

ほ・さ「なんだかんだで」

なつじ「ねぇこいつら殴っていい?殴っていいよね?」

苑子「落ち着け落ち着け;」

※ちなみに多分、東急ハ〇ズにはくじ引きの箱とか売ってないと思うので勘違いして買いに行ったりはしないでください;;

感想お願いします!!

その３０　決闘の始まり（前書き）

元気だけどお兄さん、心が折れそうなんだけど

ｂｙフランス

な、なんとか更新できた……；；

今回は緑チームメイン！

その３０　決闘の始まり

さいほの「しっかし広いな、ここ」

私は呆れながら言った。

歩いても歩いてもこの遊園地の終わりが見えないのだ。

なつじ「ホントだね。あれかな、異次元？だからかな」

さいほの「なるほど。だから広いのか……」

私は納得しようとしたがある疑問が頭に浮かんだ

さいほの「じゃあさ、広い分探すのが大変じゃない？」

さ・な・日・フ「……」

沈黙。

フランス「そういえばそうだな☆」

さいほの「そうだな☆じゃねぇぇぇえええ！！」

フランス「ぐぼぁっ！！」

私は笑顔で答えた変態ナルシストの腹にスーパーさいほのパンチをくらわせてやった

変態ナルシストは地面にうずくまる

フランス「ふ、普通腹はやるか……？」

さいほの「顔の方がよかったか？」

フランス「腹にしてくれてありがとうございます」

フランスはひざまづく

なつじ「さいほのもSになったね、私もがんばらないと」

何をだよ

日本「しかしいつ敵が来るかわかりませんね」

さいほの「あいつらが素直に隠れてるとは思えないしな」

なつじ「でも早く捕まえて帰りたいしなぁ……」

うーん……

さいほの「あ」

日本「どうしました？」

私はニヤリと笑った

さいほの「いいこと思いついちゃった」

フランス「……」

俺は広場にポツン、と立たされていた

フランス「な、なんでこんなことに……」

その時、服のポケットの中に入ってる携帯がブルブルとふるえた

携帯を開きボタンをプッシュして携帯を耳にあてた

さいほの『もしもしー？元気やってるー？』

携帯から陽気な声が聞こえてくる

フランス「元気だけどお兄さん、心が折れそうなんだけど」

さいほの『お前にできることといったらこんくらいしかねーだろ？』

フランス「あれ、なんか視界がぼやけてきたわ。おかしいな」

さいほの『いいか？お前はおとりだ。一人でいれば奴らは必ず狙ってくるはず。その時がチャンスだ』

フランス「ちょっと待って、それめちゃくちゃ危険じゃん」

さいほの「危険な仕事だからこそお前の出番なんだろうが」

フランス「今度は目から水が……」

俺は鼻をすする

さいほの『ま、何かあったら助けてやるから』

フランス「つかお前らどこにいるわけ？」

なつじ『陰から見守ってるよー』

フランス「陰？」

日本『ではフランスさん、お気をつけて』

ブチッ、ツーツーツー…

日本の声を最後に電話はきれた

俺は大きくため息をついて携帯をポケットにしまった

フランス「なんで俺が……ていうか敵がこんなみえみえの罠にひっかか…「見つけたぞ変態野郎！」ったよ……」

空を見上げると上空には嬉しそうに笑みを浮かべるキリハとキリカが浮かんでいた

「ふっ、まさかこんなに簡単に見つかるとはな。世の中にはこんな状況なのに一人で行動するバカがいるんだな」

バカはどっちだ。

フランス「ちょっとやめてくんない？お兄さん、こういうの苦手なんだよねー」

俺は腰に念のために護身用にさしておいた短剣を手に取る

「お、やる気か？」

フランス「やらなきゃこっちがやられるんで、ねっ！！」

俺は地面を強く蹴り上空にいる二人に向かって剣をふるった

しかし相手はひらりと攻撃を避けて俺の後ろにまわった

「戦ったって戦わなくったって同じだ、お前達は死ぬ」

男の方（キリカ）が俺の耳元で囁き、剣を俺に向かって振り下ろした。

間一髪の所で短剣でそれを防いだがここは空中だ。

相手の力に押されて俺は地面に叩きつけられた。

フランス「っつつ……何すんだよ。俺の美しい顔に傷がついたらどうするつもりだよ？」

「うわこいつ自分が美しいって言ってるわ」

「キモッ」

フランス「聞こえてるからね？心にグサグサきてるからね？」

俺はなんとか立ち上がる。でもさっきのダメージが大きくよろける

「さすが漁夫の利のフランス。一人だと何も出来たいのね」

フランス「やめてくんないそのあだ名。カッコ悪いんだけど」

もうちょっとかっこいい名前にして欲しかったな

「ったく……もうフラフラじゃねぇか」

キリカがバカにしたように言う。

フランス「はっ、久しぶりだから疲れちゃったよ。つらいね、戦いっていうのは」

「だったら今すぐ楽にしてやるよ！！」

キリカが突然姿を消した

フランス「ど、どこに……」

「上だよ」

声が聞こえて俺は上を向く。しかし何もいない

フランス「な……」

「ははっ、騙されてんじゃねーよ」

また声が聞こえた。

後ろだ！！

気付いた時にはもう遅かった。

キリカは剣を振り上げてニヤリと笑っていた

「じゃあな、変態ナルシスト」

そんな最期に言われた言葉ってどうよ！！

ガキィィィン！！

辺りに甲高い音が響いた。

後ろを確認すると見慣れた黒髪の青年がいた。

日本「一人の所を狙うとは卑怯ですね、私はそういう人が嫌いなん

ですよ」

日本はキリカの剣を自分の刀でおさえながら静かに笑った。

その３０　決闘の始まり（後書き）

～反省会という名の祝福～

祝☆３０話突破ぁぁぁああ！！

全員「いぇーーーい！！」

ほのか「どうもっ！今回出番がなかったほのかです！」

苑子「いやぁまさか３０話いくとはね」

さいほの「びっくりだよ。あの作者がこんなに続けられるなんて」

なつじ「奇跡ってあるんだね」

イギリス「奇跡ではなくないか？」

ほのか「はい、というわけで。じぃーかいよぉーこくぅー♪」

次回予告。

フランスが死にました

フランス「いやいやいやいや！俺死んでないからね！？勝手に殺さないで！？」

苑子「別によくなぁーい？」

フランス「よくないよ！！全っ然よくないよ！！」

ほのか「ちっ、しゃあねーなぁ。」

次回予告！！

フランスは屍となった

フランス「変わってねーだろ！！死体と屍は同じ意味だからね！？」

ロシア「フランスくん、ちょっと黙ってね♪」

グサ

フランス「ぎゃぁぁぁぁぁ……」

ロシア「うふふ♪」

ほのか「……と、と、とにかく真面目に次回予告しまぁーす……」

次回予告！

フランスは死にましたけど何か？

全員「開きなおんな！！」

終わりです☆

その３１　戦闘開始（前書き）

あの子？誰だそりゃ

ｂｙさいほの

一週間に一回更新するのが精一杯になってきた……；；

が、がんばらなければ；；

その３１　戦闘開始

フランス「に、日本！！なんで……」

日本「言ったでしょう、陰から見守っているって。私達はフランスさんの様子が十分確認できる位置に隠れていたんです。だからフランスさんが危機に陥っておりましたので助けに来た次第です」

日本は落ち着いた様子で話す。

フランス「つか助けに来んの遅くないか？来るなら敵が来たときに来てほしかったなぁ」

日本「いや私は行こうとしたんですが……」

～日本の回想～

なつじ「お、マジで敵来たよ。フランス戸惑ってるねー」

日本「では行きまし……」

さいほの「待って日本！もうちょっとおもしろくなってから行こうよ！」

日本「え！？そしたらフランスさんが……ってなんでそんなに目が輝いてるんですか」

なつじ「とにかく！まだ行かないで！」

日本「は、はぁ……」

日本「というわけですぐに助けに来れなかったわけです」

フランス「うん、あいつら俺のことどーでもいいんだね」

フランスは寂しく言う

「あ、ええと……すまんな。攻撃しまくって」

「そ、うね。事情があるなら言えばいいのに……」

フランス「やめてくんない？かわいそうな者を見る目で見ないで！」

キリカとキリハまで謝りながらかわいそうな目で見るからフランスは涙目になる

フランス「で、あの二人はどうしたんだ?」

日本「作戦で私達を囮にして二人を倒すそうです」

日本が小声で言う

「もう話は終わったか?」

キリハはさっきと違って冷たい声で言った。

日本「はい。私達の話は終わりました、あなたたちは大丈夫なのですか?」

「……どういうことだ」

日本「あなたたちはお互い最期の言葉を交わさなくていいのかと私は言っているのです」

日本の言葉を聞き二人は日本を睨みつける。

日本はさっきと変わらない落ち着いた表情でいる。

フランス「……;;」

フランス、完全にシリアスな空気についていけない。

かわいそうな奴だ。

「いい度胸だな。気に入った」

キリハが剣を構えた。

「気遣いは嬉しいが俺達にそんな時間必要ない。俺達には今すぐにやらなければいけないことがあるからな」

フランス「……；；」

フランス、やはりシリアスな空気についていけない。

「お前らを、殺すことだ！」

「……；；」

キリカもシリアスな空気についていけないらしい。

仲間がいてよかったなフランス。

日本「そうですか、では始めましょうか」

日本も刀を構える。

やっと出番？がきたフランスも短剣を構える。

「か、覚悟しなさい！！」

キリカもちょっと遅れて剣を構える。

日本「フランスさん、大丈夫ですか？」

フランス「？何がだ？」

日本「いえ……フランスさん、戦いは好まないようなので……」

日本が控えめに聞くとフランスは難しい顔をした

フランス「うーん、そうだねぇ……確かに嫌いだな。戦い、つか戦争は」

フランスは自分が持っている短剣を見る

フランス「人は味方も敵もたくさん死ぬし疲れるし……それに」

フランスは目を閉じて悲しそうに言った

フランス「大切な人まで奪うからなぁ」

さいほの「うわ何あれキザすぎるよ。つかシリアスすぎるよ」

なつじ「おぉフランス、あの子のこと思い出してるねぇ」

さいほの「あの子？誰だそりゃ」
さいほのはヘタリア話の内容とかを一切知りませんｗ

なつじ「本人に聞いてー、話すのめんどい。で、いつ出る？」

さいほの「そうだな、あの二人が日本とフランスに気をとられているところをバーーンと！」

なつじ「おぉ！楽しみだねぇ」

さいほの「そうだねぇ」

→空気読めないーズ

日本「ど、どこからかまったく空気が読めてない人達の会話が……；」

フランス「お、俺も聞こえたわ。それと同時に殺気も感じたわ」

二人は顔を青くしてガタガタと震える

キリカとキリハは何があったのこいつら?みたいな目で二人を見ている。

「うーんやっぱこいつらといると調子狂うな……」

「そうね……なんか戦う気失せるわね……」

キリカとキリハはさっきあれだけ言っといて完全にやる気をなくしたようだ

それをあの二人は見逃さなかった。

さいほの「うおっしゃぁぁぁああ!出番来たでぇぇぇえええ!!」

なつじ「行くぞさいほのぉぉぉおお!!」

二人はそれぞれ手に武器を持ち油断している二人に向かって走ってきた。

フランス『ちょっ、あんな大きい声出しながら来たらバレんだろぉぉ!!』

日本『ははは、元気ですねぇ……』

フランスはさらに顔を青くし、日本は孫を見る目で二人を見ている。

幸い馬鹿なキリカとキリハは背後から迫って来る二人に気付いていない。

さ・な「「うおりゃぁぁぁぁああああ！！」」

二人は地面を強く蹴り、さいほのはのこぎり（怖ぇぇっ）をなつじは鉄パイプを二人に向かって振り下ろした。

「「！！！？」」

二人はようやく背後の殺気に気付き後ろを振り返る。

いける！！

なつじとさいほのはそう思った。

が……

さいほの「おっ！？」

なつじ「へっ！？」

もともと運動神経が人並みの二人はなんとか上空に浮かんでいるキリカとキリハの所には来れたが二人の体は落下を始めていた。

フランス「あっ」

日本「あらら」

さ・な「「ぎゃぁぁぁあああ！！！」」

二人は叫び声をあげながら地面に落下した。

「「……；」」

キリカとキリハはそんな二人をなんともいえない表情で見ている。

さいほの「いっつつ……まさか落下するとは思ってなかったわw」

なつじ「いや落ちるでしょ」

あの高さから落ちたのに怪我一つしない二人はある意味すごい

日本「大丈夫ですか！？」

二人を心配した日本とフランスが駆け寄ってくる

なつじ「お、フランスひっさしぶりー♪生きてたんだ」

フランス「最後の一言余計だから」

さいほの「なんで死んでないの？」

フランス「意味似たようなだからっ！！」

「お前らってホント何がしたいわけ？」

四人に冷たくキリハが問い掛けた

その３１　戦闘開始（後書き）

～反省会～

ほのか「あれ？今回の語り誰やってんの？」

さいほの「作者」

苑子「へ！？なんでなつじとかやんないの！？出番あるのに！」

なつじ「めんどくさいから☆」

ほのか「おいおい！！じゃあほとんどの話で語りをやっている私はなんなんだい！！？」

さ・な「暇人」

ほのか「きっぱり言われたー」

感想お願いします！

その３２　敵にまわしちゃ危険な人（前書き）

ツンデレ乙ｗ

ｂｙ日本

最近、緑チーム以外出番ないｗ

その３２　敵にまわしちゃ危険な人

「ったく、何が来たと思えばお前らか」

キリハは呆れ顔で私達を見てきた。

私とさいほのも負けじとガンを飛ばす

さいほの「んだとゴラァ。私達に気付かなかったくせにぃ」

なつじ「ダッサ。もうすぐで殺されそうになってやんのー、ププーw恥ずかしーいw」

「キリハ、殺していいよね？こいつら今すぐ殺していいよね！？」

キリカは完全に私達の挑発に乗っている。最近こいつボケキャラになってねぇか？

フランス「お前ら普通叫びながら来るか？バレるに決まってんだろ……」

さいほの「バレなかったよ？」

フランス「まぁそうなんだけどさ」

なつじ「フランスごときが私に説教してんじゃねーぞ、ひざまづけ変態」

フランス「なんでぇ！？」

日本「ははは、平和ですねぇ」

日本は本格的に爺ちゃん化を始めている。

「おーい俺達の存在無視すんなー」

さいほの「あ、まだいたの？」

「お前達さ、俺達の目的忘れてない？いつ襲ってきてもおかしくないんだよ？」

なつじ「でも襲わないで待っててくれてるんだね、やっさしー」

「はっ！？別にあんた達のためじゃないし！」

日本「ツンデレ乙ｗ」

日本がグッチョッブする

オタクめ

あとキャラ崩壊しかけてるよ？

うーん、でもそろそろ本題に入らないとな

てことで……

なつじ「えい」

手に持っていた鉄パイプを試しに投げてみた☆

「「ぎゃぁぁぁあああ!!?」」

鉄パイプはそのまま二人の所に飛んで行った。

二人はびっくりして叫び声をあげる

反応でけぇ

「な、いきなり何すんのよ!!」

なつじ「え?いや、暇だったからw」

「暇だったからって鉄パイプ投げんな!死んだらどうする!」

なつじ「いや殺すつもりだったんですけど。あんた達こそ本題忘れてるでしょ」

「あぁそういえばそうだった!!忘れてた!」

マジで忘れてたんかい

さいほの「よっしゃぁ!暴れるでぇ!」

フランス「あの、のこぎり持って言わないで。めちゃくちゃ怖いんだけど」

さいほのは笑顔でのこぎりを構える

「いくぞ！」

キリカとキリハは空中を蹴って私達の所に突進してきた

なつじ「わっ！いきなり！？」

二人を避けるために私達は横に飛びのいた。

私と日本、さいほのとフランスで二手に分かれた

さいほの「お前とかよ……」

フランス「そんなに嫌かよ……」

さいほの「かなり」

向こうはさいほのがめちゃくちゃ嫌そうな顔をしてる。ドンマイ、フランス☆

「ちょうどいいな。キリカはそっちの変態チームを頼む」

「わかった」

さいほの「なんで私も変態ってことになってんだよ！！一緒にすんな！」キリカはキリハに指示されて変態チーム……じゃなくてさいほのとフランスの所に行った。

さいほのはぶちギレてる

「お前らの相手は俺だ。３０秒ももたないだろうな」

キリハは私の方をチラチラ見ながら言う。
私そんなに弱いと思われてんのかな、なんか泣けてきたんだけど
日本「大丈夫です。私が守りますので無理はなさらないでください」
日本にまで思われてるよ……
なつじ「わ、私だって戦え……「いくぞぉぉおお！！」……」
わー私、完全に無視されてるよー
二人で戦闘おっ始めちゃったよー
私いないことにされてるよー
しかーし！無視、てかいないことにされたくらいでへこたれる菜摘様ではないのです！！
なつじ「つーことで無視すんなぁぁぁああ！！」
「！！？」
日本との戦いで気を取られていたキリハは後ろから襲ってきた菜摘様の攻撃を避けられず攻撃をもろ受けて気絶した。
日本「……お、お見事です」
なつじ「私にかかればこんなもんよ！！」
私は得意げに言う。
日本は苦笑いしながら

日本『この人は敵にまわしちゃいけない……』

と思っていた。

さいほの「あ、あっちは終わったらしいよ」

「え!?ってキリハぁぁぁああ!!?」

キリカは振り返ってキリハの屍　（おそらくまだ死んでないが）を見て混乱している。

フランス「どうやら菜摘ちゃんが殺ったらしいな」

おそらく一部始終を見ていたフランスが顔を青くして教えてくれた。

「このっ……キリハの仇ぃぃぃぃ!!」

目に涙をためてキリカが私達に剣で切り掛かってきた。

さいほの「いや私達はなんも悪くないよ!?殺ったのあっちのドS幼女だよ!?」

なつじ「聞こえてるからな」

あっちの方まで聞こえるくらい私は大きい声で言ったらしい。
ドS幼女がキレてるのは遠く離れたここまでわかる。だって殺気がすげーもん。

その殺気に負けないくらいキリカも殺気を出している。

フランス「うっわすげぇ殺気。お兄さん勝つ自信ないんだけど」

このフランスも感じとるくらいキリカの殺気はすごい。

さいほの「私、めんどくさいから休んでるね。よろしくー」

フランス「え!?ちょ!」

私は近くのベンチに腰をおろした。

フランス「お兄さん……泣いていいかな……」

フランスのか細い声が悲しく響いた。

その３２　敵にまわしちゃ危険な人（後書き）

～反省会～

ほのか「そーいえばさ」

苑子「ん？」

ほのか「夏休み編、作者がこのまえ１０月後半には終わらせるって言ってたよね？」

苑子「あー、うん。そういえば言ってたね」

ほのか「今、１１月だぜ？」

苑子「過ぎてるね」

ほのか「過ぎてるよ」

苑子「いやもう作者はそういう目標は達成できないタイプだから、仕方ないよ」

ほのか「いや、でももう１１月だよ？秋から冬に変わってきてるよ？でもこの小説のキャラクター、まだ半袖だよ？」

苑子「でも作者の心の中は夏真っ盛りだよ？」

ほのか「もう作者の心の中は冬真っ盛りだよ」

苑子「なんという……」

ほのか「ていうか……」

ほ・苑「出番……まだかな……」

出番を結構気にする出番ないーズだった。

その３３　変態だってがんばんぜ！（前書き）

君も変態なのかい？

ちげーよぶっ殺すぞ

ｂｙさいほの＆なつじ

今回はがんばって早く投稿できた！

この調子でがんばんぜー！！

その33　変態だってがんばんぜ！

ガキィィィン！！

静かな遊園地に剣がぶつかり合う音が響く。

私の座るベンチの近くでは変態……もといフランスがたぶんブランコ……じゃなくてブラコンのキリカと戦っていた。

私？いや私はごく普通の人間だから戦ってもすぐ負けるのがオチだし、第一……

すげぇめんどくさそう

フランス「そんな理由で！？お兄さんもめんどくさいのは同じなんだけど！！」

さいほの「なにげに私の頭ん中覗かないでくんない」

変態って人の考えてることわかるのか

フランス「わかんないから！」

さいほの「だから覗くなって言ってんだろ。つか変態なのは否定し

ないんだ」フランス、ツッコミながら戦ってるよ。すげぇな。

さいほの「そういえばお前、そんなに強くないんでしょ？」

フランス「えっ？」

さいほの「いや前に黒須から聞いたんだ。漁夫の利が得意だって」

フランス「いらんことを教えやがって……」

フランスはため息をついた。

私達がこの世界――ヘタリアの世界に来てしばらくたった時、ヘタリアのキャラや世界のことについて何も知らなかった私は（年中ミス〇ルのことしか考えてないから）黒須からたくさん教えこまれた。本当に教えられたことはめちゃくちゃ多かったけど覚えが早い私はちゃんと教えられたことは大体覚えている。

なつじ「覚えが早いって自分で言うな」

さいほの「君も変態なのかい？」

なつじ「ちげーよぶっ殺すぞ」

いつの間にかこっちに来てベンチに座っていたなつじと日本もフランスとキリカの戦いを見学していた。

頭ん中覗かれたんで君も変態なのかと言ったらめちゃくちゃ睨まれたからとりあえずドS幼女からは目線をそらした。

フランスはなんとかキリカの攻撃は防げているが攻撃を仕掛けようとはしていない。いや、しようとしても出来ないのだ。相手の動き

は早く次から次へと攻撃してくる

日本「相手の方は戦いに慣れているようですね。動きに無駄がありません」

日本が戦いを見学しながら言う。
確かにキリカの動きに無駄はなく早く正確に攻撃をしている。

なつじ「あれはフランスヤバいんじゃないの？フランス、追い詰められてるよ？」

なつじの言うとおりフランスはおされていた。
息はあがっていてキリカの攻撃を防ぐ動きも徐々に遅くなって来ている。

さいほの「よくもあれで国としていれたもんだな。革命とか戦争の時どーしてたんだろうか」

なつじ「ナポレオンとかいたし、あとは……」

なつじは目を細めて呟いた。

なつじ「あの子……ジャンヌダルクもいたからな……」

さいほの「ジャンヌダルク？」

ジャンヌダルクってあの……あれだ、うん。
何した人だよ、さっぱりわからん。
でも名前は知ってるな。

フランスはジャンヌダルクと何か関係でもあったんかな？

なつじ「まぁそれより、さいほの加勢に行けば？もうフランス、危ないよ」

なつじはフランスを指差した。

さっきより動きが遅くなっていた、さすがにヤバい。

さいほの「仕方ないなー、めんどくさいけど暴れちゃいますか」

なつじ「うーんやっぱりのこぎり構えながら言われたら怖くて仕方がないんだが」

日本「そういうものですよ」

私は気付かれないようにキリカの背後に周り、のこぎりを構えて走り出した。

相手は気付いていない、今度は確実に行ける！

そう思った瞬間だった。

ずっと前を向いていたキリカが突然振り返り私に向かって剣を横に振るった。

戦いなんてやったことがない私は素早い反応が出来ずなんとか咄嗟に避けたが左腕を少し切ってしまった。

さいほの「いっつつー……いきなり何すんだよ！」

「それはこっちのセリフよ。背後から襲ってくるなんて……卑怯よ」

さいほの「私達はあんた達を倒すのが目的なんだからこうしなきゃ勝てないでしょうが」

「2対1なんだから……」

さいほの「こっちは二人でも戦いに慣れてないから力は一人に近いんですぅ」

「うっわ言い方ムカつくなーコイツ」

いきなり左腕に鋭い痛みを感じて腕を見る。

さっき切ったところから血が大量に出ていて服を赤く染めていた。

こんなん初めてだわ。

日本「傷が深いですね……あれでは左腕は使えません」

なつじ「利き腕じゃないからよくね？」

日本「いえ……両手から片手になる分、のこぎりを両手を使って動かしていたさいほのさんの力が片手になることによって半分になってしまう、ということです」

なつじ「なるほど。さいほのの力が１００％から５０％になっちゃう、ってことか」

日本「そういうことです」

フランス「おい大丈夫か？」

さいほの「わりと大丈夫」

でも左腕うごかねー、意外と動かないもんなんだな。

さいほの「それよりさ。お前、私のことより自分のこと心配した方がいいよ？」

フランス「は？」

さいほの「後ろでキリカ、スタンバってるよ」

フランス「！！！？」

フランスは後ろを向く。

フランスの後ろでは剣を振り上げたキリカがスタンバってた。

「あまいな」

キリカは剣を振り下ろした。

フランスはその場から動こうとしない

さいほの「何やってんだよ早く避けろ！！」

フランス「いやぁ……ははは……」

フランスは笑いながら地面にぺたんと座り込んだ。

フランス「腰……ぬかしちゃった……」

さいほの「じじぃかてめぇは！！」

私は舌打ちをして地面を蹴って走り出した。
しかし確実に間に合わない。

さいほの「くっそぉぉおお！！フランス！」

フランス「は！？」

さいほの「伏せろぉぉぉおおお！！！」

私は右手でのこぎりを力一杯投げた。

なつじ「いやのこぎり投げんなぁぁああ！！くそ危ねぇぇえええ！！」

さいほの「鉄パイプ投げたお前に言われたかねぇわぁぁああ！！」

鉄パイプも十分危ねぇだろぉが！！

「っ！！！」

私の投げたのこぎりはキリカの腕を切り付けた。
キリカの手から剣がすべり落ちてフランスの近くの地面に刺さる。

フランス「ぬぉっ！？」

何、剣がすべり落ちて近くに刺さったくらいでびびってんだお前は。

「っ……よくも……」

キリカが血が流れる腕をおさえて悔しそうに言う。

日本「あなた達の負けですよ。おとなしく私達をこの世界から出してください」

「そんなことするかっ！！」

キリカはキリハのもとに走っていった。

そしてキリハを担いでブラックホールのような物を作り出した。

なつじ「あ、てめっ逃げんのかよ！！」

「そう簡単に帰してたまるか！！あとここで終わっちゃったらほかの奴の出番がなくなっちゃうだろ！」

さいほの「んなの知ったことか！！」

キリカはブラックホールの中に消えていった。

さいほの「あーもう逃げられちゃったー！フランスのせいで」

フランス「俺！？」

日本「お二人ともお怪我はありませんか？」

さいほの「あります」

日本「あ、そういえばそうでしたね」

いや忘れんなよ

日本は白い布を細くちぎって怪我をしたところに結んだ。

なつじ「さいほの、大丈夫？」

さいほの「大丈夫、って言いながら怪我したところ叩くのやめてんくない？」

地味に痛いんですけど

フランス「それよりあの二人、今度は別のチームの所に行くんじゃないか？」

日本「その可能性は高いですね」

さいほの「んじゃあ加勢にでも行くかっ！！」

なつじ「え、めんどい。疲れたし」

さいほの「おめぇなんもしてねぇだろうが」

なつじ「んな！キリハを倒したのは私だよ！」

さいほの「ほとんどは日本が戦ってたじゃん」

なつじ「私だって頑張ったもん！！」

あれ、なつじ涙目になってる？

さいほの「ちょ、普通泣く！？」

なつじ「だって私だってぇ……頑張ったんだもん！！」

おいいつものドS幼女はどこ行った！！？

フランス「泣くな泣くな」

なつじ「うるせぇよ触んな」

フランス「なんで俺の時だけドSに戻る！？」

さいほの「私が悪かったから泣くな！」

なつじ「ぐす……土下座してくれたら許してあげてもいいよ」

さいほの「さ、行こうか」

なつじ「おい無視すんな」

ドSな幼女を無視して私達は遊園地を歩きはじめた。

その33　変態だってがんばんぜ！（後書き）

～反省会～

さいほの「今回は反省会私達に頼まれたよ」

なつじ「あれ？反省会って出番がない人が出るもんじゃないの？」

日本「あぁ、それは次の話から私達の出番がまったくないからじゃないですか？」

さ・な・フ「はぁっ！！！？」

なつじ「つかフランスいたのかよ！！」

フランス「いたよ！！で出番がないって……」

日本「次の話から私達のチームではなく違うチーム視点になるということですよ」

さいほの「なんだってぇぇえええ！！？」

なつじ「え！？じゃあしばらく私達出番なし！？」

日本「はい」

さいほの「え、ちょ、私ただでさえいつも影がうすいのに出番がないってそれh……」

強制終了。

てことで日本も言った通り緑チームのターンはここで終わりです。

さて次はどっちのチームにしようか……

こっちのチームを先にしてくれ！！っていう願望がありましたらどんどん言っちゃってください☆できるかぎりそうします！

その３４　上を向いて歩こう（前書き）

串かつになってたよ！！

ｂｙほのか

最近寒くなってきましたね……
なのに夏休み編……

その３４　上を向いて歩こう

ほのか「ちぇー、日本と同じチームになりたかったなー」

イタリア「俺もドイツが一緒がよかったよー」

中国「おめぇらいちいち文句言ってんじゃねーある！！」

歩きながらぶーぶー文句を言っている私達を中国が怒る。

中国「つかおめーが持ってきたくじで決めたんだからお前が１番文句言っちゃダメじゃねーあるか？」

ほのか「それはそれ、これはこれ」

中国「何あるかそれ……」

中国はため息をついた。

私達、青チームは敵のあの二人に会うこともなく平和な時間を過ごしていた。

中国「どこが平和あるか。ここはあいつらが作った異次元の空間ある。ずっとここにいれば我達はこの世界に飲み込まれてここで一生を過ごすことになるある」

ほのか「うそ！タイムリミットがあんの！？」

中国「この前も言ったはずある」

イタリア「え、どんくらいなの？この空間にいれる時間」

中国「せいぜい5時間あるな。まぁこの空間に来てから1時間はたってるから正確にはあと4時間ある」

ほのか「それを早く言えよぉっ！！のんびりしてられないじゃん！」

中国「普通この状況でのんびりしてる方がおかしいある」

まぁ確かに……

イタリア「ど、どうしよ……早くあの二人倒さなきゃ……」

イタリアは顔を青くしてめちゃめちゃ焦っている。

あれ、そういえば……

ほのか「さっきからイギリスしゃべってなくね？」

イギリス「なっ！」

完璧に存在忘れてたわ。

中国「話に参加できなかっただけあるよ。不憫だから」

イギリス「誰が不憫だ！！」

ほのか「うそ、イギリスってプーちゃんと同じ不憫だったの！？」

イギリス「ちげぇよバカ！！」

ほのか「バカ言うな！！」

まぁバカだけどさ

イギリス「だいたい俺は話に参加できなかったんじゃない！！参加しなかったんだ！」

イタリア「なんでー？」

イギリス「俺はこいつらとしゃべってたからな」

そう言って自分の隣の空中を指差すイギリス。

ほのか「……なんもいないじゃん」

しかしそこには何もいない。

イギリス「はぁ！？いるだろここに！ほら！」

イギリスは何回も空中を指差す。

でもよく見てもそこには何もいない。

ほのか「何言ってんのさイギリス。そこに妖精さんがいるとでも言

いたいの？」

イギリス「いるから言ってんだろぉが！」

ほのか「いんのかよ」

出たよオカルト紳士

本当に妖精さんが見えるとは……

中国「おめぇら揃って緊張感なさすぎある！！敵がいきなり襲ってきたらどうするあるか！」

ほのか「大丈夫だよ、そんないきなり来るわけ……」

イギリス「！！！ほのか、イタリア、上！！」

ほのか「へ？」

イタリア「ヴェ？」

私とイタリアはイギリスに言われ見上げる。

なんか光る物が空から降って……

中国「何やってるあるか！！危ねぇある！！」

ほのか「ぬぉわ！？」

イタリア「ウヴェ！？」

中国とイギリスに体を押されて私達４人は地面を転がった。

ほのか「いって……何が……！！？」

私は言葉を失った。

さっきまで私とイタリアが立っていた所に何本もの剣が刺さっていたからだ。

ほのか「あああああそこって私達がさっきまでいた所……だよね？」

イタリア「も、もしあのままあそこにいたら……」

ほのか「串かつになってたよ！！」

イギリス「串刺しだろうが！お前らいつ豚になった！そしていつ揚げたんだ！」

ほのか「いやぁお腹空いてたもんでつい……」

中国「おめぇさっきいっぱいバイキングで食ってたある！もう５話以上前の話あるがまだ１時間ちょっとしかたってねぇある！」

ほのか「二人ともツッコミ乙ｗ」

イ・中「うるせぇ　（ある）！！」

息ピッタだなー。

昔、アヘン戦争していたとは思えない！

イタリア「ねぇ、この剣どっから降ってきたのかな……？」

イタリアが泣きそうになりながら私達に聞く。

ほのか「どこって……空の雲からっしょ？」

イギリス「んなわけあるか」

中国「こんなことするのはあいつらしかいねぇあるよ」

中国はため息をついて、空中に向かって叫んだ。

中国「いるのはわかってるある。我達は逃げないから出てくるよろし」

ほのか「え、敵？敵？」

いんの？どこに？

私がきょろきょろとしていると空中にあの二人が現れた。

ほのか「うわぁぁああ！いきなり！？てか……」

私は二人を見る。

ほのか「一人……死んでね？」

片方……確かキリハだっけ？がキリカに担がれてぐったりしてた。

「キリハはさっきまでの戦いでちょっと怪我しただけだ。気にするな」

ほのか「いや普通気にするよ？キリハ、白目むいちゃってるよ？血、ダラダラだよ？」

キリハは頭から大量に血を出していた。

イギリス「前の戦い？ほかの奴らと戦ったのか？」

ほのか「マジ？誰に殺られたの？キリハ」

「ドS幼女　（なつじ）だ」

沈黙。

四人「えぇぇぇぇぇえ！！！？」

「うお！？」

私達は声をそろえて叫ぶ。あ、あのなつじが！？

中国「なつじが!?どうせ日本とかに協力とかしてもらってやったんじゃねーあるか?」

イギリス「たぶんそうだろうな」

なつじ「っくしゅんっ!!」

さいほの「うわ汚っ!風邪?」

なつじ「汚いは余計だボケ。うーん風邪かなぁ?」

日本「誰か菜摘さんの噂でもしているんじゃないですか?」

なつじ「そーかなぁ?」

「お前ら本当に仲間か?仲間を信用してないな」

キリカが腕を組み呆れた顔で言う。

ほのか「これでも仲間でーすっ☆ねー♪」

イタリア「ねー♪」

中国「あぁもうお前らやる気なさすぎある！せっかく敵が出てきたくれたんだからさっさと捕まえて元の世界に戻るあるよ！」

ほのか「あいさー」

私は愛用の小刀を取り出す。イタリアはお馴染みの白旗を構える。

ほのか「でも正直めんどくさい」

「お前あっちのミス〇ル好きとまったく同じこと言うんだな；」

さいほのも言ってたのか。

イギリス「いいのか？もし元の世界に帰れなくなったら大好きなアニメも見れなくなるんだぞ？」

イギリスの言葉に私は反応する。

大好きなアニメが見れなくなる……だと！？

じゃあ銀〇とかサザ〇さんとかち〇まる子ちゃんとか見れなくなるというのか！！

（銀〇以外はもともと見てません。）

ほのか「おっしゃがんばるぞーっ！！」

中国「アニメでやる気出すとかお前の神経おかしいある。」

やる気を出した私を中国は冷ややかな目で見ていた。

その３４　上を向いて歩こう（後書き）

感想お願いします！

その３５　噂話は程々に（前書き）

ぶぇっくしょいっ！！

きたねっつの

ｂｙなつじ＆さいほの

短いです。短すぎます。

その３５　噂話は程々に

「っつつ……ん？ここは……」

さっきまでキリカに担がれてぐったりしていたキリハが頭を抑えながら目を覚ました。

チッ、敵がまた増えた……

「ってあれ！？さっきまで違う奴らと戦ってたような……」

キリハは私達を見て驚いている。

ほのか「あぁ、あんたなつじに負けたんだよ？あの小さくてドSで毒舌でちょこちょこしてる幼女に負けたんだよ？」

中国「すげぇ悪口にしか聞こえねぇある；；」

「く、屈辱だ……！！あんな小さくてドSで毒舌でちょこちょこしてて小さくてメガネの幼女に負けたなんて……！！」

イギリス「お前らあいつをけなしたいだけだろ」

なつじ「ぶぇっくしょいっ！！」

さいほの「きたねっつの」

なつじ「殺されたいの？ねぇ？」

日本「やはり風邪ではないですか？海に行ってから体を冷やしたので……」

さいほの「大丈夫大丈夫。馬鹿は風邪ひかないから」

なつじ「誰が馬鹿だって？あ〝ぁ？」

なつじはキレる寸前だ。

フランス「あの二人どこ行ったんだろうな」

日本「もしかしたら他の方達の所に行ってるかもしれませんね」

なつじ「ぶわっくしょい！！」

さいほの「……」

なつじ「何、可哀相なものを見る目で見てんだよ」

ほのか「もうさ、さっさと始めない？話進まないし、さっきからイタリアしゃべってねぇし」

イタリア、空気状態。

「こうやって長引かせてんのはお前らだろうが」

キリカがキレぎみに答えながら剣を出す。
キリハも困った顔で剣を出した。

イタリア「お、俺は応援してるよ……」

イギリス「お前も戦え！！」
イタリア「ヴェ！！？」

イギリスは服から何かを取り出した。
私はそれを見て顔を青くした。

ほのか「イギリス……何それ……」

念のため一応聞いとこう

イギリス「何って……これ使って戦うんだよ」

イギリスが手に持っているのは……

少し短めの棒の先端に星がついたお馴染みのアレだった。

その３５　噂話は程々に（後書き）

～反省会、という名のＱ＆Ａ～

ほのか「ねぇ、そーいえばさ」

なつじ「ん？」

ほのか「今、私達異空間にいるわけじゃん？」

苑子「どもー♪最近まっったく出番のない苑子どぅぇす☆」

さいほの「ウザい黙れ」

苑子「うぅ……」

なつじ「うん、で？」

ほのか「その……異空間にいる私達の服装って何なのかな？」

苑子「ホテルのゲームセンターにいるときにつれてこられたから……浴衣じゃない？」

さいほの「ところがどっこい！！それが違うんだなー！」

なつじ「なんなのそのテンション」

さいほの「私が説明しよう！！確かにゲームセンターにいた時に私達が着ていた服装は確かに浴衣だったけど異空間に来たときは不思議なことに海に行く前の服装に戻っているのですよー！」

苑子「な、なんだってー！！？」

なつじ「驚き方ウザい」

ほのか「し、証拠は？」

さいほの「ほら、あの二人と戦ってる時私達は普通に動きやすそーに戦ってます。この時の服装がもし浴衣だったらめっちゃ動きにくいですね、ハイ」

ほのか「なるほど！！」

なつじ「納得するんだ」

苑子「でもなんで普通の服装に？」

さいほの「作者の事情です☆」

ほ・な・苑「……」

その３６　変態は拳で撃退しましょう（前書き）

だから見たくねぇって言ってるだろ　（ある）！！

ｂｙほのか＆中国

イギリスがとてつもなくかわいそうです；；

その３６　変態は拳で撃退しましょう

ほのか「いやいやいやダメダメダメーーッ！！」

私は咄嗟にやる気満々のイギリスの手からお馴染みの星型ステッキを取り上げる。

イギリス「な、なにしてんだよ！！返せ！」

ほのか「いやだぁっ！！あんなかわいそうなイギリス、私は直で見たくないいいいいい！！」

見たら絶対しばらく眠れなくなるわ！！

イギリス「かわいそうってなんだ！！つかそれしか戦う方法ないだろ！」

ほのか「ほかにもこれより何倍もいい戦う方法あるわ！頭使えアホンダラ！！」

イギリス「アホいうなばかぁっ！！」

私は若干キレながら星型ステッキを地面に叩きつける。

イギリスはそれを慌てて拾って埃を掃う。

イギリス「なんだお前！奇跡見たくねぇのか！」

中国「我だってんなもの見たかねぇある！！」

中国がイギリスの背中を飛び蹴りする。
めっちゃ綺麗な姿勢でした。さすが中国。
敵二人＋イタリアはそんな私達の様子困った顔で見ている。

イギリス「本当なんなんだよお前ら！奇跡が見たくｎ……」

中・ほ「だから見たくねぇって言ってんだろうが　（ある）！！」

中国と二人で頭がいかれちゃってる変態オカルト紳士をボコす。

「お前ら仲間ボコしてどうすんだ！俺達を無視すんな！」

キリハがぶちギレる。
私と中国は仕方なくイギリスをボコすのやめた。

ほのか「ちっ、仕方ないなぁ……中国いくよ」

小刀を構えながら言う。どうよ私かっこよくね？

中国「おめぇは大人しくしてるあるよ。あの変なのに絶対変身するんじゃねぇある」

中国はボロボロのイギリスに言葉を吐き捨てた後、中華鍋を構えた。

イタリア「ヴェー……俺は……」

ほのか「イタリア戦いたくないっしょ？安全な所行って見てていいよー」

イタリア「うん、わかった！」

イタリアはとびきりの笑顔を見せると、とてとてとイギリスの所に走って行った。そこも危険だぞ。

「お前ら二人か。その内一人はただの人間、すぐに終わるな」

キリカが剣で私を指す。
剣がキランと光る。

あ、どうしよう怖くなってきちゃった。

ほのか「ね、ねぇ中国」

中国「ん？」

ほのか「私も見学しててていいかなーなんて思っちゃったり……」

中国「ダメに決まってるある」

ほのか「ですよねー……」

私の願いは簡単に砂となって崩れた……

でも怖ぇーよ！！あんな鋭い切れ味抜群の剣で体をチョン、とやられたら一瞬で私バラバラになっちゃうよ！！
（なりません。）

「おらぁぁぁああっ！！」

きたぁぁぁああ！！もうあいつら殺す気満々だぁぁ！！殺気がパネェェェエエ！！

ほのか「ぎゃぁぁああ！！やだやだ怖い怖い！！死ぬ、死ぬ！！」

私はその場にしゃがみこむ。

中国「ちょ、おめぇ何やってるある！避けるある！」

ほのか「と、とぉっ！！」

がんばって足を動かして横に飛ぶ。なんとか剣からは逃れられた。

中国「お前一人じゃ早く死ぬの確実ある。我からなるべく離れねぇように戦うあるよ」

ほのか「は、はは……ごめん……」

体を起こして中国の所に行く。あ、足震えてるよ私。

イタリア「ほのかちゃん、大丈夫？」

ほのか「だだだ大丈夫だよ、こんくらい……はは……」

イギリス「イタリアに心配されるなんて終わったな、ほのかw」

ほのか「お前後でもう一回ボコすからな。覚悟してろよ」

イギリスを軽ーく睨んだ後私は改めて小刀を構えた。

中国「我から絶対に離れんじゃねーあるよ」

ほのか「了解っ！！」

私と中国は地面を蹴って敵に突進していった。

その３６　変態は拳で撃退しましょう（後書き）

～反省会？～

苑子「大変だよみんなー！！」

なつじ「ん？」

ほのか「みんなって言っても私達四人しかいねぇけどな」

さいほの「で、何？」

苑子「この小説のアクセス数が１００００アクセスを越えてるんだって！！」

なつじ「マジかよ」

さいほの「つかなんで今さら？」

ほのか「作者が最近になってアクセス解析の存在に気付いてチラッと見たらすごいことになってたらしいよ」

苑子「すんごいね！」

さいほの「まぁとにかく」

四人「これからもよろしくお願いします！」

はい、というわけでアクセス解析の存在に最近気付いた作者です。
こんな小説を読んで？くださる方がいっぱいいるということは作者にとってとても嬉しいことです！

これからもこの小説を見守ってください！

その37　戸惑いながらの戦い（前書き）

え、みんなヘタレなの？

ｂｙイタリア

今回ちょっとシリアス。
あとイタリア視点です！

語りが主人公以外なのはイタリアが初めてですね。
がんば！

その37　戸惑いながらの戦い

ほのかちゃんと中国が敵と戦ってる様子を俺はイギリスの隣で白旗を握りしめながら心配そうに見ていた。

イタリア「ヴェ……大丈夫かな……」

イギリス「大丈夫だろ」

さっきボコられていたはずなのに傷一つないイギリスが言う。

イギリス「中国は強いしほのかだってがんばれば出来るはずだ」

イタリア「で、でもほのかちゃんは普通の人間だしまだ中学生なんだよ?あんなに強い奴らに勝てるのかな……」

イギリス「ほのかはお前よりは戦力になると俺は思うぞ」

イタリア「ガーン……」

確かにそうだけどそんなはっきり言わなくても……

イギリス「ま、あの二人がピンチになったら助けに行けばいい話だろ?そんな心配することじゃねーよ」

イタリア「うん……」

俺は小さく頷いた。

イギリス「それにしてもあいつら、一体何がしたいんだろーな」

イタリア「え、世界征服するために邪魔な俺達を殺そうとしてるんじゃないの？」

イギリス「まぁそうだけどよ」

イギリスは戦ってる敵二人を交互に見た。

イギリス「戦うのに戸惑っている感じがすんだ、奴ら」

イタリア「え？」

イギリスが言ったことに驚いて俺は握っていた白旗を落としそうになる。

イタリア「そ、そうなの？俺にはさっぱり……」

イギリス「お前はあんま戦争とかしないからな」

イタリア「ヴェ……」

イギリスはため息をついた。

イギリス「戦争とかしてるとな、結構いるんだ。戦いに出ている奴らに。戦うのを戸惑ってる奴らが」

イタリア「そ、そーなの？」

イギリス「お前もそういう奴らに含まれてるぞ」

イタリア「え、みんなヘタレなの？」

イギリス「ちげーよ」

イギリスに睨まれた……、怖いよー……

イギリス「戦争に出てる奴らってのは大体普通の国民なんだ。無理矢理連れて来られた」

イタリア「無理矢理？」

イギリス「普通死ぬかもしれない戦争に出たい奴なんていねーだろ？だから軍隊は必ずと言っていいほど人手不足になるんだ。だから国民を無理矢理連れていくんだ」

あ、そういう話は日本から一回だけ聞いたことがある気がするな。昔あった戦争とかで日本の上司は国に住んでる男の人を無理矢理軍隊にいれて戦争したって……

イタリア「でもそういう人って大体……」

イギリス「戦死する」

やっぱり……

全員が生きて帰れるほど戦争って甘くないよね……

悲しいな……

イギリス「あいつらも無理矢理俺達を殺しにきた、そういう感じだな」

イタリア「じゃあ戦わなきゃいいのにな……」

イギリス「そんなことしたら組織はただじゃおかねぇだろ」

イタリア「じゃああの二人は……」イギリス「俺達に殺されるか、俺達を殺さなきゃ苦しみから逃れられないだろうな……」

イタリア「そんな……」

俺は剣を使って必死に戦ってる敵二人を見た。
戦ってる最中はあの二人はどんなことを思ってるのかな……
嫌ならなんで俺達に言ってくれないのかな

複雑な思いが頭の中をぐるぐると回った。
俺は白旗を強く握りしめた。

その37　戸惑いながらの戦い（後書き）

～反省会～

ほのか「お前ら私と中国ががんばってる時になにのんびり話しとんじゃぁぁああ！！」

イタリア「えぇっ！？」

イギリス「つか戦うなって言ったのはお前らだろうが！！」

中国「サポートくらいして欲しかったある！！」

イタリア「ご、ごめん……」

ほのか「つかギャグいれろや！！シリアスやめろ！」

イギリス「あの話をギャグにするのは難しいだろ！！」

中国「気合いでやればいいことある！」

イギリス「気合いでどうこうなる問題じゃねーだろ！！」

ほのか「つか……」

ほ・中「私　（我）の出番がねぇーじゃねーか（ある）！！」

イタ・イギ「結局はそこ！！？」

はい、というわけで反省会でしたー

その３８　油断は禁物（前書き）

思ってるよ！私やれば出来る子なんで！！

ｂｙほのか

文がとっても意味不です！！

その３８　油断は禁物

ほのか「おりゃぁああっ！！」

私は力いっぱい小刀をキリハに向かって振るった。

しかしキリハは余裕の表情で手に持っていた剣でそれを防ぐ。

「弱いな、そんな力の弱さで俺達を殺せるとおもってるのか？」

ほのか「思ってるよ！私やればできる子なんで！！」

「自分でいうなよ」

キリハは冷めた目で私を見た後、剣を振って私を払う。

ほのか「つかこっちは小刀なんだよ！剣ってずるくない！？」

「いやそんなこと言われてもな……」

キリハは困った顔をした。

「まぁ文句言われても俺達の目的はお前ら殺すことだから知ったこっちゃないんだけどな☆」

ほのか「知ったこっちゃないんだけどな☆じゃねーよ！ムカつくんだよくそ野郎！！」

私はぶちギレた。

「やっぱりあなた慣れてるのね。こういうの」

中国「我は戦争を何度もやってるあるよ!!こういうのは慣れっこある!」

中華鍋で何度もキリカに攻撃をしながら中国は答える。
ほのかと違って中国は早く的確に攻撃を仕掛けている。
これにはキリカも少し焦りを感じていた。

中国「我は“国”ある!戦争に慣れた我がこんなもので死ぬわけねぇあるよ!」

「油断しすぎだよ?」

中国「っ!!!?」

キリカは得意げな中国の隙をつき剣をついた。
剣は中国の肩を深く切った。

中国「っつつ……４０００年生きた仙人になんてことするあるか」

中国は傷をおさえてキリカを睨む。

「４０００年生きた割には油断しすぎじゃない？私達はあなたたちを殺しに来たのよ？これは本気よ」

キリカも中国を睨み返す。

「これじゃ力入んないでしょ？どうする？」

キリカがニヤリと笑い、中国と地面に落ちた中国の中華鍋を交互に見た。

ほのか「中国！大丈夫？」

中国「大丈夫ある」

中国は片手で中華鍋を拾って、攻撃を再開した。
私も中国の援護をして二人でキリカとキリハと戦う。

さっきまで余裕の表情だった中国は疲労と傷の痛みのせいか動きが鈍り、つらい表情をしていた。やっぱ爺……じゃなくて仙人だからかな。

そんな中国を敵の二人は集中的に狙ってくる。こいつらに心はねぇのか！

私はなるべく中国に負担をかけさせないように二人の攻撃をがんばって防ぐ。

中国「かたじけねぇある」

ほのか「大丈夫だよ！」

中国も片手でなんとか攻撃を防いでいる。
でも中国も私も体力の限界が近付いてきている。早く決着つけないと。

ほのか「……よし！」

私はいちかばちかの賭けに出ることにした。
相手は私ではなく弱っている中国を倒すことに専念している。つまり注意が私にまでいっていない。
だから私が相手に攻撃を仕掛けても気付かれない可能性は高い！！
ふふっ、我ながらすごい発想だ。久しぶりに頭使ったな。

考えてからすぐに私は実行した。
なるべく目立った行動をしないように、しかし素早く相手に近付いていく。
相手はやはり中国しか見ていなくて私の行動に気付いていない。

今だ！！

私は小刀を構えて油断している二人に向かって走っていった。
しかしどんなに近付いても相手は気付かない。

これはさすがに私もおかしいと思った。
しかし私が少しスピードをゆるめた瞬間、二人はニヤリと笑った。

ヤバい、はめられた！！

今まで私が怪我をした中国の身を守っていた。しかし今はその私は中国のもとにはいない。二人はこの瞬間を狙っていたのだ。

二人は同時に中国に攻撃を仕掛けた。
中国は中華鍋を構えて攻撃を防いだが片手しか使っていないため攻撃の反動で中国の体は空中に放り出された。

ほのか「中国！！」

中国はそのまま地面に落下し、痛さに顔を歪めた。

「あとはお前だけだな」

キリハが私を見て不気味に笑う。

あ、この状況かなりヤバいかも。
額に冷や汗が流れた。

中国ヘルプ！！

中国に助けを求めたがさすがに大ダメージを受けたのか地面に横たわりぐったりしている。まぁ私が悪いんだけどさ

視界の片隅で二人が私に向かって剣を振り下ろそうとしているのが見える。

もう完全に終わったと思い、私がきつく目を閉じた瞬間

「仕方ないから助けてやってもいいぞ！！」

こんな腹立つようなセリフが聞こえてきた。
目を少し開けて声のした方を見てみると

「べ、別にお前らのためじゃないんだからな！！俺のためだ」

白い天使のような服？を見にまとい背中にある白い羽を広げ、手に星型ステッキを持ったツンデレ眉毛がそこにいた。

なぜか助かる気がしなかった。

その３８　油断は禁物（後書き）

～反省会～

苑子「あー、ついに出て来ちゃったよブリ天」

なつじ「出ちゃったねブリ天」

ほのか「出ちゃいましたねブリ天」

さいほの「何、ブリ天って？ブリの天ぷら？」

ほのか「ちゃうよ？」

苑子「なんかお腹空いてきたね」

なつじ「そだね。ラーメン食いに行かない？」

ほのか「おー、いーねいーね。行こー」

さいほの「なんでこんなにやる気ねぇの？ムカつくんだけど」

はい、やる気０の反省会でしたー

その３９　天使降臨！？（前書き）

やなこった

ｂｙほのか＆中国

短いです。
あと意味不です。

その３９　天使降臨！？

突然の天使　（変態ツンデレ眉毛紳士）の登場に私とキリカとキリハ、そしてイギリスの隣にいたイタリアまでもが何も言えない状態になってしまう。

いや普通なるよ？目の前になんともいえない天使が降臨してきたら誰でもこういう反応しかできないよ？

中国「おめぇ何もするなって言ったじゃねーあるかぁぁぁあああ！！」

さっきまでぐったりしてたのが嘘のように中国はイギリスを怒鳴りつける。

イギリス「な……お前らがピンチだったから助けようとしてやってるんじゃねーか！！俺だって好きでこんな格好してねーよ！」

ほのか「いやお前さっきまで変身する気満々だったやん」

イタリア「ヴェー……」

言い争う　（？）四人をキリカとキリハは呆然と見ている。

「ほ、ほんと何なんだよあいつらは……」

「人間？」

「ウザいから黙ってようか」

笑顔で答えるキリハをキリカは黙らせる。

イギリス「とにかくっっ！！助けようとしてやってんだ！感謝しろよな！」

中・ほ「やなこった」

イギリス「……（´Д`）」

イタリア「お腹空いたなぁ……」

イギリスの表情に私はつい笑ってしまった。

イギリス「笑うなばかぁ！！」

と言われると笑ってしまうのである。

中国「お前には任せられないある。ここは我が……」

ほのか「ダメだよ中国！まだ怪我が……」

中国「痛い痛い痛い！！そこは掴んじゃダメある！！」

怪我もたくさんしている中国がまた戦おうとしたので私は中国の肩
（よりによって怪我した方の）を掴んでしまった。
中国、さらにまた大ダメージ。

イギリス「ったく……イタリア、お前の白旗ちぎって包帯にして中国の怪我の手当てしろ」

イタリア「え!?白旗を!?」

ほのか「いっぱい持ってるからいいっしょ?」

イタリア「うん……」

イタリアは渋々、持っていた白旗をちぎった。

ほのか「イギリスはどうすんの?」

イギリス「戦うに決まってんだろ」

イギリスは星型ステッキを構えた。

ほのか「あれ?でも確かブリ天って人を子供にすることしかできないんじゃ……」

イギリス「おりゃぁぁぁぁあああ!!」

ほのか「ってイギリスさぁぁぁぁあん!!?」

イギリスは私の言葉に耳を傾けずいまだに混乱している二人のもとに突っ走っていった。

その３９　天使降臨！？（後書き）

～反省会～

ほのか「わぁぁぁああああ！！もう１１月終わっちゃうよぉぉ！？夏休み編終わってないよぉぉ！？」

なつじ「冬休み編じゃん、もう」

さいほの「だから作者は今一日一回投稿できるようにがんばってるんじゃない？」

苑子「テスト前のくせにねー」

ほのか「とにかく私達も作者がスムーズに執筆できるように行動しないと」

さいほの「どーやって？」

四人「……」

終了。

その４０　真面目に戦いましょう（前書き）

じゃあその格好やめろや！！

なんでだよ！！

ｂｙほのか、イギリス

短いです！

その４０　真面目に戦いましょう

「わっ！！なんかあの眉毛、こっち来たわよ！？」

「わ、本当だ！！え、もしかしてあいつと戦わなきゃいけねぇの！？」

イギリス「そうだ！！正々堂々勝負しろ！」

「そんな格好で言われたら戦う気失せるんだけどぉぉおお！！？」

なんだかんだ言いながらもイギリスと敵二人は戦っている。

イタリア「ヴェ、ヴェ」

イタリアは機嫌がいいのか楽しそうに中国の傷の手当てをしている。

中国「いてっ、おめぇもうちょっと丁寧にやるある！」

イタリア「あ、ごめんー……」

中国に注意されてイタリアは集中して傷の手当てをしている。

私はそれをぼんやりと眺めている。

いや、なんか微笑ましくね？自然とにやけてしまうよ？

まぁ敵はイギリスに任せておいて、

私は一休みしますか。

近くのベンチに腰掛け、目を閉じる。

向こうの方でイギリスが一生懸命戦って……

イギリス「ほあた☆」

「ぎゃぁぁぁああ！？なんか出したぁぁぁ！！？」

「つかふざけてるようにしか見えねぇぞあいつ！！」

……

ほのか「安心して休めるかぁぁぁぁああ！！」

イタリア「ヴェ！？」

中国「なっ？」

私は小刀をしっかりと持って三人のもとへと突っ込んでいった。

イギリス「な！？なんで来たんだよお前！俺に任せ……」

ほのか「いや任せられるかぁぁああ！！さっきキリハも言ってたけど戦ってるっていうよりはふざけ合ってるようにしか見えねぇんだ

よ！！」

イギリス「はぁ！？俺はちゃんと真面目に……」

ほのか「そんな格好で笑顔で『ほあた☆』って言ってる時点で完ぺきふざけてるように見えるから！！」

私はイギリスから星型ステッキを取り上げ怒鳴る。

そんな様子を敵二人はポカンと見つめている。

ほのか「とっにっかっくっ！！やるなら真面目にやれ！！」

イギリス「だから真面目にやってるっつの！！」

ほのか「じゃあその格好やめろや！」

イギリス「なんでだよ！」

ほのか「だからその格好で『ほあた☆』って言ってると真面目に戦ってるように見えないんだよこっちは！！」

イギリス「知るか、んなもん！！」

イギリスは私からステッキを奪い返し、敵の方に走っていった。

その４０　真面目に戦いましょう（後書き）

～反省会～

ほのか「そういえば作者、昨日更新しなかったね」

苑子「近所の家に遅くまで遊びに行ってたからねー」

なつじ「そのかわり今日、あと一回更新するつもりらしいよ？」

さいほの「つか作者、テスト前やん。携帯いじってて大丈夫なのかよ」

ほのか「大丈夫！！今回は自信あるんだって！点数が下がる」

なつじ「どんな自信だよ」

苑子「そんな自信だよ」

さいほの「ほんとに大丈夫なんかな……；；」

はい、というわけでテスト前のくせに今日もう一回更新する予定です。あくまで予定ですよ！！

そろそろ真面目に勉強しなきゃまずいかもな……

その４１　眉毛だってがんばんぜ！！（前書き）

目がぁ！！目がぁっ！！

ｂｙほのか

この話の題名、どっかで似たようなのを見たような……
そう思ったあなた、鋭いです。
今回の題名、３３話の題名の変態を眉毛に変えただけです。
理由？題名考えるのがめんどくさかったからさ☆

その４１　眉毛だってがんばんぜ！！

「くっ……！！お前そんな格好してるくせになかなかやるな……！」

イギリスとキリカとキリハが戦い始めてから約３０分。キリハが肩で息をしながら言う。
キリカとキリハは所々傷を作っていた。
この傷は全てイギリスの攻撃　（魔法）で作られたものだった。

イギリス「俺ん家の魔法なめんなよ！！」

イギリスが宙にうきながら得意げに笑う。
私は『ほあた☆』しか使えないと思っていたがそれ以外の魔法も使えるらしい。何でもありかあいつ。

中国「ふわぁーあ。もう見てるの飽きたある」

中国は傷の手当てが終わり、ベンチにすわってあくびをする。

イタリアはもう完全に寝ている。
今日シエスタしなかったからかな……

ほのか「イギリスぅぅうう！！早く終わらせてよぉぉおお！！」

私がそう叫ぶと金髪の天使は振り返りエメラルドグリーンの瞳で私達を見た。

イギリス「こっちだって大変なんだよ!!黙って見てないでちょっとは手伝え!!」

ほのか「だってイギリスが俺に任せろってー……」

中国「我は怪我してるあるー」

イタリア「ＺＺＺ……」

イギリス「とことんムカつくなお前ら!!わーったよ倒しゃいいんだろ!!」

イギリスは私達を怒鳴りつけてから星型ステッキを頭上にあげた。

あれ、なんかステッキに光集まってない?え?幻覚?

そして大量?の光がステッキに集まり、イギリスは敵二人を睨んだ。

イギリス「くらえぇぇぇえええ!!」

イギリスはそう叫んでステッキを振り下ろした。

ステッキに集まっていた光がイギリスがステッキを振り下ろすと同時にビームみたいになってキリカとキリハに向かって発射された。

「わ!!なんかすごいのきたよ!?」

「ホントだ！やば……」

キリカとキリハは逃げる暇もなく光に飲み込まれた。それと同時に二人がいた場所で大爆発が起こり、すさまじい風がこっちにまできた。

ほのか「ぬあっ！？何が……って目に砂がぁぁぁああ！！」

中国「あいやぁぁああ！？」

イタリア「ＺＺＺ……」

す、砂が……

ってイタリアこんな状況でも寝れるのかよ。ある意味すげぇな。

やがて風はおさまり大爆発のせいであがった煙も消えてきた。

ほのか「目がぁ！！目がぁぁっ！！」

私はム○カか。

自分でツッコんじゃったよ。

イギリス「お前ら大丈夫か？」

ほのか「目がぁ！！目が……」

中国「しつけーある」

イタリア「うぅん？何が……」

イタリアがやっと目を覚ました。

ほのか「キリカとキリハは？」

イギリス「あの場所にはいなかった。たぶん、さっきの爆発で飛ばされたんだろ」

ほのか「死んだの？」

イギリス「いや、あいつらはこんくらいじゃ死なないだろ。今の魔法も最小限に抑えたしな」

中国「なんで抑えたあるか！？」

イギリス「いろいろあって、な……」

イタリア「ヴェー……」

イギリスが空を見上げる。

イギリス「よし、ほかの奴らと合流するぞ」

中国「もうちょっと休みてーある……」

イギリス「早くしねーと5時間たっちまうだろうが！ほら、さっさと行くぞ」

中国「あいやぁぁああ！？嫌あるぅぅうう！！」

イギリスが中国の襟を掴み、いやがる中国をひきずりながら歩き始める。

ほのか「ふぅ……ほら、イタリア行こー」

イタリア「あ、うん。行こー！」

まだ寝ぼけているイタリアの背中を叩いて歩かせ、私はポケットにいれてあるさっきドイツから預かった携帯を取り出し現在の時間を見た。

タイムリミットまで

あと3時間

その４１　眉毛だってがんばんぜ！！（後書き）

～反省会～

ほのか「やっと青チームのターン終わったぁぁああ！！」

さいほの「おつかれー」

なつじ「あんまツッコミしてなかったね」

ほのか「ボケの方が楽しそーだしね」

苑子「次の話から黄チームの出番だぜヤッフゥゥウウウ！！」

ほのか「苑子、最近全っ然出番なかったもんね」

さいほの「おめでとう」

なつじ「ケッ！！」

ほのか「あー、でも残念ながら黄チームのターンになっても苑子、出番ないよ？」

苑子「え！？」

ほのか「うん、作者がそう言ってた」

苑子「はぁ！？なんでだよ！それじゃあヘタリアキャラだけになってんじゃねぇか！華がねぇじゃねぇかぁぁあああ！おっしゃ今から作者に殴り込みに……」

ほのか「苑子さん、嘘だから」

苑子は簡単に嘘信じちゃうタイプだと作者は思うのです。ハイ。

というわけで青チームのターン終了ー！おつかれー！

さて次の話からは黄チームのターンと同時にいよいよ夏休み編も終盤です！長かった……

よろしくお願いします！

その４２　人にうざいとか言っちゃいけません（前書き）

もしもしーらかんす

ｂｙ苑子

黄チーム、久々の出番！
あ、でも青チームも少し出ます。
あとロシアが空気。

その４２　人にうざいとか言っちゃいけません

苑・ア「お腹すいたぁぁぁあああああ「うるさい！！」ぁぁぁぁ……」

遊園地に私とアメリカの悲痛？な叫び声が響き渡る。ドイツに怒鳴られたけどね。

ドイツ「お前らさっきバイキングでたくさん食べただろう！」

苑子「私は食べてから約２時間もすればお腹ペコペコだよ」

アメリカ「俺は３０分なんだぞ！」

ロシア「早くない？」

いや黒須も結構早いと思うな。

苑子「てゆーかさっき遠くの方で爆発音聞こえたよね？なんかあったんかな？」

ドイツ「何かあったら連絡するように言ってあるんだが……」

ドイツが携帯を取り出しため息をつく。

私もポケットにいれておいた携帯を取り出した……その時！

『チャラリラリラー♪チャラリラリラー♪』

苑子「のわぁぁぁあああ！！？なんか鳴り出したぁぁぁあああ！？」

アメリカ「リアクションでかすぎるんだぞ！」

ロシア「携帯使ったことないの？」

苑子「私は年中パソコン使ってたからね。携帯持っとらん」

ドイツ「とりあえず電話だろ！？早く出ろ！」

苑子「へいへい」

私は携帯を開き通話ボタンを押して耳に当てた。

苑子「もしもしーらかんす」

『うざっ』

苑子「いきなりひどっ！！」

電話の相手は黒須だった。なんか久しぶりだな。

『いやぁごめんごめん。うざかったから☆』

苑子「いや、うざかったから☆って普通本人の前で言う？今すごく心にグサッてきましたよ？」

『すいまってーん』

苑子「あとで覚えてろよ」

なんかテンション高いな黒須。

アメリカ「誰からだい？」

苑子「ん？あぁ、黒須から」

『お、その声はアメリカかい？やっほー』

アメリカ「やっほー！！」

アメリカもテンション高いな。

苑子「で、なんで電話してきたの？」

『え？あー、うん。言いたいことがあってさ』

ロシア「言いたいこと？」

なんでロシア聞こえてんの？

『うん。えーっと……そのー……』

しばらく沈黙する。

『なんだっけ？』

苑子「知るか」

忘れてんのかよ

『あれだよ。さっきのこと』

電話の向こう側でイギリスが黒須に教えてるのが聞こえる。

バカなのかな、黒須バカなのかな？

『あぁ！！そうだそうだ思い出した！！』

思い出したらしい。

『えっと、さっきね。キリカとキリハが私達のこと襲ってきてね。

それでキリカとキリハが行方不明になったから気をつけてね』

苑子「うん、何をどう気をつければいいのかさっぱりわからない」

なんでいきなりあの二人が行方不明になるんだよ。

私はそれが知りたい。

ドイツ「なんだって？」

苑子「なんかよくわからないけど敵二人が黒須達襲って行方不明になったらしいよ」

ア・ド・ロ「は？」

うん、まぁ当然の反応だよね。

『ったく、かわるよろし……もしもし』

相手が中国に変わった。

少し嬉しい、イギリスでもいいけどね

『さっきの訂正ある。つか説明不足だったあるな、説明しなおすからよーく聞いとくよろし』

中国は落ち着いた声で話しはじめた。

その４２　人にうざいとか言っちゃいけません（後書き）

～反省会～

苑子「出番バンザイ！！」

なつじ「うん、黙って」

ほのか「私も出番あった！！」

さいほの「あれって出番って言えるの？」

ほのか「一応」

なつじ「つかなんか区切り悪くね？なんでこんな中途半端？」

苑子「なんか執筆してたらもうすぐで日が変わっちゃいそうな時間になってたからとりあえず投稿することにしたらしいよ」

さいほの「あぁ！もう日付変わっちゃう！」

ほのか「どどどどうしよう！」

なつじ「この会話を終わらせればいいんじゃないかな、うん」

その４３　説明は的確に（前書き）

とにかくすごい攻撃なんじゃないかい？

ｂｙアメリカ

もう今回、今までで１番短い気がします；；
許してください、明日からテストなんですぅぅぅぅぅ！！！

その４３　説明は的確に

『あいつらはさっきほのかが言った通り、いきなり我達を襲ってきたある。最初、ほのかとイタリアが狙われたあるが危機一髪、我とあへんが攻撃を防いだある』

『あれって狙われてたんだー。てっきり誤って剣落としちゃったのかとｗｗ』

『ヴェー』

んなわけねーだろ。

『で、あへんが変なことしようとしたから止めて我とほのかで二人の相手をすることにしたある。でも我は肩を切られて負傷、そこを奴らに狙われて我は大ダメージを受けたある』

ドイツ「大丈夫なのか？」

『イタリアが治療してくれたから今は大丈夫ある。で、我とほのかがピンチになった時にあへんが変身しちまったある』

おぉ、見たかったなー

『すごく腹立つあるがあへんは奴らを追い詰めていって最後になんかすごい攻撃したある』

苑子「すごい攻撃?:;どんな?」

『すごい攻撃』

苑子「わからんわ:;」

アメリカ「とにかくすごい攻撃なんじゃないかい?」

苑子「だからわかんねぇよ」

『……次いっていいあるか?』

ドイツ「あぁ、すまない。続けてくれ」

『その攻撃で起きた爆発のせいで奴らはどっか吹っ飛んじまったある。』

ロシア「だからあの二人がいつ現れるかわかんないから気をつけて、ってこと?」

『その通りだ』

いきなり中国からイギリスにかわった。

苑子「わかった!気をつけるね!」

『あぁ、それと俺の個人的なお願いがあるんだが……』

アメリカ「なんだい?」

『あの二人を……殺さないでくれないか？』

苑・ア・ド・ロ「……は？」

私達はイギリスの言葉にこんな声しか出せなかった。

その４３　説明は的確に（後書き）

～反省会～

苑子「いやみじかぁぁぁあああっ！？」

アメリカ「しゃーないしゃーない、明日から作者テストらしいんだぞ」

ロシア「テスト一日前のくせに普通投稿する？」

ドイツ「それが作者だからな」

苑子「まぁ作者もテスト終われば１話１話が長くなるかもしれないね！！」

はい、なりません。
作者は１日１話が精一杯だから！！

てことで作者は明日からテストです。
もう点数が悪いことが確定かもしれない……

その４４　イギリスの頼み（前書き）

えー、めんどくさ

一回黙ってろ

ｂｙアメリカ、ドイツ

うーん、なんか意味不な内容……

そしてギャグがない……

その４４　イギリスの頼み

黄チームが騒いでる？その頃……

遊園地の奥の方にある倉庫。真っ暗闇の倉庫の中に二つの人影があった。

「キリハ、大丈夫？」

キリカがキリハの傷に手を当てる。

「大丈夫だ、どうってことない」

キリハは体中にひどい傷を作り、青い顔をしていてもキリカには大丈夫と伝えた。

キリハは先ほどのイギリスの攻撃からキリカを庇ってもろに攻撃を受けてしまってかなり弱っている状態だった。

「しばらくここで休んでいましょう。私達は普通の人間と違って傷が治るのが何倍も早い。少し休めばすぐよくなるわ」

「ごめん……」

キリハはキリカに謝る。

「いいわよ。それにしてもあいつらホントおかしいわ……」

キリカがあの人間４人＋国８人のことを口にした途端、キリハが顔色をさらに変えたのをキリカは暗闇の中でも感じ取ることができた。

「ほんとだよ……あいつらホントにおかしいよ……！！」

「キリハ？確かにあいつらはおかしいけど……」

「性格とか戦い方のこととかじゃないんだ」

「え？」

キリカはキリハがいるであろう場所を見る。

「あいつら……俺達を倒す、とは言っても殺すとは一言も言わないんだ……！！なんでだ？殺さなきゃここから出られないんだぞ？なのに倒すって……」

「キリハ！！」

だんだん声を荒くするキリハの名をキリカが呼ぶ。

はっきりとした声で。

「ご、めん……」

「落ち着いて。あいつらが私達を殺さないでいてくれると思ってるの？そんなわけないわ。人によっては倒すってことは殺すってことなのよ」

「うん……そうだよね……」

キリハはそれきり喋らなくなってしまった。

『確かに……あいつらは私達を殺すとは言わなかった……。でもだからって私達を助けてくれるわけないし……』

キリカはため息をついた。

『人間は……信用できないのよ……』

苑子「殺すな、ってどうゆうこと？」

『そのままの意味だ。奴らを殺すな』

ロシア「でもあの子達殺さないとここから出られないんだよ？」

ロシアの言葉にイギリスは言い返せなくなってしまう。

『……話し合えば奴らだってわかってくれるはずだ』

アメリカ「えー、めんどくさ」

ドイツ「一回黙ってろ」

アメリカ「……」

ドイツに睨まれアメリカは黙ってしまう。

隊長怖いです。

ロシア「でもなんで?彼女達を殺しちゃいけない理由でもあるの?」

『そ、れは……』

イギリスがまた黙ってしまう。

うーん、なんかよくわかんないけど……

苑子「わかった!キリハ達は殺さない☆」

ドイツ「苑子!?」

『いいのか?』

苑子「うん!ぶっちゃけ殺すのとか無理だし、なんかそっちの方が私的には楽かなー♪」

めんどくさいしね。

あとなんかこのままだとずっとシリアスっぽくなっちゃいそうだし。

『そうか、すまない』

苑子「ううん！大丈夫！！んじゃ、じゃばにー☆」

私はそう言って電話を切った。

アメリカ「本当にいいのかい？」

苑子「うん！だってあの二人、本当に私達を殺したいなんて思ってないしー」

ドイツ「え？」

苑子「だから殺すのかわいそうだからさ！！私はそこまで鬼じゃないさ☆」

私はニカッと笑った。

その４４　イギリスの頼み（後書き）

～反省会～

ほのか「つかなんで電話で話してることアメリカ達にもろ聞こえてるの？」

苑子「え？なんかあるじゃん、携帯の電話の機能で。周りの人にも聞こえるように音声でかくすんの」

なつじ「あー、あるねー」

さいほの「つか薮崎意外に携帯使いこなせてるな」

苑子「あー、それはね。出番ないとき歩きながらとかずっと携帯いじってたからｗ」

ほ・さ・な「女子高生かお前は」

その４５　グッパでチョキを出す人は大体バカ（前書き）

返事したらしたでバカだけどね

ｂｙロシア

またまた短いです
テスト終わった……

その45　グッパでチョキを出す人は大体バカ

イギリスは携帯を閉じて私に返してきた。

ほのか「苑子達、なんだって？」

イギリス「わかった、ってさ」

中国「よくイギリスの頼み聞いてくれたあるな。普通敵を殺すなと言ってハイそうですか、って言う人いねーある」

ほのか「それがあっちのチームにはいるんだなぁ」

中国「？」

イタリア「苑子ちゃんのこと？」

ほのか「そ。苑子は1番早くにあの二人が私達と戦うのを拒んでるってわかった人だもん」

苑子はいつもあんなんで馬鹿だが、妙なところでめちゃくちゃ鋭い。

ほのか「イギリス、それ知っててあのチームに頼んだんでしょー？」

イギリス「まぁ……そうだな。あっちには苑子がいるしアメリカとドイツとロシアもいる。俺はあいつらが何とかしてくれる気がす

るんだよな」

イギリスは少し笑いながら言った。

ほのか「じゃあ一応私達も援護するとしますかっ！ほかのチームと合流しよー！」

私はそう言って走り出した。

苑子「キーリハァァアア！！キーリカァァアア！！いたら返事してぇぇえええ！！」

ドイツ「普通返事しないだろ」

ロシア「返事したらしたでバカだけどね」

私達は今、爆発で飛んだキリハとキリカを探している。黒須達のチームはあっちから来たらしいけど今はあの二人も怪我してるだろうし時間もないってイギリス言ってたから私達であの二人を探すことにした。

やっと隠れんぼっぽくなってきたな……

アメリカ「手分けして探さないかい？」

ロシア「いつ来るかわかんないのに危なくない？」

ドイツ「確かにそうだな……しかし時間もないことだし一回手分けして探そう。」

苑子「ＯＫ！！んじゃあグッパね！グーッパ！！」

私はグー、ドイツはパー、ロシアはグー、アメリカはなぜかチョキ

苑子「いや何チョキ出してんの！！グッパだっつの！！」

アメリカ「え、ダメなのかい？」

苑子「ダメだよ！！グーかパーだけなの！」

アメリカ「そうなのかい！？」

ドイツ「アメリカ、お前グッパ知らないだろ」

アメリカ「うん」

あっさりと答えるアメリカ。

苑子「知らなかったんかい」

ロシア「じゃあもうアメリカくんはドイツくんと一緒でよくない？」

ドイツ「そうだな。行くぞアメリカ」

アメリカ「待ってくれよ！！」

さっさと行くドイツをアメリカが追いかけた。

取り残された私とロシア。

ロシア「んじゃ行こうか苑子ちゃん」

苑子「え、あ、うん」

ロシアは笑顔で私に言った。

私、生きて帰れるかなぁ……

ヘタしたら殺されると怯えながら私はロシアの後をついていった。

その４５　グッパでチョキを出す人は大体バカ（後書き）

～反省会　（作者の）～

ぬわぁぁぁああ！！やめてぇぇ！！分かれて行動せんといてぇぇ！！話をややこしくしないでぇぇ！！

さいほの「うるせぇよ。つか話ややこしくしたの誰でもないお前だろ」

さーせん（・ω・、）

なつじ「１１月中に終わらなかったね」

さーせん（・ω・、）

ほのか「反省してないでしょ」

さーせん（・ω・、）

苑子「その顔文字結構気にいってるでしょ」

さーせん（・ω・、）

四人「あんま調子のってっとぶっ殺すよ?」

……さーせん（・ω・、）

その４６　お化け屋敷は誰だって怖い……はず（前書き）

し、死なない程度にね……

ｂｙ苑子

ロシアと苑子しか出ません！！
ロシアの性格がわからない……

その４６　お化け屋敷は誰だって怖い……はず

私はロシアとひたすら歩いていた。

苑子「いないね、二人」

ロシア「どこか目立たない場所に隠れてると思うなぁ」

あれ、ロシアいつのまに水道管持ってる。
殺す気満々やん、どうしよう。

苑子「あ、あの二人殺さないでね」

ロシア「うん？あぁ殺さないよ。僕だってそんなひどいことはしないよー」

ロシアは笑顔で言う。
笑顔で言うところが逆に怖いっす。

ロシア「でも僕達の言うこと聞かなかったらちょーっと痛いことしなきゃいけなくなるけどねー♪」

逃げてぇ！！キリハとキリカ、マジ逃げてぇ！！

苑子「し、死なない程度にね……」
こう言っとけばたぶん大丈夫……なはず。

ロシア「あ、なんかこことか怪しくない？」

そう言ってロシアが指差したのは少し古びた建物だった。

苑子「おぉ！！確かに！でも入口のとこの看板に『お化け屋敷』って書いてあるんだけd……」

ロシア「さー行こー♪」

苑子「えっ！？ちょ、ぎゃあああぁぁぁぁ……」

私はロシアに腕を掴まれて無理矢理、建物（お化け屋敷）に引きずり込まれていった……

苑子「ぶぇっくしょいこんちくしょー！！ホコリっぽいね、ここ」

ロシア「もうちょっと女の子らしいくしゃみできないの？おじさん？」

ロシアに冷ややかな目で見られてしまった。

中は真っ暗でほこりっぽかった。もしかしたらお化けが出るかもし

れないと思っていたから少し安心した。

苑子「ロシア、なんか電気持ってない？」

ロシア「ロウソクとマッチならあるよ」

ロシアはマッチをすって火をつけ、ロウソクにともした。
ロシアはそれをロウソクをたてる専用の置物？に置いて、手に持った。

ロシア「さ、行こっか」

苑子「合いすぎて怖すぎますロシアさん」

ロウソクとロシアとお化け屋敷が妙に合いすぎてめちゃくちゃ怖かった。

苑子「ここの遊園地ってなんなのかな？」

ロシア「あの二人が作った物だからねー、わからないや」

ロウソクの明かりを頼りに私とロシアはお化け屋敷を進んでいく。

ガタッ

苑子「ぬぉわっ！？」

い、今どこからか物音が……

ロシア「あ、ゴメン。ちょっと物倒しちゃった」

苑子「な、なんだ……」

びっくりしたぁ……

すごく安心してる私をロシアがじっと見つめてきた。

そんなに見つめられたら照れるじゃないかｗｗ

ロシア「もしかして苑子ちゃん……こういうの苦手？」

苑子「え、いや！？ちょっとこういう感じの所来ると体が拒絶して……」

ロシア「そういうのを苦手っていうんだよ？」

苑子「マジでか」

私、お化け屋敷苦手だったのか！！

ロシア「驚きだなぁ。苑子ちゃん、なんも怖いものないと思ってた」

苑子「な、失礼な！！私だって苦手なものくらいあるよ！！」

ロシア「そーだよねー♪」

ロシアは笑った。

しかしまさか私がお化け屋敷苦手だったとは……

なつじ達に知られないようにしよう……

やがて私とロシアはお化け屋敷の出口に来た。

結局なんもなかったな……

ロシア「別の所探そっか」

苑子「いえっさー！」

お化け屋敷から出ると私とロシアはまた遊園地を歩きだした。

その４６　お化け屋敷は誰だって怖い……はず（後書き）

～反省会？～

という名のロシアと苑子がお化け屋敷にいるときのドイツとアメリカ。

アメリカ「ドイツ！あそこにアイスクリーム屋が……」

ドイツ「行く必要はない」

アメリカ「ドイツ！！ジェットコースターに……」

ドイツ「遊ぶな！というか動かす奴がいないなら意味ないだろう！」

アメリカ「ドイツ！！携帯がなんかおかしくなっちゃったんだぞ☆」

ドイツ「壊すなぁぁあああ！！」

イタリアといるときと同じくらい胃が痛むドイツであった。

その４７　人探しは慎重に（前書き）

よっし北だ！！

ｂｙ苑子

短い……

そしてまた苑子とロシアしか出番がない……

その４７　人探しは慎重に

あの二人をロシアと探し始めてどれくらいたっただろうか。
いくら探しても二人は見つからなかった。

苑子「あぁー、もう疲れたぁ……」

ベンチに腰掛けてため息をもらす。

ロシア「うふふ♪早く出てこないと……」

ロシア、笑ってるけどキレる寸前なんだろうな……
怖ぇ……

苑子「こーなったら奥の手使うしかないかぁ……」

ロシア「奥の手？」

苑子「ん！」

私は地面に落ちてる木の棒を拾って手で支えながら地面にたてた。
棒をたてていた手を離すと棒は傾いて北の方向に倒れた。

苑子「よっし北だ！！」

ロシア「え、今のが奥の手？」

苑子「うん」

ロシア「こんなので見つかるの？」

苑子「さぁ？」

だってあんなの占いみたいなもんだし。

苑子「まぁ何事も運だよ、運！！さぁレッツゴー！」

私とロシアは北の方向に歩いていった。

しばらくするとある建物の前にたどり着いた。

苑子「ここにいる！！はず！」

ロシア「曖昧すぎるよ」

私は建物の扉を押した。

ギィッ、と音をたてながら扉は開き私とロシアは中に入った。

苑子「うっわ、また真っ暗だよ。電気ない？」

ロシア「ロウソクならあるよ？」

苑子「怖いからやめてね」

私は電気のスイッチがないか壁を触る。

そしたらなんかそれらしきものがあった。

苑子「お、これかなっ」

スイッチを押すとパッと建物の中が明るくなった。

苑子「おー、ついたついた」

ロシア「倉庫みたいだね、ここなら確かにいそうだね」

苑子「いやぁ、たぶんいないと思うよ？だってあれ半分勘だし……」

私はそこでしゃべるのをやめた。
あるものを見つけたからだ。

苑子「……ロシア」

ロシア「？」

苑子「勘……当たっちゃいました」

私の目線の先にはよりそって寝ているキリハとキリカがいた。

その４７　人探しは慎重に（後書き）

～反省会？～

その頃のドイツとアメリカ、パート２

アメリカ「あの二人、見つからないんだぞ……」

ドイツ「そう簡単には見つからんだろう」

グウゥゥ……

アメリカ「お腹……空いたんだぞ……」

ドイツ「我慢しろ」

アメリカ「お腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いた」

ドイツ「うるさい！！わかったから！」

アメリカ「なんかくれるのかい？」

ドイツ「あぁ、さっき……」

そう言ってドイツはアメリカの手に何かを置いた。

ドイツ「イギリスからもらったスコーンだ」

アメリカ「こんなの餓死する寸前でもいらないんだぞぉぉぉおお！！」

ドイツ「あぁ！！」

アメリカはスコーンを思いっきり投げた。

イギリス「ったくあいつらどこにっ」

コツーーーンッ

イギリスの頭にスコーン直撃☆

ほのか「（ ゜▽ ゜）」

イタリア「（゜ ゜ ；）」

中国「（´ Д`；）」

その４８　寝てる人は起こさないように（前書き）

拷問でもするの？

しないから！！

ｂｙロシア、苑子

短いですよー……

その４８　寝てる人は起こさないように

ロシア「うわぁ本物だぁ」

ロシアが珍しいものを見つけたように興味津々な様子で二人の顔をいじってる。

苑子「起きちゃうからやめて！！」

ロシア「えー」

せっかく寝てるのに！

苑子「今のうちに縄とかで縛っとこっか」

ロシア「拷問でもするの？」

苑子「しないから！」

さりげに恐ろしいからやめてほしいわ……

苑子「縄ない？縄」

ロシア「縄は持ってないなー」

持ってたら怖いわ。

苑子「倉庫だからあるかな？ロシアそっち見てみてくんない？」

ロシア「わかったー」

私とロシアは手分けして縄を探すことにした。

なんかごちゃごちゃしててわかりづらー……

苑子「ロシアー、なんか見つかった？」

ロシア「……」

ロシアに話し掛けたが返事がない。

あれ、無視？私なんかしたかな。

苑子「ロシア？」

その時、首に何が冷たい物が当たった。

あれ、これよくありげな……

なるべく冷たい物が肌に触れないようにしながら後ろを見た。

「よぉ、何してんだ？」

そこには笑顔のキリハがいた。
私の首に当てられていたのはキリハの剣。
やべ、これとてつもなくやばい状況じゃね？

苑子「あ、おはよーございまーす……よく眠れましたかー？」

「おかげさまでぐっすりだ。お前らが来なければもうちょっと眠れたんだけどな」

苑子「あ、起きちゃいましたか。いつから？」

「電気がついたくらいからかな」

苑子「最初から起きてたじゃねーか」

首に剣を当てられてるから自由に動けない。

「キリハ、そっちはどう？」

「あぁ、いたぞ」

向こうからキリカの声がしてそっちを見てみると、私と同様、首に剣を当てられたロシアとキリカがいた。

ロシア「いきなり来るなんて卑怯だね」

「卑怯でも私達はお前らを殺さなきゃならないのよ」

そういうキリカの表情はかたかった。

その４８　寝てる人は起こさないように（後書き）

～反省会～

苑子「ピンチだから助けに来てくんない？」

ほのか「ここで頼んでこないでよ」

なつじ「ロシアいるから大丈夫じゃね？」

苑子「なんでもかんでも人に頼っちゃいけないと私は思うんだ！！」

さいほの「知らねーよ」

その４９　絶体絶命？（前書き）

ＨＥＲＯの登場なんだぞ！！

ｂｙアメリカ

その４９　絶体絶命？

今私たちは絶体絶命のピンチに陥っている。

なんでかって？

前の話を見ていただきたい。

とにかく絶体絶命のピンチなんだけど、なんだかんだ言って私まだ死にたくない。

苑子「み、見逃してくんない？」

「するかアホ」

睨まれた……

「まずお前らをここで殺してあとで戸惑ったあいつらを殺してやるよ」

苑子「ヘルプ！！ヘルプミー！！」

「黙れ」

苑子「私にはまだ明るい未来がぁぁあああ！！」

「なんか明るいっつーか暗い未来になってそうだぞ」

苑子「ひでぇ！！」

そんなこと言わなくても！

苑子「ど、私達どんなかんじで死ぬの？」

「首ちょんぱ」

苑子「もうちょっとましな死に方させてぇぇぇえええ！！」

一番嫌な死に方ぁぁぁあああ！！！

「！あなた、マフラー取りなさい」

キリカがロシアに言った。

ロシア「えー、嫌だよー。だってこれ体の一部だもん」

体の一部！？

「そんなのしてたら首切れないじゃない！外しなさい！」

ロシア「しつこいなぁ。嫌って言ってるでしょ」

「っ！！黙りなさい！」

キリカが声を荒くする。

「今すぐ殺すわよ！」

ロシア「やってみなよ。まぁ僕は死なないけどね」

苑子「どゆこと？」

ロシア「そろそろかな」

ロシアが目を閉じた。

その時、倉庫の天井の近くにある窓を割って二つの人影が入ってきた。

「なっ！！？ぐっ……」

一つの人影から何発もの銃弾が飛んできてキリハの剣や腕に当たった。

奇跡的に私には当たらなかった。

キリハは剣を手放して血が流れる腕の傷を抑えたため私は解放された。

「キリハ！！っ！！」

キリハに近付こうとしたキリカの所にも銃弾が飛んできて所々に当たった。

傷を抑え顔を歪ませるキリカからロシアは逃げ出した。

苑子「な、な？」

ロシア「ふー、もうちょっと安全な助け方してくれない？アメリカくん」

ロシアが人影を見た。

二つの人影の正体は銃を構えたアメリカと鞭を手に持ったドイツだった。

アメリカ「ＨＥＲＯの登場なんだぞ！！」

苑子「いや遅いよ！！」

来るなら最初から来て欲しかったよ！
ちびりそうだったよ！

アメリカ「ＨＥＲＯは遅れて登場するもんなんだぞ」

苑子「知るか！！」

無駄にテンションが高いアメリカを怒鳴る。

苑子「つか私やロシアに銃弾当たったらどうすんだよ！死ぬよ！？」

アメリカ「俺は百発百中の腕前を持ってるから心配ナッシングなんだぞ！」

ドイツ「ほとんど適当だったけどな。当たらなかったのは奇跡だ」

危なかったぁっ！！

「な、なぜ……ここが……！！」

キリカが苦しそうに言う。

ロシア「これだよ」

ロシアがマフラーを外し、マフラーの裏側を見せた。

裏側には小さい四角形の物がくっついていた。

苑子「何それ？」

ロシア「ＧＰＳ（ジーピーエス）だよ。もしもの時のため、ってドイツくんがつけてくれたんだー」

ロシアがＧＰＳを取ってからまたマフラーを首に巻いた。

ドイツ「それのおかげでロシアの居場所が携帯に届いて来るんだ。それでロシアの居場所が長時間変わってないからおかしいと思って来てみたんだ」

ドイツが携帯を開き画面を見せる。

今いる倉庫の所で赤い点が光っている。

苑子「すげぇ！！ロシアとドイツナイス！！」

ロシア「うふふ、ありがとう♪」

アメリカ「俺は！？俺は！？」

苑子「褒める所がない」

アメリカ「なんでだい！！？」
アメリカが口を尖らせる。

「っくそ！！ふざけんな！！」

キリハが落ちた剣を拾い、私達に向かって投げてきた。

苑子「あぶねっぴ！！」

ドイツ「ぴ？」

剣はなんとか避けた。
でもキリハから限りなく殺気が出ている。
話し合うなんて状況じゃない。

「ぶっ殺してやる！」

「キリハ！落ち着きなさい！」

キリカがキリハに言うがキリハは聞く耳をもたない。

苑子「わわ、どうしよう」

ドイツ「外に出るぞ！」

苑子「なして！？」

ドイツ「出ればわかる」

私達は倉庫の扉を開けて外に出た。

「にがすか！！どうせ外に出たってたった四人だ！生きられると思うな！！」

キリハが叫びながら私達の後を追ってきて外に出てきた。

さいほの「“四人”じゃないよ？」

ほのか「数も数えられなくなったのかな？」

なつじ「ははは、バーカバーカ！！」

「なっ……！！？」

外に出たキリハとキリカを出迎えたのはこの異空間に連れて来られた世界を救う存在、全員だった。

その４９　絶体絶命？（後書き）

～反省会～

ほのか「なんかやっと次からドワァーッと来そうだね！」

さいほの「ドワァーッって何？」

ほのか「なんかあれ、ブワァーッと！」

なつじ「わからねぇよ」

ほのか「まぁ簡単に言えば最終決戦ってことだよ」

さいほの「最初からそう言えよ」

苑子「というわけで次回から最終決戦突入！！私達は二人を説得できるのか！そして私達の運命は！！？次回をお楽しみにー！」

ほ・さ・な「何お前が最後にまとめてんだよ」

というわけで最終決戦開始です！！

その５０　最終決戦開始（前書き）

えとー……どゆこと？

知らんかったんかい

ｂｙ苑子、ほのか

ついに最終決戦開始です。

その５０　最終決戦開始

「き、貴様ら……！！なぜここが……！！」

さいほの「これだよ、これ」

さいほのが携帯を取り出す。

なつじ「さっきドイツから全員にメールが送られてきてねー。こんな画像がはりつけてあったんだよー」

なつじは画面を見せる。

画面にうつっているのは地図のようなものに赤い点がある場所にポツンとおかれた画像だった。

ほのか「最初はなんだかわかんなかったけどイギリスが地図じゃね？って」

イギリス「どこからどう見ても地図だろ」

苑子「でもよくこの遊園地の、って気付いたね」

イギリス「そりゃそうだ。よく見ろ」

苑子がなつじの携帯の画面にうつる地図をよく見てみる。

苑子「あ、これ……」

日本「そうです。ご丁寧に周りにある遊園地の乗り物の名前が書いてあるんですよ」

日本が静かに笑いながら言った。

「こんなときだけチームワーク抜群ね」

キリカがキリハの隣で言う。

さいほの「まぁほとんどドイツのおかげだよね」

イタリア「さすがドイツー！」

ドイツ「い、いや……俺は別に当然のことを……」

ドイツが顔を赤くしてそっぽを向く。

これがムキデレというやつか！！

なつじ「黒須、顔に出てるよ」

苑子「そういうなつじもにやけてるよ」

ほのか「お前もな」

なつじも苑子もにやけている。

ムキデレは偉大だ。

「っくそ……勝負だ！！正々堂々と！！どちらかが死ぬまでな！！」

苑子「えっ、ちょっ、私達は話し合いに……」

「うるさい！！」

イギリス「話を聞け！！俺達はお前らを殺したくないんだ！」

「……は？」

剣を振り上げたキリハが眉間にしわをよせた。

「……どういうこと？」

キリカがやけに真剣な表情で聞いてくる。

苑子「えとー……どゆこと？」

ほのか「知らんかったんかい」

さいほの「え、なんの話？」

なつじ「私も知らない」

そういえばさいほのとなつじ達に連絡すんの忘れてたｗｗ

イギリス「おっ、俺達はお前らを……ってこれ違うからな！お前達のためじゃない、全て俺のためなんだからな！勘違いすんなよ！」

こんなときにツンデレだされてもぶっちゃけめんどくせぇ。

誰かかわりに説明してくんないかな。

私はめんどいからやんないけど。

苑子「私がかわりに完ぺきに説明しようっ！」

嘘つけぇいっ！！

お前さっきまでわからなかっただろーが！！

苑子「まぁ予想だけどー」

フランス「予想かよ」

やっぱりな。

苑子「やっぱ二人とも戦いたくないんじゃないかなーって」

「……！！」

「はぁ！？何を言ってるんだよお前！」

キリハは反発したがキリカは目を見開き驚いた表情になった。

つか苑子の予想ビンゴやん。無駄にすげぇな、無駄に。

苑子「そのまんまの意味だよー！！」

苑子が陽気に答える。

あれ、ここってシリアスにすべきところじゃないの？

「俺はそんなこと、思ってない！でたらめを言うな！！」

苑子「そうなの？」

「当たり前だ！俺達はボスに命じられて……！」

中国「それっていやいやじゃねーあるか？」

中国がキリハに聞く。

ロシア「確かにー。ボスに命じられて仕方なくやってるんじゃないの？」

「そっ、そんなこと……」

キリハはうまく返せなくなってしまった。

アメリカ「なんか戦わなくちゃいけない理由でもあるのかい？」

「！！！！！」

このアメリカの質問にはキリハではなくキリカがかなり反応した。

しかしキリハは表情を変えて、

「うるさい！とにかく勝負しろ！！俺達はお前らを殺すんだぁぁぁあ！！」

キリハはそう叫んだ。

苑子「説得力なかったかな？」

なつじ「そういう問題じゃないと思うよ？」

そして、ついに最終決戦が始まった。

その５０　最終決戦開始（後書き）

～反省会～

ほのか「ついに始まったね、最終決戦」

さいほの「ここまでくそ長かったね」

なつじ「いや長すぎじゃね？」

苑子「それよりね、最終決戦が始まったのもめでたいことなんだけど「めでたくねぇだろ　（さ）」ほかにもめでたいことがあるんだよ！！」

ほのか「何ー？」

なつじ「私が初めてみかんを食べた日？」

さいほの「知らねぇよ。てかめでたくねぇだろ」

苑子「ちゃんと今回の話のタイトルを見たまえ」

ほのか「ん？あ……」

なつじ「いつのまに！」

さいほの「第５０話だ……」

苑子「ザッツライト！！てことでついに５０話突破いたしましたー！！ひゅーひゅー！」

なつじ「ついこの間３０話突破ー！って喜んでたのにね」

ほのか「作者にしては珍しく仕事が早いな」

さいほの「勉強しろ勉強」

苑子「まぁそれだけ」

ほ・な・さ「冷めるの早っ！！」

ということで５０話突破。

まさかここまで続くとは……

作者も驚きです；；

その５１　戦いの相手（前書き）

クズちゃう！！バカや！！

ｂｙ苑子

話が進まん！！ｗ

その５１　戦いの相手

イギリス「お前らは戦いに参加するな」

イギリスが私達四人を見て言った。

苑子「な、なして！？」

なつじ「イギリス達だけで戦うの？私達も戦うよ！」

さいほの「私はめんどくさいから別にいいけどな」

ほのか「私もー」

やる気なさすぎだよコイツら。

日本「危険ですし、それに……」

中国「今のお前らには戦いは厳しいある」

ほのか「厳しい？」

ロシア「あの二人を殺したくない、そうしか思えなくなって隙をつかれるからかな」

なつじ「う、うぅ……」

私達は言い返せなくなってしまう。
確かにそうかもしれないな……

なつじ「……わかった……」

私は戦いたい気持ちを抑えて言った。

苑子「えーやだやだやだ！！」

空気よめＳＫＹ！！
珍しく私がシリアスに……

さいほの「薮崎ー、みんなが戦ってる間みんなでクッキー食べようかー」

苑子「みんな死ぬなよ！！がんば！！」

なんなのコイツ。

イタリア「お、俺も……」

ドイツ「お前も戦えイタリア！！」

イタリア「ウヴェー；；」

中国「つかあいつら力の加減知らないからあの二人普通に殺しちゃう確率大ある；；」

フランス「た、確かにな……」

聞こえてるからな。
私だって力の加減くらい出来るわアホ！！

「話は終わったか？」

イギリス「あぁ。俺達が相手をしよう」

イギリスを先頭にして七人が、イタリアが少し戸惑い気味に前に出る。

「ふっ」

あれ、今笑った？鼻で笑ったよね？うざいんだけど。

「ただでさえ少ない戦闘力を減らす？ふざけるのも大概にしろ」

さいほの「私達もともと戦闘力になってないんで問題ナッシーング☆」

ほのか「そんなはっきり言うと泣けてきたわ」

なつじ「つか明らかにお前ら二人の方が人数的にも少ないだろーが。小学生からやり直した方がいいよ？」

「俺達は戦闘力がすごいからな。戦車が１００台あっても足りな…

……いやちょっと多いかな。さすがに１００台は……」

なつじ「自信なさすぎだろ」

苑子「てゆうかさっき思いきり追い詰められてたよねｗ」

「うっさい！！」

つかキリカ空気ｗｗ

「とりあえずっ！まずお前らから殺してからそっちのクズ共四人も殺してやるからな！！」

ほのか「クズっつったよね？今クズっつったよね？」

ほのかがキレる寸前になる。

苑子「クズちゃう！！バカや！！」

さいほの「そこ、自信もって言う所じゃないから」

自分で言っちゃうんだ。

自覚あるんだね、一応。

「おりゃぁぁあああ！！！」

いきなりぃぃぃぃ！！？

こ、こうして

キリカ、キリハＶＳ国８人

の戦いは始まった……。

その５１　戦いの相手（後書き）

～反省会～

「？ここは……」

ほのか「やっほぅキリカ！！」

「な、お前ら！なぜ……」

さいほの「ここは後書きという名の反省会……あれ？反省会という名の後書き？」

なつじ「どっちでもいいだろ」

「とにかくなぜ私がここに？」

苑子「今回の話の本編でまっっっったくしゃべってないからだよ☆」

「は？」

ほのか「つまりキリカの出番がないからこの反省会で出させてあげよっかなーという作者の考えです」

「なるほど！」

なつじ「納得するんだ」

さいほの「あ、でももう時間ないから終了ね」

「え!?ちょ、まだ何もしゃべってｎ……」

というわけで出番がないキリカさんでしたｗ

その５２　戦い観戦中（前書き）

英語ワカリマセーン！

ｂｙほのか

それほど長くないです。

そして後半シリアスです！

その５２　戦い観戦中

今現在、八人　（若干一名白旗振ってるが）がキリハとキリカと戦っていた。

あんなに自信はあったがやはり何回も戦ってそのたびに怪我をしたせいか二人はおされていた。

ほのか「暇だよさいほのー」

さいほの「戦うよりはましだろ」

苑子「さいほのっ！クッキー♪」

なつじ「覚えてたのかよ」

さいほの「あー、あれ嘘だから」

嘘、と言った途端薮崎は石化した。カチンコチンだ。

苑子「な……」

さいほの「だーかーらー。嘘。う・そ！！英語で言うと……何？」

なつじ「知るか！」

ほのか「英語ワカリマセーン」

さいほの「ミートゥー（Ｍｅ　ｔｏｏ）！！」

なつじ「うざいんだけどこの二人殴っていい？」

さいほの「暴力へんたーい」

なつじ「反対だろ。いい加減にしないと息の根止めるからね」

拳を固めてプルプルと震え出したからなつじをからかうのはとりあえずやめにしよう。

苑子「ク、クッキー……」

ほのか「まだ気にしてんのかよ。私ポケットにガム入ってたけど食べる？」

苑子「食うーー！！」

ほのか「ん」

黒須がポケットからミント風味のガムを出し、中から一枚取り出して薮崎に渡した。

薮崎はそれを嬉しそうに受け取ると包み紙を取って口に入れた。

苑子「……辛いぃいいい！！」

ほのか「眠気覚まし用の強い奴だからねー」

さいほの「いいなー。黒須、私にもちょうだい」

なつじ「あ、私もー」

ほのか「あいよー。私も食べよー」

イタリア「俺もちょうだい！！」

さいほの「なんでいるんだよ」

イタリア「ちょっと疲れたからー、えへへ」

なつじ「戦ってこい」

イタリア「ヴェー；；」

ヘラヘラと笑いながら来たイタリアを戦場に返し、私はガムを口にいれた。

苑子「それにしても、くちゃくちゃ、暇、くちゃくちゃ、だねー」

なつじ「くちゃくちゃうるさいし汚ぇからやめろ！」

苑子「えー、くちゃくちゃ、だってー……」

ほのか「もういいしゃべんな」

苑子「くちゃくちゃくちゃくちゃ……」

なつじ「黙っててもうるせぇぇえ！！」

苑子「ぬごぁぁああ！？」

怒りメーターが満タンになりついに爆発したなつじが苑子に飛び蹴りをした。

まぁ怒りメーターをためた半分はおそらく私と黒須だけどね。ＨＡＨＡ☆

飛び蹴りされた苑子はキレーイに飛んでいき植木につっこんだ。

前から思ってたけど薮崎のポジションがかわいそすぎるぜ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イギリス「な、何あいつら呑気にガム食ってんだよ！！」

アメリカ「え！？ガム！？俺も食べたいんだぞ！」

ガム、と聞いた途端目を輝かせ戦いをやめてほのか達の所に行こうとしたアメリカをフランスが止める。

フランス「あー！行かないの！一応あの二人を押してるっちゃあ押してるけどそれも結構精一杯なことなんだよ！！」

アメリカ「知ったこっちゃないんだぞ！！」

中国「おめぇはあいつらに殺されればいいある！！」

中国がアメリカを中華鍋で殴った。

アメリカは頭を抑えて涙目になった。

アメリカ「何するんだい！痛いじゃないか！！」

ロシア「自業自得だよアメリカくん。反省してね？」

アメリカ「ぶー」

アメリカは渋々、銃を持ち直して構えた。

向こうは押されていて傷をいっぱい作っているがどんどん攻撃をしかけてくる。油断はできない。

ドイツ「？そういえばイタリアは……」

日本「あぁ、イタリアくんならあそこでほのかさんにガムもらおうとしていますよ」

ドイツ「な！イィタァリィアァァァァ！！！」

日本「ドイツさんも大変ですね……」

日本はイタリアの名を叫ぶドイツを見てそう呟いた。

「くっ、はぁはぁ……」

「キリハ、無理をしない方が……」

「っるさい！！」

「キリハ……」

傷をたくさんつくり、肩で息をするキリハをキリカが心配して声をかけるがキリカは自分の肩に置かれた姉の手をはらった。

今戦ってる相手達は言い争ったりしていて自分達の方を見ていない。

「キリハ……もうやめましょう」

「！！キリカ！？」

「あの人達の言う通りよ。戦うの嫌でしょ？」

「何を……！！」

「私はもう嫌。ねぇ、今からでも遅くないから。だから……」

「黙れよ！！」

キリハが叫んだ。

それに気付き、キリハに視線が集まる。

「いちいちうるさいんだよ。お前に何がわかるんだよ！！」

「キリハ！！」

「戦いたくないならキリカはもう戦わなければいい！でも俺は戦うのはやめない！！あいつらが死ぬ、それか俺が死ぬまでな！！」

そう言い残すとキリハは剣を構えて、ドイツ達に突進していった。

「キリハ……どうして……」

キリカは下を向いたままそこから動かないで弱々しい声でずっとそう呟いていた。

その５２　戦い観戦中（後書き）

～反省会～

ほのか「後半シリアスぅぅぅう！！」

なつじ「作者によると次の話結構シリアスの予定らしいよ」

苑子「じゃあ黒須となつじ出番ないんじゃない？」

さいほの「なして？」

苑子「シリアス似合わないから？ｗ」

ほ・な「死ね」

苑子「ぎゃぁぁぁあああ！！」

ほのか「さーて邪魔者は消え失せました。話を続けましょう。」

さいほの「……（＾－＾；」

なつじ「もうすぐで終わりそうだね！！」

さいほの「作者によるとあと2～3話くらいらしいよ」

ほのか「やっとだね！！」

苑子「長かったね……」

なつじ「ちっ、生きてたか」

苑子「いや殺さないで！！つかなんの話してたの？」

ほのか「さーて次回もお楽しみにー」

苑子「無視すんなぁぁあああ！！」

その５３　崩れゆく姉弟の絆（前書き）

俺の出番はここで終わりかよ！！

ｂｙアメリカ

すっっっごくシリアスな気がします。たぶん。

もう日付変わっちゃいましたががんばって更新しました！！

その53　崩れゆく姉弟の絆

フランス「な、なんだ？仲間割れか？」

キリハがキリカを怒鳴っているのを見てフランスが呟く。
イギリスとちょっとした　（？）言い争いをしていたフランスは突然、キリハの怒鳴り声が聞こえてきて二人の様子をずっと見ていた。
フランスだけじゃない。
さっきまでフランスと言い争いをしていたイギリスや、そのほかの様々なことをしていたドイツや日本達もキリハとキリカのことを見ている。

ほのか達もだった。
驚いた顔で二人を凝視している。

やがてキリハのみが両手に剣を握って8人の国の所に突進してきた。

中国「おぉ！？」

キリハが狙いを定めたのは中国だった。
中国は中華鍋でキリハの剣を防いでいる。

中国「い、いきなり来んなある！！心臓止まるかと思たある！」

中国が中華鍋でキリカの剣を防ぎながら顔を青くして叫ぶ。

しかしキリカはすぐさま防がれた剣を中華鍋から放し、中国の近くにいたアメリカに標的を変えた。

振り下ろされた剣を避けてアメリカは銃を連射した。
キリカはそれを全て避けてアメリカの隣にいた日本に剣を向けた。

アメリカ「俺の出番はここで終わりかよ！！」

イギリス「そこかよ！」

日本は剣を愛用の刀で防ぎ、今度は自分から攻撃を仕掛けた。

キリハはすぐに剣で攻撃を受け止めた。

キィィン！！と金属のぶつかり合う音が辺りに響く。

日本「次々と標的を変えるとは……なぜそんなことを……」

日本が刀を押しつけながらキリハに問う。
キリハは黙ったままだ。

日本は黙ったままのキリハをしばらく見た後、今以上の力でキリハの剣をはらった。

「あっ……」

油断をしていたのかキリハの手から簡単に剣がすべって、飛んでい

った。

苑子「あぶねっぴ！！」

さいほの「ぴって何？」

剣はガムをくちゃくちゃと音をたてながら食べていた苑子の近くにささった。

動揺しているキリハの首に日本は刀を当てた。

日本「諦めたらどうですか？そちらはもう一人。８……７対１では必ずと言っていいほど勝ち目はありませんよ」

ほのか「今なんで７に減らした」

ほのかが呟く。

「……るさい」

日本「？」

「うるさいうるさいうるさい！！お前ら見たいなバカはおとなしく殺されればいいんだよ！なのにいつまでも……うざいんだよ！！」

キリハが叫んだ。

その言葉を聞いてロシアがキリハの前にやってきた。

ロシア「どうして仲良くできないの？」

そう言うロシアの声はいつもみたいに無邪気じゃない。
今回は顔もまったく笑っていなかった。

ロシア「そんなこと言う子、いらないよね？」

ロシアは手に持った水道管をキリハに向かって振り下ろそうとしている。

なつじ「ロシア！！」
なつじがロシアに向かって叫ぶがロシアは聞く耳を持たない。

ロシアはそのまま水道管を振り下ろした。

苑子「しーんけーん……」

突然、キリハの前に誰かが現れた。

苑子「しらはどりっ！！」

現れた人物……苑子はそう叫びながら見事ロシアの振り下ろした水道管をおさえた。

キリハやロシア、ほかの人までもが苑子の行動を理解できずにいる。
ずっと下を向いていたキリカも顔をあげてその光景を見つめていた。

苑子「もーロシア、ダメじゃん」

苑子が水道管を放しながら緊張感のない声で言う。

苑子「イギリスと約束したでしょ？殺しちゃダメだって」

苑子は優しく笑った。

その５３　崩れゆく姉弟の絆（後書き）

～反省会～

ほのか「……」

なつじ「……」

さいほの「……なんで二人共そんなにテンション低いの？」

苑子「私の言う通り出番なかったねっ☆」

さいほの「あぁ、それか」

ほのか「もうほんとマジでさぁ、この話で一回しか喋ってないってどうよ？」

なつじ「まじありえんしー」

さいほの「そ、そんなこと……」

ほのか「そんなこと！？そんなこととはなんだ！」

さいほの「いやぶっちゃけ私も一回しか喋ってない気が……」

ほのか「！！！？（ ゜д ゜）」

なつじ「！！！（・д・）」

苑子「（´∇`？）」

さいほの「え？え？」

ほ・な「仲間だ！！」

さいほの「なんかうれしくねぇぇぇええ！！」

その５４　決着?の時（前書き）

デコピン?あ、違うわ。アッパーだ!!

ｂｙ苑子

ついに決着?がつきます!

すこーし長めです。

その５４　決着？の時

「お前……どうして……」

キリハが驚いた顔で自分の前にいる苑子に聞く。

苑子「ん？どうしてって、イギリスが言ってたから……」

苑子が振り返って笑顔で言った。

苑子「それにさ、やっぱ殺すのはかわいそうかなーって思って」

ロシア「……」

「でも俺達を殺さないとここから出られないんだぞ……？もう時間はない、やるなら早くやったほうが……」

その時、苑子がキリハの頬を思いっきりはたいた。

苑子「苑子ビンタ！！」

「ぐほぁっ！！？」

もともと力が強い苑子のビンタだ。

殴られた頬をおさえてキリハは涙目になりながら叫んだ。

「な、何するんだよ！！キリカにも殴られたことないのに！！」

ほのか「古っ！！どこのロボットのパイロットだお前は！」

苑子「だまらっしゃい！！私達は君達を殺したくないんですよ！！ＯＫ？」

「ノー！！」

苑子「苑子ビンタ！！」

「またっ！！？」

「何がしたいのよあなたは……；」

キリカが苑子とキリハのもとに呆れ顔でやってきた。

苑子「自分達を殺したくない人殺しちゃったら私達完全に悪者じゃん！！だから殺したくないの！」

さいほの「あ、そんな理由だったんだ。てっきり薮崎は実は優しい人間だったんだと……」

さいほのが冷めた目で苑子を見た。

苑子「い、いや！今の嘘！人は殺しちゃダメなんだよ！！うん！」

なつじ「なんかイマイチ説明できてないような……」

ドイツ「……！！やばい、あと３０分しかないぞ！！」

ドイツが時計を見てあせる。タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

もう時間がない。

苑子「それでそのー……なんというか……」

苑子が考え込む。

そして答えが出たようで人差し指をキリカとキリハに向けて言った。

苑子「私達と友達になろう！！」

「「……はぁ？」」

ほぼ全員「……え？」

イタリア「ヴェー」

その場にいるほぼ全員が聞き返した。

イタリアだけは聞いてなかったようで白旗をいじっている。

なつじ「何言ってんの苑子」

苑子「え？だから友達になろー、って……」

フランス「どういう意味？」

苑子「いやー、友達だったらお互い殺す理由なくなくない？一件落着！！」

イギリス「するか！！どうなってんだお前の頭ン中は！！」

イギリスが笑顔で説明する苑子を怒鳴る。

苑子「み、耳元で叫ばないでー……」

鼓膜ヤブレルーと目に涙を溜めて耳をふさぐ苑子。

フランス「そいつらはボスとかに頼まれてやってんの。こういう仕事しくじったらどうなると思ってんの？」

苑子「デコピン？あ、違うわ。アッパーだ！！」

ほのか「どっちもちげーよ！！答えから掛け離れすぎだ！！」

さいほの「そんなかわいいもんで済んだらこいつらは苦労しないわボケェ」

なつじ「バカだろ。やっぱお前バカだろ」

苑子「そんなみんなで総攻撃しないでよ！！；ちょっと場を和ませたかっただけだもん！」

中国「じじぃあるかお前は」

ちょっとボケただけでも総攻撃される苑子。哀れすぎる。

ロシア「普通、命令とか聞かない部下は殺すんじゃない？そんなかんじの組織は……」

イタリア「殺すの！？」

イタリアがドイツの背中に隠れる。

ドイツ「そうとは限らないかもしろないが……可能性は高いな」

苑子「そうなのか……じゃあ友達作戦はダメか…」

「当たり前だ！！だれがお前らとなんか友達になるか！！」

ほのか「友達いなさそうなくせにｗ」

「「うるさい！！」」

二人が声をそろえて言う。さすが双子。

苑子「えー、友達だめ？」

「ダメに決まってるだろう！！」

苑子「えー、じゃあさ……」

苑子がキリハの手を取る。

突然だったのでキリハは顔を赤くした。

苑子「友達だとは思わなくていいけどさ、ただ仲良くしてほしいんだ。いい？」

苑子が笑顔でキリハの手を強く握った。

ドキッ！！

ほのか「ん？今恋愛漫画でありそうな効果音が聞こえてきたような……」

さいほの「私もだ」

日本「わ、私もです……」

なつじ「誰が誰にときめいたんだ？」

フランス「愛っていい……」

イギリス「黙れワイン野郎」

アメリカ「お腹空いたんだぞ！！」

全員、今聞こえたよくありげな音に疑問を抱いている。

キリハを見ると顔が真っ赤で上の空だ。

「キ、キリハ？」

キリカが声をかけるがキリハはそれに気付かない。

苑子「おーい、元気ー？」

苑子がキリハの手を離し、顔の前で手を振る。

「……はっ！！」

キリハはやっと現実に戻ってきて苑子から離れた。

「なななななななな」

中国「どんだけ『な』を連発するあるか」

キリハは突然、片手を上げた。

「解除！！！」

キリハがそう叫んだ途端、周りの景色が歪んだ。

なつじ「な、なっ！？」

苑子「うぷっ……気持ち悪……」

さいほの「吐くなよ、汚いから」

ほのか「私は限界……」

さいほの「うわぁぁぁああ！？耐えろぉぉぉ！！」

さいほのが必死に今すぐに吐きそうなほのかを励ます。

やがて周りの景色の歪みがおさまった。

ドイツ「ここは……」

そこは異空間に来る前……約5時間前にいたホテルのゲームセンターだった。

ほのか「も、戻ってきた……」

「キリハ……なんで……」

「こ、ここ今回は見逃してやる!!さらばっ!!」

キリハは噛み噛みでそう言い残すと姿を消した。

「あ……」

全員「……」

「め、迷惑かけたわね。じゃあ……」

キリカも消えていった。

イギリス「と、とりあえず……助かった……ってことか？」

アメリカ「ＤＤＤＤＤＤＤＤＤ！！やっぱＨＥＲＯは無敵なんだぞ！！」

アメリカが嬉しそうに叫ぶ。

なつじ「よ、よかったぁ……」

さいほの「ホントだよ……もう終わりかと思ったもん……」

なつじとさいほのがへなへなと床に膝をつく。

ほのか「ふわぁーあ……なんか安心したら眠くなってきた……」

ほのかがあくびをする。

ロシアが時計を見るともうすでに０時をまわっていた。

フランス「お兄さんもくたくただよ……」

中国「もう今日は爆睡できそうな気がするある……」

日本「では部屋に戻って休みましょうか」

全員はゲームセンターから出て、部屋に戻り眠りについた。

その５４　決着？の時（後書き）

～反省会　（主人公の部屋で）～

ほのか「あぁぁぁ……眠い……」

さいほの「ちゃんと布団かけて寝なよ。風邪引くよ」

なつじ「さいほの母ちゃん！！」

さいほの「何が言いたいのチミは」

なつじ「いやなんかお母さんみたいだったから……」

さいほの「私はまたピッチピッチの１３歳だぁぁぁあああ！！」

（さいほのは早生まれのためまだ誕生日を迎えておりません）

なつじ「はっ、私は１４歳だしぃぃ！！１番お姉ちゃん！！」

さいほの「小さいけどな」

なつじ「それを言うな！！言われると思ってたけどさ！！」

さいほの「とにかく寝よう。眠くて仕方ない」

なつじ「つかいつのまに浴衣に戻ってる……なぜに？」

ほのか「そこは気にしちゃダメだよ☆」

さいほの「じゃおやすみー」

ほのか「……」

さいほの「……」

なつじ「……」

苑子「ぐぉおおお……ぐぉおおお……」

ほ・さ・な『眠いけどうるさすぎて寝れねぇえええ!!』

三人は苑子のいびるのせいでしばらく眠れなかったという……

その５５　夏休みの終わり（前書き）

変態髭野郎が！！

なっ！？お兄さん怒ったよ！？この元ヤン紳士！！

ｂｙイギリス、フランス

夏休み編のエピローグのようなものです。

その５５　夏休みの終わり

ガタンガタン……

人があまり乗車していない電車に私達は乗っていた。

流れる風景を眺めながら私達は

大富豪をやっていた。

ほのか「おっしゃぁ！！あっがりー！！大富豪だぁぁ！！」

アメリカ「またほのかかい！？１０回中全部１０回君が大富豪だったじゃないか！いい加減大富豪の座を俺に譲ってくれよ！！」

さいほの「いやお前弱すぎなんだよ。何回最下位になってんだ」

なつじ「ほのか！私はみんなの上に立たなくちゃいけないんだよ！だから１位譲って！」

ほのか「なつじが言うとドＳ発言にしか聞こえないよ！！」

なつじ「その通りだよ！！」

イギリス「自分で言うなよ！！」

１２人だとさすがに多すぎるため私、さいほの、なつじ、苑子、アメリカでやっていた。

ちなみに私は大富豪はこういうトランプのゲームの中で１番得意だ。

てことで１０連勝中。

さいほの「あがり！」

なつじ「私もあがり」

苑子「わっちも！」

アメリカ「……」

はいアメリカ、また最下位ー。

かれこれ１０連敗中だ。

アメリカ「あぁぁ！！もうやめだよ、やめ！！」

苑子「えぇぇ！！」

アメリカはトランプを投げ出した。

ロシア「わぁ……ちゃんと片付けてよアメリカくん」

飛び交うトランプを見てロシアが呟く。

ほのか「えー、終わり？２０連勝目指してたのにー」

アメリカ「ひ、ＨＥＲＯはトランプなんか似合わないんだぞ！！プロレスごっこがやりたいんだぞ！」

さいほの「私パス」

なつじ「私もー」

ほのか「私もね」

苑子「ぐぉぉおおお……」

苑子、いつのまに寝てたのか。つかいびきうるせぇ。

アメリカ「みんなノリ悪いんだぞ！てことでイギリス！やるぞ！」

イギリス「なんで俺なんだよ！！」

アメリカが窓際でうつらうつらとしていたイギリスに声をかけた。

イギリスは当たり前のようにアメリカを怒鳴る。

フランス「いっけー！アメリカ！イギリスをぶっとばせぇー！！」

イギリス「っ！このワイン野郎！！お前も道連れだ！」

フランス「え、ちょ。お兄さんは……」

アメリカ「ＨＥＲＯキーック！！」

フランス「ぐほぁっ！！？」

アメリカの必殺☆ＨＥＲＯキックを受けたフランスはその場にゆっくりと倒れていった……

ドイツ「アメリカ……加減ってものがあるだろう……」

イタリア「ふ、フランス兄ちゃん大丈夫ー？」

イタリアは倒れてぴくりとも動かないフランスの傍に近寄ってきた。

アメリカ「これでもおさえほうだよー？５％くらい」

イギリス「ほとんど本気じゃねーか」

中国「おめぇらガタガタうるせーある！もうちょっと静かにするよろし！！」

日本「で、電車は爺にはキツイ乗り物です……うぅ」

中国がアメリカ達に怒鳴り、その隣で日本が腰をおさえている。

ロシア「わぁ、日本くん。だーいじょーぶー？」

日本「え、えぇ。なんとか……」

ロシア「もしよかったら僕が日本くんの腰にすこーしポコポコポコリン☆ってするけど「結構です！！」そっかぁ……残念だなぁ」

ロシアは残念そうな顔をした。

『次は○○駅。○○駅……』

電車内にアナウンスが響いた。もうすぐで降りる駅だ。

それぞれ荷物を持って電車を降りる準備をした。

やがて降りるべき駅に電車はゆっくりと止まり、ドアが開いた。

全員が駅のホームに降りた直後にドアは閉まり、電車は次の駅へと走っていった。

アメリカ「んー！！やっと着いたんだぞー！！」

アメリカが体をのばす。

ほのか「あっぢぃー……」

８月の下旬とはいえまだ暑い。

電車内は冷房が効いてたから余計外は暑く感じられた。

さいほの「あー早く夏終わんないかなぁ……」

苑子「ぶっちゃけ次の話では冬に……」

なつじ「しっ！！」

なつじが苑子の口をふさぐ。

イタリア「ヴェー……ドイツー、疲れたよー」

ドイツ「もうちょっとがんばれイタリア。俺達は自分の国まで帰らなくてはいけないんだから、まだまだ先は長いぞ」

日本「あ、みなさん。今日は私の家に泊まっていきませんか？」

アメリカ「いいのかい！？」

アメリカが目を輝かせた。

さいほの「疲れてるしな」

苑子「お泊りだねー！」

ほのか「フランス、変なこと考えてないよね？」

フランス「え、え！？別に何も！？」

なつじ「考えてたな」

中国「完っぺき考えてたある」

イギリス「変態髭野郎が！」

フランス「な！？お兄さん怒ったよ！？この元ヤン紳士！」

イギリス「んだとこの！！」

ロシア「二人とも、他の人に迷惑だからやめようね？」

イ・フ「……」

ロシアが笑顔で水道管を構えて言ったため二人はシュンとなっていがみあうのはやめた。

日本「では、行きましょうか」

１２人は満天の青空の下、日本の家へと足を進めた。

その５５　夏休みの終わり（後書き）

～反省会～

ほのか「夏休み編、完☆結！！」

な・そ「いぇーい！！！」

さいほの「いやぁ長かったねー」

ほのか「夏休み編、約４０話です！」

なつじ「どんだけ長いんだよ！！」

苑子「８月からやっててかれこれ１２月っすよ。サマーからウィンターですよ奥さん」

なつじ「奥さん誰だよ」

さいほの「とりあえず……読者の皆様、ダメダメ作者が書いたこの夏休み編を今まで読んでいただきありがとうございました」

ほのか「ホント、長引いてしまって申し訳ありません！！」

苑子「次回からは普通の日常になると思うんでよろしくお願いしま

ーす☆」

なつじ「では、これからもよろしくお願いしまーす！！」

ということでやっと、夏休み編完結です。ホントに長かったな……

……

次回からは季節吹っ飛んで冬になります。クリスマスや年末の話とか書きたいです。

では、読んでくださりありがとうございました！！

感想・意見・質問などありましたらお願いします！！

その５６　冬の風物詩（前書き）

実はかくかくしかじかで

なるほど

ｂｙ苑子、日本

久しぶりに日常的なのを書きました……

さいほのがキャラ崩壊してますｗ

その５６　冬の風物詩

雪がちらつく季節、冬。
もうすぐで年も明けるその時期、
私達はこたつに入ってみかんやらアイスやらを食べてのんびりしていた。

ほのか「うぅー……寒いねー」

なつじ「もう最近急に寒くなっちゃったねー」

苑子「ほんとだよー、もぐもぐ」

私達がのーんびりみかんやアイスを食べながら話していると……

さいほの「ホント急に寒くなりすぎだよ!!そりゃいきなり夏から冬になったんだからな!!」

さいほのがテーブルをバァンッ!!と叩いて私達に怒鳴った。
お、お茶がこぼれるわアホ!!

ほのか「な、なんでそんなにキレぎみ!?」

さいほの「そりゃキレるわ!!夏休み終わったと思って涼しい秋を

楽しみにしてたらいきなり雪がちらつく冬!?何さりげなくワンシーズンふってばしてんだ!気温変わり過ぎじゃボケェ!!」

なつじ「何をそんなにキレる!?」

苑子「さ、さいほのがご乱心だぁぁああ!!」

ほのか「つかさいほの別に秋好きじゃないよね?」

さいほの「うん」

ほのか「じゃあ怒ることなくね?」

さいほの「黙れぇぇえええ!!」

ほのか「いきなり怒鳴らんといてぇぇえええ!!」

耳元で叫ぶな!

日本「どうかなさいましたか?」

家の仕事を済ませた日本が襖を開けて私達のいる居間に入ってきた。

さいほの「いや何も」

なつじ「何もねーわけねーだろ。元凶のお前が言うな。」

苑子「実はかくかくしかじかで」

日本「なるほど」

わかるんかい。

日本「さいほのさん、秋もいいですけど冬もいいですよ。雪や活気溢れる街、そして何より行事がたくさんあってとても楽しい季節です」

さすが日本。四季を愛する国☆

さいほの「そーか？ただ寒いだけじゃん」

なつじ「そんなことあらへんよ！！私は冬好きだよ！！」

苑子「名前が『なつみ』だから？」

なつじ「いや字違うから。『夏美』とか名前に夏入ってないし。『菜摘』だから、私」

そんな全否定しなくても……

苑子「さいほの、日本も言ってた通り冬にはいろんな楽しい行事があるんだよ？」

さいほの「例えば？」

苑子「私の誕生日！」

なつじ「知らねーよんなもん」

ほのか「じゃあ私の誕生日……」

なつじ「同じボケはいいから。そんなことよりもっと大きい行事があるでしょ」

そんなこと言うな！！

さいほの「それって……」

なつじ「そう……クリスマス！！」

なつじがやけに目を輝かせて言った。

その５６　冬の風物詩（後書き）

～反省会～

なつじ「やっぱこたつに入りながら食べるといったらみかんだよねー」

ほのか「え、私アイスがいい。みかん苦手だし」

さいほの「こんなクソ寒い時期に普通アイス食うか？」

ほのか「暖かいこたつに入りながら冷たいアイスを食べるのがまたいいんじゃないか」

さいほの「ふぅん。まぁ私は別にどっちでもいいけどね」

なつじ「苑子はこたつに入りながら何食べるのが好き？」

苑子「んー？たけ○この里ー♪」

……

ほ・さ・な『予想外の答えキターーー……』

日本「たけ○この里って……；；」

苑子の答えにどうやって返すか困ってしまう４人であった……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0341t/

friend and world!!

2011年12月12日23時46分発行